

く
く
り



講話集

くくり

第三十回神道講演全国研修大会・石川大会

講話集

第三十回神道講演全国研修大会・石川大会

書名揮毫

白山比咩神社宮司村山和臣（第三十回神道講演全国研修大会会長）

白山比咩大神と同一神とされる菊理媛神は、黄泉国との境界で対峙する伊弉諾尊と伊弉冉尊に「このとき是時、くくりひめのかみ菊理媛神、また亦、もうすことあり有白事」とのみ『日本書紀』に記されております。この時、何を申されたかは不明ですが、このことから菊理媛神は、伊弉諾尊と伊弉冉尊を仲裁し仲直りさせたとして、むすびの神。現世・幽世の間を取り持った神。また、「くくり」は「括り」、「く潜り」とするケガレを祓う祓いの神、更に「聞き入れる」が転じたもの、糸を紡ぐ「括り」とする諸説があります。

書名『くくり』は、同神の恩頼を戴き、神明に奉仕する神職が氏子崇敬者に言霊を通し、神と人とを、むすび、くくる、とのことから書名と致しました。

目次

序

記念講演「感性を養う」

白山比咩神社宮司
白山比咩神社宮司

村山和臣

村山和臣

親と子

上谷義房

お遍路

村田和弘

煙の出ない「玉手箱」

河本文夫

「教え」

泉波宏宗

私の神道教化活動について

葛原秀史

第二十三回全国地芝居サミットイン神戸を終えて

畠田明彦

教誨師一年生

米田郷海

餅

小林晴美

神話で学ぶ日本の国柄

後藤大志郎

視点

中木屋豊

山岳信仰（立山信仰を中心に）

高倉吉樹

神道における信仰の対象

しほがまさまの祭り

世の中の人の鏡

「千の約束」——英霊の奥様方から教えていただいたこと

心に留めております言葉をもとに

国旗・国家を大切にする民族になろう

ニホンオオカミとその信仰について思うこと

先人達からの智恵・昔話を通して学ぶ

人の運命は神様のみ知るところ

地元の神様・地元の神社

麻と稲

禊ぎと日常生活の清め

「松は緑に」——キリスト教に改宗を迫られた昭和天皇——

滝沢正太郎 74

菅原慶太 79

村瀬佳子 83

工藤智恵 87

田村優太郎 92

井出 舜 97

山口真生 103

青木信市 108

石塚智康 112

根本宗典 119

佐伯正則 122

高畠正寿 128

佐古建彦 132

若い力

温故知新

神楽舞に伝わる日本神話

「のはらのうた」と英語教育

直会の前に

現代の日本文化とは

「神さまのおみちびき」

剣風祭のあとで — 道場と神棚 —

神社参拝の作法

生活の中の神社

遷宮奉拝記

和の心

鎮守の森に生かされて

田中天善

廣井嗣雄

栗田明廣

鈴木明子

五十嵐章雄

延村久嗣

西尾酒子

芦原高穂

四柳光樹

黒木崇史

塩崎昇

村田和之

染谷淑子

138

143

147

151

158

163

167

176

181

186

190

196

201

中今を生きる

宮田 修

205

昭和天皇と南方熊楠翁

佐古 一 冽

209

『平家物語』に見る御祭神「長谷部信連」

山下 裕 嗣

213

紙面を賑わしている 終活と蘇活

寺 本 正 徳

223

神道講演全国協議会との出会いから

佐々木美津子

229

徳川家康公と久能山東照宮

落 合 偉 洲

235

第三十回神道講演全国研修大会・石川大会の記録

245

神道講演全国協議会役員名簿

248

神道講演全国大会のあゆみ

250

あとがき

石川大会実行委員長

佐 古 一 冽

252

序

この度、第三十回神道講演全国研修大会が当社を会場に開催されましたこと、有難く厚く御礼申し上げます。

過去数回に亘りお世話させて頂きましたが、年々車社会に押され、公共の交通機関が縮小される中、北陸鉄道石川線も鶴来駅より南側加賀一ノ宮駅までの区間が廃線となり、不便をおかけしておりますが、全国各地から多くの方々が、草深い当地へご参集下され光栄でございます。

当初は、北陸大会として福井県を会場とするというお話でありましたが、諸般の事情により当社を指名下され光栄でございます。

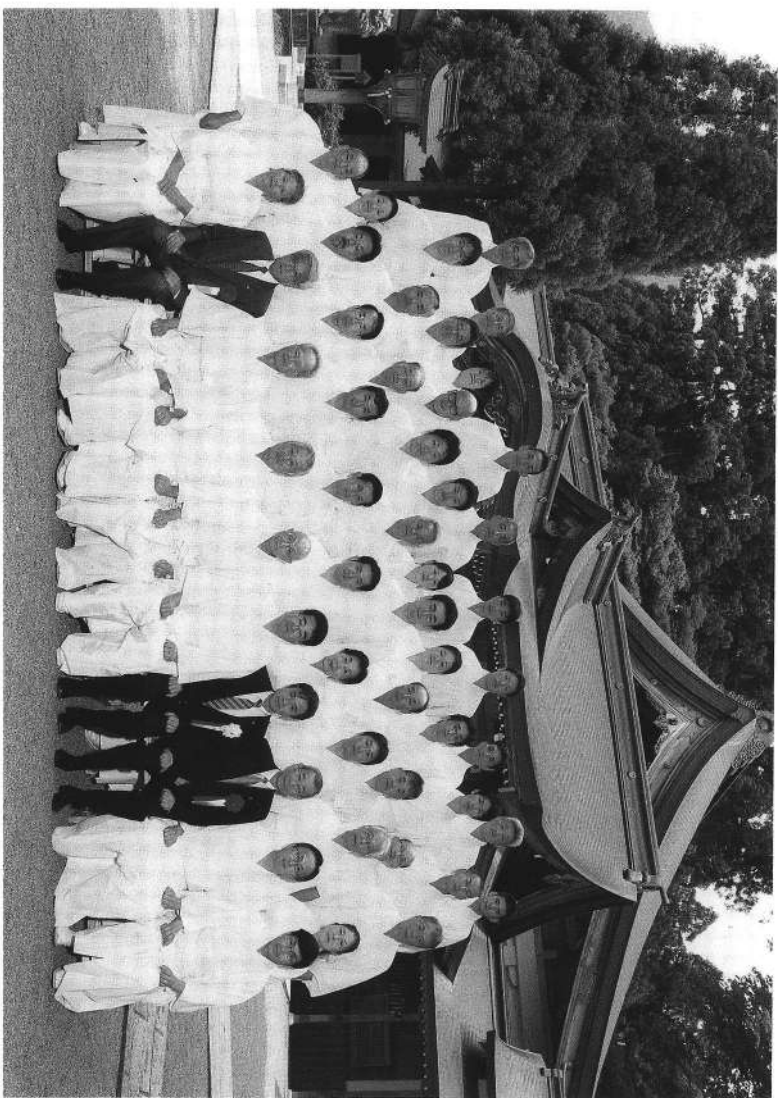
当社は自然豊かな、そして、山岳信仰の一つ「白山信仰」の中心でもあります。その自然の中で五感を研ぎ澄まし、目で見ても、美しいものは美しく、耳で聴いて、綺麗なものは綺麗に、舌で味わって、美味しいものは美味しく、肌で感じて、爽やかなものは爽やかに、鼻で嗅いで、香ばしいものは香ばしく、六感の心を常に清らかにもちたいものです。

さて、幸せはどこにあるのでしょうか。それは苦しみの向こう側にあります。喜びはどこにあるのでしょうか。それは悲しみの向こう側にあります。美味しいものはどこにあるのでしょうか。それはまずいものの向こうにあります。

みんなみな比べなければわからないのでしょうか。美しいものも、醜いものも、汚いものも、恐ろしいものも、怖いものも、全てを比較しなければ、幸せを感じないのでしょうか。

より良いものを、より美しいものを、より美味しいものを、それを向上心というのでしょうか、命とは何なのかを、素直に心に受け止めれる訓練は、やはり自然の中にあるのではないのでしょうか。

この集いに心を寄せる同志の皆さんには、それぞれの心の中にある神道、神社、氏子、崇敬者への思いを言挙げし、共々に考え、共に語り合い情報を交換し、より良い社会づくりに貢献することをご期待申し上げます。



第30回 神道講演演全国研修大会・石川大会 平成26年6月11日～13日 白山比咩神社

第三十回

神道講演全国研修大会・石川大会

とき 平成二十六年六月十一日～十三日
ところ 白山比咩神社

感性を養う

白山比咩神社 宮司 村山和臣

霊峰 白山

白山比咩神社の起源は、紀元前九十一年に、現在地から約一キロ北の舟岡山で始めてお祀りされたという記録があり、それから数えると二千百年を越える歴史があります。

海拔二七〇二メートルの「霊峰白山」は、古来より「麓から拝む」つまり神様が鎮まります神体山として信仰されてきました。

これは麓から皆が手を合わせ、白山から頂く恵みを農用水や生活用水として使用し、また日本海を航行する船の山だめとして、常に神様が私たちを見守って下さっているということから、麓から拝む信仰が生まれました。

六世紀始めに仏教が伝来し、役行者によって修験道が広められ、白山は養老元年（西暦七一七年）に越の大徳泰澄によって開山されました。白山開山以降、密教系の修験道が盛

んになり、白山は修験の道場として開かれていきます。

江戸時代は幕府の直轄地「天領」として治められておりましたが、時代も明治に入り大政奉還もあって、白山は国家管理となり、女人禁制も解かれ、明治五年に修験が廃止され、それ以後は老若男女、だれでも登れる山となり、戦後は国立公園に指定され、石川県側の登山口から頂上迄は白山奥宮の境内地として白山比咩神社がお預かりしております。

白山への登山道は三つありますが、登山口にそれぞれ馬場がもうけられ、加賀側の馬場が石川県白山市の白山本宮加賀一ノ宮白山比咩神社であり、越前側の馬場が福井県勝山市の平泉寺白山神社、美濃側の馬場が岐阜県郡上市の長滝白山神社であります。

そして、それぞれの馬場を本拠地として、加賀馬場は大汝峰に加賀室を、越前馬場は御前峰に越前室を美濃馬場は別山に美濃室を形成し、それぞれ隆盛を極めました。

山の日

先の国会にて、八月十一日を新たに「山の日」として祝日と定める「国民の祝日に関する法律」の改正案が可決・成立いたしました。平成二十八年から「山の日」がカレンダー

に加わることになります。

森林の環境保護、活用、植樹や育樹等、山に関わる私共としては「山の日」制定は「海の日」に対する「山の日」であり、祝日のなかった八月に祝日が増えるのは喜ばしいことではありますが、なぜ八月十一日なのかいささか疑問を抱きます。

白山開山は養老元年、西暦七一七年ですから、平成二十九年（二〇一七年）は白山開山一三〇〇年にあたります。旧暦六月十八日に越前の僧泰澄が登頂されたと伝えられていますので、当社では月遅れの七月十八日に毎年白山奥宮で大祭を斎行しています。

全国の主な霊峰の開山を見てみると、富士山と石鎚山は、役行者の関係で七〇一年、出羽三山は約一四〇〇年前に三十二代崇峻天皇の皇子蜂子皇子が三山を開山され、熊野三山は開山年不明など、それぞれの山にはそれぞれの開山伝説があり、月日までは特定されていません。

さて、現在は祝祭日法により、成人の日や敬老の日、体育の日等は、三連休（ハッピーマンデー）と称し、全く関係のない月曜日にされてしまいました。

成人の日に至っては、地域の公的な成人式は、その前日（日曜）か前々日（土曜）に実施し、新たに成人の日とされた月曜日に式典を実施している市町村は五〇％を割っており

ます。

祝日には、それぞれそれなりの歴史的理由があつて祝日とされている訳であり、ただ単に三連休の為だけに祝日を移動し、このことで、日本の大事な歴史が廃れ、失われていくということはいかななものかと考えます。

ご縁日と月のおはなし

神様・仏様には、それぞれゆかりのご縁日があります。

神仏習合時代の本地垂迹説では、白山の神様は十一面観音とされ、観音様のご縁日が十八日なので、白山の開山は十八日にされたと考えられます。近年、祭典日（神輿渡御）も土曜・日曜に行う傾向があります。

過疎地域の祭典は、参列者が老人だけで若い人等の参列が少なくなってきたのはわかりますが、若者等の参加を求める為に祭典日を土曜・日曜に移動しても、若者は家族でレジャーやショッピングに出かけ、結局は老人しか参列しないのが現状であります。

やはり「おまつり」は「ご縁日」として大事に奉仕していかねばいけないと思います。

八幡さんのお祭りは旧暦八月十五日のお祭りですが今では月遅れの九月十五日に
斎行されています。

旧暦八月十五日は満月で、「十五夜」といいます。旧暦の秋は七月・八月・九月ですが、
その「中の秋」ですから「中秋」、満月は毎月旧暦十五日ですので、旧暦八月十五日の月を「中
秋の満月」「中秋の名月」といつて古くからお祭りや行事が行われてきました。

月は、二十九日周期で回っており、太陰暦の基本となっています。

昔の文字は、人間の体の名称につくへんが「月」（にくずき）であり、体は月の力によつ
て左右され、私たちは月と太陽の引力に大きく影響を受けて生かされて生きている訳であ
ります。

自然界では、満月と新月の時に大潮が発生します。月の力というのは強く、動物であつ
ても、植物であっても、すべてがその力によつて生きており、逆らうことはできません。
その中で、動物のカニやカメは、満月を察知して産卵しますし、樹木では満月になると
養分が引力で枝葉に運ばれ、新月になると逆にその作用が薄くなり、地中に養分が戻ると
いう、繰り返しをしています。

そういう自然界の中でどうやって後世に子孫を残していくかは、動物や植物は分かつて

おり、分かっていないのは、感性がなくなってしまった人間ではないでしょうか。

余談ですが、「満月の時に伐った木には白蟻がつきやすく、新月の時に伐った木には白蟻がつきにくい。」とか「植物では満月の時の葉の物は美味しい、新月の時は根の物が美味しい。」といわれております。

人間は文明の力や知識によって、このような感性を退化させてしまったように思います。

白山登拝と六根清浄

当社の神職・舞女は、標高二四五〇メートルの室堂平にある奥宮祈祷殿の社務所で七月・八月の二ヶ月間、交替で泊まり込みの勤務をします。

朝、お日の出の約二時間前のおよそ午前三時頃、天候などお山の様子を確認し、白衣・袴に着替え、お日の出の約一時間前に「太鼓」を打ちます。

月明かりの頂上道約一キロを、下駄履きで、三〇分から四〇分かけて登ります。

お日の出の三〇分位前になると、周囲はしらじら明けになり懷中電灯もいらなくなる頃、這松の陰や岩の上からカヤクグリやイワヒバリなどの鳥の声が聞こえてきます。これは陽

差しを受けた植物が光合成によって酸素を出すからであり、その酸素によって鳥たちが朝を感じて鳴くのです。

気温はおよそ一〇度前後、寒い日は五度位迄下がり、それに風が強ければ体感温度は三度位になります。

私達は、二七〇メートルの白山御前峰頂上にある奥宮へ到着後ご本殿の扉を開き、日供祭の準備をします。

祭典準備が整ったら、お日の出を待つ間、神職は山の歴史や信仰、高山植物や自然、目のアルプス連峰（立山・穂高・乗鞍・御岳など）を説明し、剣ヶ峰や大汝峰、能登半島から金沢、福井、岐阜など眼下の景観を解説、翠ヶ池など大小七つの火口湖を巡るお池めぐりコースの説明や、自然観察会の案内などをします。

お日の出を拝したのち、神職の先導で世界平和、皇室の安泰、国家の弥栄、登拝安全を祈念し万歳を三唱します。

その後、奥宮にて日供祭に併せご祈祷を奉仕し室堂平へ下山します。多くの登山者は自然解説員と共にお池めぐりコース（室堂迄約一時間）を巡ります。

室堂では、午前六時半頃より朝食が始まり、祈祷殿ではお札（ふだ）やお守りの授与、

ご朱印の対応をします。

神体山に登らせて頂く時に修験道では「六根清浄」と唱えながら一步一步登って行きますが、「六根清浄」とは「目・耳・鼻・口・皮膚」の五感に「心」を加えたものであり、見ても、聞いても、嗅いでも、言っても、触れても、思っても、諸々の法は影^{かげ}と像^{かたち}がある如く清く潔ければ、仮にも穢れることは無いと教え、大自然の中で感性を研ぐのであります。

生きる

最近の新聞記事で、中東の「アルジャジーラ」というテレビ局が「今の日本は世界で最も不思議な国と思う。なぜなら一年間に孤独死する人が三三〇〇〇人。自殺者が三二〇〇〇人。合計六五〇〇〇人の生命が失われている。中東で戦争が起こっても一年間に六五〇〇〇人の死者は出ない……。」と。

私たちは戦前・戦中そして戦後間もない頃、一つ屋根の下で親兄弟全員が食卓を囲み、楽しかったこと、苦しいこと、悲しいことなどなど、一日の出来事を皆で語りあい、薄暗

い部屋で共に学び、家族みんなが「助け合い」の心で腹八分目の生活をしてきましたし、我慢もしてきました。

それが現代社会においては核家族化し、食事も家族全員揃って食べることがなくなり、いつでも自由に調理済み食品やファーストフードで満腹になるまで食べ、我慢することを忘れてしまったように思います。

その原因が電気だと思います。人と人とのつながりが携帯電話やメール、チャットなどに依存し、「手かげん」ということを知らず、親から頂戴した大切な大切な生命を奪い、又、自らも落としてしまう現実、人として「神意に叶っている」と言えるのでしょうか。

私たち宗教者は親と子のつながり、人と人のつながり、心と心のつながりを説いていかなければなりません。

今現在生きているのは何故か。なんのために生きているのか。

人には二人の親があり、その両親にはそれぞれのまた親がいるので四人、この四人の方々はお爺ちゃん・お婆ちゃん（祖父母）になるわけで、そのまた親はひいお爺ちゃん・ひいお婆ちゃん（曾祖父母）として八人いらっしやいます。

今上陛下は第一二五代ですが、仮にご先祖を二五代まで遡って数えると、三三五五四四

三二人の親が存在することになり、一人かけても自分は存在しないことになるのであります。

私たちは、祖父母四人の名前ぐらいまでしか思い出せません。まして曾祖父母八人の名前をすぐに言える人というのはほとんどいないのではないのでしょうか。そうすると三代ぐらいから上は、まとめてご先祖さまということになります。

「恕」 思いあう心

「恕」というのは相手を思いやる心を指します。これは論語にも出てきますが、自分がいやだと思うようなことは、他人にもしてはならないという事でもあります。

これは鹿児島県の知覧から飛び立っていった若き特攻隊員たちに心を捧げ尽くしたあるおばあちゃんの話ですが、『人は誰かの役に立つとか、立たないとかではなく、相手を思う心が大切だということです。それは思いやりとは違うと思います。思いやりは片方が高い所から思っていてやっているという言葉であって、「思い合う心」は双方が同じ目線に立つて初めて成り立つことでもあります。』と。

これらはもともと日本人が備えていたものであります。
今一度思いあう心、寄り添う心を考えて頂きたいと思ひます。

ゆずり葉

最後に当社の「崇敬者のつどい」という講演会で常田常男さんからお話して頂いた昭和七年の河井醉茗の「ゆずり葉」を紹介したいと思います。

子供たちよ。

これはゆずり葉の木です。

このゆずり葉は

新しい葉が出来ると

入り代わって古い葉が落ちてしまうのです。

こんなに厚い葉

こんなに大きい葉でも

新しい葉が出来ると無造作に落ちる

新しい葉にいのちをゆずってー

子供たちよ

お前たちは何をほしがらないでも

すべてのものがお前たちにゆずられるのです

太陽のめぐるかぎり

ゆずられるものは絶えません。

かがやける大都会も

そっくりお前たちがゆずり受けるのです。

読みきれないほどの書物も

幸福なる子供たちよ

お前たちの手はまだ小さいけれどー。

世のお父さん、お母さんたちは

何一つ持ってゆかない。

みんなお前たちにゆずってゆくために

いのちあるもの、よいもの、美しいものを、

一生懸命に造っています。

今、お前たちは気が付かないけれど
ひとりでいのちは延びる。

鳥のようにうたい、花のように笑っている間に
気が付いてきます。

そしたら子供たちよ。

もう一度ゆずり葉の木の下に立って
ゆずり葉を見るときが来るでしょう。

人は一人で生きているという錯覚、勘違いをしているように思います。人は必ずしも一人では生きてはいけません。

人は今、遠い先祖から戴いた命を未来へ継いでいく大切な「中今」に生きているということを改めて認識し、生きるためには自然の恵みに感謝し、畏怖と畏敬の念を以て感性を養うことが肝要ではないかと考えます。

ご静聴ありがとうございました。

親と子

上谷義房

本日は「親と子」について、お話をさせていただきたいと思います。

私は松尾大社に奉職をして、今年で十二年目になります。もうこんなに長くお勤めをしているんだと改めて感じているところですが。私の実家は神社ではありません。ただ、父が神職として奈良県の神社に奉職しております。ですので、子供のころは父が神職をしているというだけで、自分も同じ道に進もうとは考えたこともありませんでした。しかし、大学三回生になり就職活動を始めるとなった時に、父から伊勢の皇學館大学に神道学専攻科という、一年間で資格を取ることが出来るコースがあるよと教えてもらいました。その話を聞いた時、自然とそのコースに進学をして神職になろうと思いました。やはり小さい時から神社を遊び場のようにしておりましたし、父が神社で働いているので、神社が身近な存在として捉えていたのでしょう。父の言葉が今の私を生んでくれました。

しかし本当は父の言葉だけではなく、両親、家族の普段の姿や私に対して愛情を持つて

育ててくれた、結果でもあるように思います。子供は親の背中を見て育つという言葉もありますし。両親にしっかりと育ててもらい、導いてもらえたことに感謝しなければならぬと思います。

そして私も両親と同じような立場になりました。私は今年で三十五歳になりますが、遅ればせながら二年前に結婚をいたしまして、現在、十一カ月になる娘がおります。これから私達夫婦は娘を育てていかなければなりません。今はハイハイができるようになり、ぐんまり立ちをし、家中を動き回って目が離せない状況になりました。娘が何をしていてもかわいく思えますし、一緒に居たいと思います。

これが数年経つと本当の子育てが始まるのかなと感じています。今のようにかわいいだけでは済まされないでしょうし、怒ること、注意することにも必要になってくると思います。それができるのかという不安もありますが、親である以上は子供をしっかりと育てる責任があります。私の両親も私をここまで育ててくれました。

実は最近、とても良い事が書いてある本に出会いました。ドロシー・ロー・ノルトさんの著書「子どもが育つ魔法の言葉」の中の詩「子は親の鏡」です。一部を抜粋して示させていただきます。

とげとげした家庭で育つと子供は乱暴になる・不安な気持ちで育てると子供も不安になる・子供を馬鹿にすると引つ込みじあんな子になる・親が他人を羨んでばかりいると子供も人を羨むようになる・励ましてあげれば子供は自信を持つようになる・広い心で接すればキレる子にはならない・誉めてあげれば子供は明るい子に育つ・愛してあげれば子供は人を愛することを学ぶ・認めてあげれば子供は自分が好きになる・見つめてあげれば子供は頑張り屋になる・分かち合いを教えれば子供は思いやりを学ぶ・やさしく思いやりを持つて育てれば子供はやさしい子に育つ、など。子供は親の鏡だそうです。子供を見れば、どのような親かがわかるということです。

これを読んで、そうかと思われました。こういう風に接してあげればいいのかと。しかし、考えてみるとごくごく普通のことのように入います。子供のことを大切に思い、愛情を持って育てることが重要だと。

そして、これにプラスして生活の中の基本的なことを見て覚えてもらう。

周りの人への「おはようございます」「こんにちは」などの挨拶やご飯を食べるときの手を合わせて「いただきます」「ごちそうさまでした」、相手への感謝の気持ち「ありがとう」などが普通にできる子に育ってほしいと思います。後は親の頑張り次第。しかしこれ

をプレッシャーに感じては逆効果になってしまうような気がします。自然体で望むことが大切なかもしれません。

そして私は神職です。神職として子供に教えるべきこともあると思います。

私たちの周りにはいつも神様がいて見守ってくれているんだよ。すべてのものに神様がいて大切にしないといけないよ。毎日食べているご飯も神様からのお恵みなんだよ。ご飯を食べることに感謝しないといけないね。だからご飯を食べるときに感謝する気持ちで「いただきます」「ごちそうさまでした」と言うのだよ。

神社にもお参りに行こうね。いつも家族仲良く元気に過ごせることに「ありがとう」を伝えようね。神様という存在をいつも感じてもらえるようになってもらいたいと思います。

また、少し大きくなってきたら、古事記や日本書紀などの神話も教えたいと思います。今の日本の教育では教わらない状況が続いていますが、私は少しづつでも教えてあげたい。日本の歴史であり、文化であるからです。ヨーロッパの国々ではギリシア・ローマ神話などをそれぞれ自分の国の神話の子供のときから教えているそうです。それが自分と国の歴史であり文化であるからです。それを知ることができれば、もっと自分の国のことを好きになれるでしょうし、もっと興味を持つことができると思います。日本の学校教育も変

わっていけばいいのですが。

子供にとってはまずは家庭での教育が大切だと思います。その中で私たちも子供から学んでいくことがたくさんあるはずです。お互いのことを大切に思い、接することこそ、本当に大事なことだと思います。お互いに学びながら成長していける家族が理想の家族であり、「親と子」なのかもしれません。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

お 遍 路

村 田 和 弘

昨年は出雲大社の六十年に一度の平成の大遷宮。次いで伊勢神宮第六十二回の式年遷宮に日本国中は祝賀で参拝者も多く、又、先人達が行ってきた日本人の心呼び起し関心が高まってまいりました。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」、今日はブームになっているご遍路さんについて考えてみたいと思います。

一番札所から八十八番まで、1450キロの道のりを、歩く時、人は何を考え、思うのでしょうか。心の癒し、自分探し、病気を治したい、人生をもう一度やり直したい。お遍路をする人々の気持ちは様々でしょう。けして簡単な道のりではありませんが、それをやり遂げることでやはり、以前とは違う自分を発見できることが大きいからではないでしょうか。

古代から、四国の地は修験者の修行の道でありました。真言宗を開いた空海の影響が強く、この遍路の道は室町時代に確立され、江戸中期には一般庶民の間にも浸透していきま

した。又、江戸時代にガイドブックが書かれ広まったことが大きく影響したのでしょう。

この巡礼というシステムには、だいたい二つの型があつて、キリスト教やイスラムでは一つの聖地だけに巡礼します。私たちの住む東洋やインドでは複数の聖地を巡っています。

日本では平安貴族による寺社参詣がはじめではないかとされていますが、末法思想が広まってからは仏教の信仰が大きくなったように感じられます。けして仏教の専売特許ではなく、伊勢神宮や熊野への参拝もまた、巡礼なのであり、神宮ではそれぞれの聖地を案内する御師が活躍していました。

四国遍路の札所も、明治の廃仏毀釈の前までは、神社が札所であつたところもあり、神社・仏閣への参詣は人々の心を捉えて止まないものでありました。

さて、四国のお遍路にはもう一つ忘れてはならない習慣があります。それは、お接待であります。お遍路さんに食べ物や飲み物、時には金銭も施される。お遍路の旅に出られない自分の代わりにお参りしてほしいという人々の心の表われなのです。四国の宿は、「お遍路です。」と伝えると信じられないほどの安い値段で泊めてくれたり、無料の宿泊施設もあります。お接待することによって、接待する側もご利益を得られるという考えです。

この接待する人々の心は、本当に温かく、今の若者が忘れ去っている、見返りを求めな

いのがよしとされる思いやりの心であります。お遍路をする人はお接待の人々の温かさに触れ、様々な事を思うでしょう。

何のためにお遍路をするのか。それはやはり、よりよい自分に出会うためではないかと私は思うのであります。

もう一つの巡礼の聖地である伊勢の神宮は二十年に一度、遷宮と言って社殿や神宝を新しく建て替え、それによって蘇り勢いを増しその姿は、常若と言われています。その若々しく生まれ変わるかのごとき遷宮の姿が、人々の心を伊勢へと向かわせるのです。親子の命のつながりにも似た伊勢の姿は、生みの子の八十続きに至るまでと祈る日本の伝統の姿であります。しかし、残念ながら我々一人一人の命は、現実には一度限りのもので、生まれてから常に老いへと向かい、蘇るという事はありません。だからこそ、素晴らしい人生を若々しく送るためには、心を蘇らせることが必要なのだとの思いであります。

お遍路に行かなくとも、人生の節目節目で、自分が清く正しく生きているか、見つめ直し、心新たに出発することが出来るのであります。

それは、神棚の前で日々の生活を感謝し頭を下げることに同じなのです。人生は、お遍路の旅と言ってもよいのです。何を考え、思うか、どのタイミングで気づくか、人によっ

て違いは有るかもしれませんが、とにかく、前を向いて道を歩く。歩き続けることが大切なのであります。

(明治天皇御製)

大空に そびえて見ゆる高嶺にも

登ればのぼる 道はありけり

(広島県 長束神社 欄干)

煙の出ない「玉手箱」

河 本 文 夫

「昔むかし浦島は助けた亀に連れられて、竜宮城にきてみれば」と言えばご存知、浦島太郎という日本昔話。浦島は、乙姫様に頂いた「決して開けてはならぬ」と言われた「玉手箱」を開けたとたん、白い煙が立ち昇り瞬く間に浦島は白髪の老人に、この昔話はいったい何を私どもに教えているのでしょうか。ま、それはさておいて本日は、この物語に出てくる「玉手箱」についてある話を紹介したいと思います。

皆さん！「玉手箱」を見たことがありますか。開けたことがありますか。勿論ないでしょうね。神道の教えは、日用に有りと申します。すなわち日々の生活の中にその教えがあり、その最たるものが感謝の心ということになるかと思えます。そこで、本日はまさに日用にある話を紹介したいと思います。

宇部市の繁華街を外れた路地に小さな飲み屋さんがあります。現代風でいえば、スナックでしょうか、扉を開けるとカウンターがあり、椅子が十脚ばかりあります。中では、一

人のオーナーママさんが御相手してくれます。

若い子がいるわけでもない、これといって特徴のある店ではありません。壁の棚には、観光地で求めたような、記念品等が沢山並べてあります。壁には、絵や写真等が掲げてあり、多分お客さんが持つてきて物だと推測できます。

私は飲める方ではないので、行きつけのお店が有るわけではなく、ある会合の後、友人に誘われ足を踏み入れたのであります。そのママさんを交え、友人と他愛もない話をする中、カンテンターの端に置いてある小さな箱が目にとまりました。その箱には、「心の玉手箱」と書いてあったのです、私は気になり

「心の玉手箱って何ですか？」

「よろしかったら開けてみてください」

「まさか、開けたら、煙がでて、私はみる間に白髪の老人に！ ではないでしょうね」

「もしかしたら、そうかもしれないね！ でも、開けられて若くなった方もいらっしゃる。それは全てお客さんの心の決めるものです」

とこう来た。

ま！なんと意味深！

「お客さんの心」か…上手な受け答えだ。

まさか煙が出ることもないだろうと思い、私はそつと開けてみました。すると中に、小さなメモ。

そのメモには、あることが書かれていたのであります。

私は、そのメモも含めて、なぜこのような箱がおいてあるのか、なんとなく気にもなったのですが、その時は夜もふけており、その日は友人と店を後にして家路についたのでありますが、時を改め、再び私一人で、再び扉を開けたのです。

「あら、いらつしゃい」つと。

「お酒お飲みになりませんでしたね。よろしかったらコーヒーでもお作りしましょうか」すると、一人いた先客が

「あ、お客さん登場だ、さて僕は帰ろう。ママ、おあいそ」と

そしてその客は、私に向かって

「後はよろしくね」

と言つて、出て行ったのであります。

見も知らずの客に、「後はよろしくね」

この店の客は、このように言葉をかけて帰るのかなと不思議な感じです。

さて、その「心の玉手箱」のことを聞いてみました。

そこには、そのママさんの人生が語られていたのであります。

御多分にもれず、しあわせな結婚であったはずですが、ご主人の暴力で、離婚。幼い男を子を抱え、生きるため、幸いに子供はお母さんに見てもらって、夜の仕事を始めました。しかし、雇われでは収入も知れてると、知人の紹介で店舗を借ることが出来オーナーママさんとしてスタート。

「此のような仕事の経験もない、私によく続けられたものです。学生時分の専攻は児童心理、幼稚園の先生のはずでした。幼い子供の相手のはずが殿方の相手をすることになるなんて、人生って変ですよ。最初、水割りの作り方もわかりませんでした、どの程度の濃さにすればいいのか、むちゃくちゃですよ」と明るく話してくれました。

「こんな私にお店を続けられたのは、それは、全て友人のお陰です。本当に良いお客さんに恵まれたと思います。当時社交ダンスの会にいました。最初その会員が来てくれるんです。中にご夫婦で。その友人が、友人を呼んで、ここまで続けられました」

「本当に身近な人のお陰です。本当に感謝の気持でいっぱいです。人間って案外身近な

人に助けられているのに気がついていませんよね。ですから、身近な人に有難うを言おう！これが、この「心の玉手箱」の趣旨です。私がいいなと思った話をメモにして入れているのです」

とこう話してくれたのですした。

「此のお店に来られる方は、そんな良いお客さんばかりです。ですから先程の方も、「後にはよろしくね」そう言われるのではないですかね」

田舎町の片隅で、私がまさに神道の教えは日用に有るを体験した話でした。

さて、そこで、「心の玉手箱」のメモを紹介して、私の話を閉じたいと思います。とは言うものの、このオーナーママさんも、若い頃はそれは可愛くて素敵な女性と思われ、その素晴らしさに惹かれて扉を開けた客も多かったと思えることを付け加えてメモの紹介です。

タイトルは「母の弁当」

私の母は昔から体が弱くてそれが理由からか知らないが、母の作る弁当はお世辞にも華やかとは言えないほど見栄えの悪いものだった。

友達に見られるのが恥ずかしくて、毎日食堂へ行き、弁当はゴミ箱へ捨てていた。ある朝母が嬉しそうに「今日は○○ちゃんの大好きな海老入れといたよ」と私に言ってきた。私は生返事でそのまま学校へ行き、こっそり中身を確認した。すると確かに海老が入っていたが殻剥きもメチャクチャだし彩りも悪いし、とても食欲を感じなかった。

家に帰ると母は私に「今日の弁当美味しかった？」としつこく尋ねてきた。私はその時イライラしていたし、いつもの母の弁当に対する鬱憤も溜まっていたので「うるさいな！ あんな汚い弁当捨てたよ！もう作らなくていいから」と、ついきつく言ってしまった。」

母は悲しそうに「気付かなくてごめんね……」と言いそれから弁当を作らなくなった。それから半年後、母は亡くなった。私の知らない病気だった。母の遺品を整理していたら、日記が出てきた。中を見ると弁当の事が書いてあった。

「手の震えが止まらず、上手く卵焼が出来ない」と、

後悔で涙が出て止まらない。なぜ叶わない手で一生懸命作った弁当の母の気持ち判らなかつたか……。

身近な人に有難うを言おう！

「教え」

泉 波 宏 宗

いきなりですが、「天照教」はご存じありますか。日本には数多くの宗教団体が存在しますが、その中で、本日は私の実家でもあります「天照教」についてお話をさせていただきます。

その前に宗教とは何か？ 私たち人間にとってどのような存在なのか少しお話をさせていただきます。

皆さま、今まで一度も悩んだことがないという方はおられますでしょうか。悩んだことがない人はどこを探してもいないでしょう。人間は無意識に苦しみのない、幸せな人生を求めています。だからこそ、どんなに健康であつても、お金があつても、何不自由なく生活していても悩みは絶えず生まれてくるものなのです。その悩みは大きければ大きいほど苦しみも大きくなるのです。昔の人々も悩みを抱えることに神様に祈りを捧げております。それは、昔も今も変わってはいないのであります。悩み疲れたり、長年の夢や願いそれを

神様に祈ることで人間は癒され勇気ややる気がでくるものだと思います。このようなことから、宗教は人間にはなくてはならないものなのです。

私の実家、「天照教」も悩みを抱えた祖父と祖母が頼るところもなくある宗教に相談に行ったことがきっかけで昭和二十八年に立教しました。祖父は当時、小学校の教師をしていましたが結核になり、医者にも見放され、宗教団体（御嶽教）へ相談に行き、そこでそこにいた方に「あなたが今病気で苦しんでいるのは神様にお使いしなさいという、神からのお知らせなのです。そうすれば神様は命を与える」とお声を掛けられたそうです。この約束を守らなければ三ヶ月の命である。と申され、その言葉を信じ神のお仕え者となった。皆さまもお思いになると思いますが、今の私ならすぐにその言葉を理解して、「はい、わかりました。」とは返事できないでしょう。しかし、祖父母は最初、その言葉に驚くばかりでしたが、死にたくない、死にたくないという二人の心の一致で修行をし、立教に至りました。

「天照教」は字の通り「アマテラス」でありますから御祭神は天照大神、また大国大神、また恵比須大神の三柱を祀っており、仏（阿弥陀如来）も同時に祀って、神仏習合として信仰しております。

神の道、仏の道、人の正しき道の三つを説いてお教えしております。なぜ神の仏かと思う方もおられるでしょう。

人は神の子であり、親神様こそが真の人間の親様。その魂の親様の神様を父親として、私たち人間の肉体の親様の仏様を母親とたとえる教えだからなのです。それが天照教の考えであります。

神の道とは天と地の恵みにより生かされることに感謝の気持ちをもつこと。仏の道とは、私たち両親のお陰によって誕生し両親もまた、それぞれの両親（先祖代々）のお陰によってこの世に誕生してきたのであります。私たち、先祖からの「命の継承」によって存在している。御先祖に感謝の心をもち、供養する、これも私たち人間の役目でもあります。供養といいますが人間ばかりではなく、動物、また植物、生き物すべてからの命を頂き、その恵みにより生かされているという自覚とともに感謝の気持ちをこめて、動植物すべての供養も大切になってくるのです。

教えの最後の一人の正しき道がありますが、素直な心をもち、他人の気持ちになって物事を考える心をもつ。そして他人の幸福を自分のことのように喜べる心を持つことなのです。私が述べたこと以外にも正しき道は複数あると思いますが、常識・礼儀・教養を身

につけことで、人間としての正しいお教えしております。

神仏を敬い、自然の恵みに感謝はもちろんのこと、清く正しい心で仲良く助け合う「明るい社会を築く」こと。日本いや世界中には悩みを抱え苦しむ人々はたくさんおられます。神仏の救いを信じ、現世、来世における幸福を願う。感謝の心を持ち信仰に勤しむ。これこそが人々を救う道にもつながってくるのです。

(京都府 松尾大社 出仕)

私の神道教化活動について

葛原 秀史

能登半島の先端、石川県珠洲市飯田町に鎮座します春日神社は、お陰様をもちまして平成二十三年に御鎮座七百五十年の佳節を迎えました。氏子の皆様の御協力に依りまして厳かに且つ盛大に式年大祭を斎行することができました。また、この大祭に向けて平成十一年より宮司の居宅、社務所、神輿庫の新築工事、本殿の改修工事、鎮守の森の整備など一連の境内整備事業を進めてまいりまして、氏子の皆様の御理解と御奉賛をたまわり、無事に完遂することができました。これもひとえに春日の大神様の御神徳と氏子の皆様の温かい御支援の賜物であると感謝申し上げる次第です。

さて、私はこの大祭を契機として、氏子への神道教化活動に本腰を入れる覚悟をいたしました。これまでは神道青年会や神青協の活動のほうに重きを置いていたため、どうしても氏子への教化活動が疎かになっていた気がします。この反省をふまえて三本柱での教化を進めています。

第一は大祓詞を読む会の開催です。これは毎月一日の月次祭に合わせて氏子の皆様と大祓詞を奉唱するという企画です。毎月一日、早朝に斎行されます月次祭に参列していただき、参列者全員で大祓詞を奉唱します。氏子代表による玉串奉奠も行います。祭典終了後、宮司の講話があり、そのちに氏子参列者との神道に関する討論や質疑応答を行います。

「神漏岐、神漏美の神様はどのような神様なのか」、「天津罪、国津罪とはどのような罪ですか」など言葉の解釈の質問あり、「なぜ大祓をするのですか」、「神道はいつごろ成立したのですか」など根本的な質疑あり。「天津罪とは水田耕作にかかわることで、耕作妨害、稲田横領、神聖な場所を汚すことなどの罪です。いのちのね」である稲がとれなくなることは祖神から賜ったいのちを絶つことになるので、天津罪になるのでしょうか」とこちらでも分かる範囲の精一杯の回答をします。さながら禅問答のような状況に陥ることもしばしばです。もう少し勉強しておけば良かったと後悔することばかり。サッカーの本田選手のコメントにあるように、やはり「いい準備をして本番に臨む」ことは非常に大切なことです。参列者からは「早朝の参拝は本当にすがすがしい」、「早朝に大祓を読むことで、気分がスッキリして心地よく仕事に行ける」など好評を得ています。まだまだ参列者は少ないのですが、続けることに意義がありますので、地道に取り組んで、将来は、大祭

同様、参列者で拝殿いっぱいになりたいと思っています。

教化活動の第二は雅楽会の結成です。式年大祭での雅楽は他町の雅楽会の皆様に応援していただきました。それで、春日神社も自前の雅楽会を持つべきという機運が氏子の中で高まり、青壮年層の方々を中心にして結成に至りました。能登半島はたいへん祭りの盛んな地域で、氏子は子供のころから山車の巡行における笛、太鼓の囃子に親しんでおりますので、意外とすんなり楽器には入っていくことができました。しかしながら始めたころは悪戦苦闘しました。まず指導者がいません。雅楽をやっている近隣の神職や他町の雅楽会会員に来ていただいたり、神青協の雅楽練習のCDなどを使って、週一回、皆仕事を終えた夜に練習をしています。結成から二年余りを経て、今では越天楽、五常楽急、陪臚、豊栄舞、それと豊栄舞をアレンジした鈴と扇を使う乙女舞の演奏ができるようになりました。本務社、春日神社での祭典はもちろんのこと、兼務神社での祭典にも積極的に出かけて演奏しています。演奏自体はまだまだ未熟でけっして上手いとは言えませんが、雅楽を通じて氏子の青壮年層が神社や神道に興味を持って関わってくれているので、喜ばしい限りです。いずれは小学生や中学生、高校生にも声をかけ参加してもらおうと考えています。余談ですが、以前から行っている教化で厄年会の神社奉仕があります。これはその年厄年に

当たる氏子が厄祓の参拝だけでなく、元旦の祭典や御神楽の太鼓・笛の演奏、また、祭典補助をするというものです。この奉仕がきっかけで雅楽会に入ってくれた方もいますので、良い相乗効果を生んでいます。

第三の教化活動として、巫女舞の普及に力を入れています。式年大祭では氏子の小学生に浦安の舞と乙女舞を舞ってもらいました。大祭は十月でしたので、夏休みから何度も何度も練習を重ねて、本番に臨みました。みんな予想以上に上手く舞うことができて、本人たちもさることながら、大神様、氏子の皆様も喜んでいただけたと思います。これを機に、新年の諸祭儀には高校生または中学生に豊栄舞を舞ってもらうことにしました。歳旦祭などの祭典はもちろん、年始の御神楽や厄祓など個人神楽にも舞うようにしています。中高生たちは受験勉強や部活の練習で忙しいのですが、ちゃんと時間をつくってくれて練習に励んでくれています。舞をする中高生全員が一緒に練習することが困難なため、指導する側は大変ですが、本番で華麗に舞う姿を見ると、充実した達成感があります。また結婚式などの臨時祭においても小学生の鈴の舞と巫女の奉仕をお願いします。子供たちにとってはとても良い経験になるのではないのでしょうか。

以上が私の教化活動の三本柱であります。これらの活動を通して、氏子の皆様に少しで

も神社に関わりをもっていただき、神道についての認識を深めていただきだきと思つています。昔は「神道は言挙げせず」と言うように神職は祭祀の奉仕のみ行えばよいという時代でしたが、現代では社頭講話や講演などで言葉で伝えていくことがいかに重要か、痛感いたします。ただ、言葉だけでは氏子の教化にはなりません。神職が氏子の方々と共に行動し、実践することが肝要であり、言葉による伝達と行動力、実践力が要求されます。私は三本柱の教化において、氏子の皆様とともに大祓を奉唱し、雅楽では笙と龍笛を吹き、子供たちに巫女舞を教えております。「継続は力なり」の精神で今後も教化に励んでいきたいと思ひます。

(石川県 春日神社 宮司)

第二十三回全国地芝居サミットイン神戸を終えて

畠田明彦

本日、第二十三回全国地芝居サミットイン神戸が上谷上^{かみじがみ}天満神社の境内にある農村歌舞伎舞台にて、六百名を超える観衆を得て盛大に執り行われました。そして今、場所を移して華麗な一千万ドルの夜景を望むここ六甲山ホテルに、北区長をはじめ市の教育委員会、全国の農村歌舞伎保存会、更に遠路宮崎県西都市からお越し頂き、貴重な神楽を特別に御奉納頂いた「尾八重^{おはえ}神楽」保存会の皆様、総勢約一五〇名の関係各位が集い、親交を深める交流会が開会されました。即懇親会と思いきや、それまでの約一時間、六名の意見発表があり、事務局の陰謀により僭越ながら私がそのトリを務めさせて頂く羽目になりました。宜しくお願い致します。

まず、私が奉職する本務神社、六條八幡宮の御由緒ですが、先日老人会でお話ししたら、三十分かかりました。でもご心配なく、早く乾杯に移れるよう精一杯努力を致します。

六條八幡宮は神戸市北区の旧山田十三ヶ村の氏神で、本日の開催地上谷上天満神社は私が兼務する二十社の内の一社です。

当八幡宮は往古神功皇后が三韓征伐（新羅征伐）に向かう途上、「我が山の丹土たんどで舟、兵具を塗り、軍衣を染め、丹浪にのみ（海水を掻き回して赤く濁らせる）をもちて出陣すれば勝利疑いなし」という丹生都比売命の御神託により、斎戒沐浴して丹生都比売命を氏神と仰ぐ丹生氏族より丹土を授かるために営んだ行宮址と伝えられています。この丹土は兼務社丹生神社が鎮座する丹生山たんじょうさんで採掘したと思われます。

時を経て平安時代中期、一条天皇の御代長徳元年（九九五）、周防国すおう（現山口県）の神仏習合の行者で、弘法大師の弟子である基燈法師きとうが各地を巡錫じゆんせきして当地に至り、神功皇后行宮址を応神天皇が修営された霊地であることを夢想の霊告に感じ、黒木の宝殿一字、若宮八幡宮を建立されました。さらに時代は下り、鳥羽天皇の御代保安四年（一一二三）に丹生山田庄の領主であった六條判官源為義（頼朝の祖父）が、京都六条左女牛ろくじょうさめがひ（醒ヶ井）の自邸に祀る左女牛八幡大神を勧請合祀し、古の若宮八幡宮を再造しました。―左女牛は左女牛井さめがひで、源頼義（八幡太郎義家の父）がこの地に築いた六條堀川邸内にあった井戸―これにより御神威は愈々増し、為義の称号をとって「六條八幡宮」と呼ばれるようになり

ました。この邸内社は現在「陶器神社」の通称で有名な京都市東山区五条坂に鎮座する若宮八幡宮です。（現社地へ遷座されたのは江戸時代です）

これ以上話すと長くなるので、詳しくはホームページをご覧頂ければ結構ですが、私が松尾大社に奉職し、二十九年間京都で過ごし、京都で妻を得たのも、何か深い御神縁があったのだとつくづく思います。

さて、私どもの地元山田町には数多くの文化遺産や伝説があります。原野地区に残る「栗花落の井」の白滝姫伝説、日本最古の民家「箱木千年家」、三木合戦において別所氏を支援したことから羽柴秀吉軍に焼き討ちされた丹生山明要寺（もし焼き討ちされなかったら、現在の比叡山以上の賑わいがあったと言われています）。このように山田には歴史のロマンが溢れています。中でも、源義経を山田村から鶴越、一ノ谷へと山中を案内した鷲尾三郎義久の末裔、鷲尾綱貞が文正元年（一四六六）に建立した六條八幡宮の三重塔（国指定重要文化財）は山田のシンボルです。山田は六條八幡宮を中心に栄えたといっても過言ではありません。

次に、本日このサミット開催に当たり、まず天満神社にて奉告祭を斎行致しました。過去に何度か農村歌舞伎の上演会が開催されていますが、実は一度も祭典が執り行われた事

がないのです。つまり、神社の境内で催しがあるのに、神様に奉告がなされなかったと言う事です。宮司も宮総代もただ保存会の人に上演の場所を貸す、ぐらいの気持ちだったのです。お恥ずかしい限りです。しかし氏子ではないある実行委員の方の提言により、今日神社にとって、神職にとって、最も大切な原則である「先ず神事」が叶い、真の神人^{まこと}和楽が実現できました。大神様もさぞかしお喜びの事と存じます。

最後に、氏子である山田町の方々は大変伝統を重んじます、新しい「試み」には消極的な面があります。「古き良き仕来り」を重視しすぎ、それに縛られ、肝心な神事の執行に支障を来している事も少なくありません。十年程前ですが、神幸祭での当番地区打合せ会で神輿唄を歌う子供の件で少々揉めた事がありました。「唄歌い」は昔から男の子と決まっています。しかし山田も御多分に漏れず過疎と高齢化が進み、子供が減少しています。男の子の人数が確保できないので女の子を参加させて良いか否か。結局私の判断で女子を参加させました。他の氏子から小言を言われましたが、「仕来り」が祭や神事の支障となるならば、それを改良して「新しい仕来り」を作らなければなりません。「伝統」を守るために支障となった「仕来り」を変える、或いは取り除く。それを決断する勇氣と実行する元気を、山田の中心である六條八幡宮の宮司がまず持たなければならぬと、今気を引

き締めているところです。

今回のサミットは新潟県の魚沼で開催とのこと。ご盛会を心よりお祈り申し上げます。それではお待たせ致しました。漸く乾杯の時間となりました。有難うございました。

(兵庫県 六條八幡宮 宮司)

教誨師一年生

米田郷海

昨年、平成二十五年九月に神社本庁より「教誨師」を拝命したばかりの新人教誨師です。本日は皆様に教誨師となった私の思いをお話しさせて頂きます。

はじめに教誨師とは一般の方々には聞きなれない言葉だと思っていますので少しご説明いたします。PC等で教誨師と検索すると「教誨（きょうかい）」とは、矯正施設において収容者・受刑者の徳性の育成や精神的救済を目的として行われる活動である。教誨を行う者のことを教誨師（きょうかいし）という。」とあります。矯正施設とは犯罪を行った者や非行のある少年を収容し、改善更生のための処遇を行う施設で法務省所管の刑務所や少年院等であります。

私が担当しているのは神奈川県にある某少年院です。少年院は、家庭裁判所から保護処分として送致され収容されている少年たちに対し、再犯や再非行を防止し、社会復帰を容易にし、社会的自立を図る目的で働きかける教育の施設です。神奈川県には刑務所や少年

院等五つの矯正施設があります。

私が担当する少年院は特別少年院という、身に著しい故障はないが、犯罪的傾向の進んだ、おおむね十六歳以上二十三歳未満の者を収容する施設で国際科もあり外国の少年も収容されています。全国の矯正施設には神道系・仏教系・キリスト系・諸教、各宗教の教誨師約千八百名がおり、その中で「神道」神社本庁教誨師は約百四十名ほどおります。神奈川県では現在六十一名の教誨師の中、神社本庁教誨師九名の神職の方々が各矯正施設にてお勤めをしています。

教誨の種類には全収容者を対象とする一般教誨、特定の希望者を対象とする集合教誨・グループ教誨、個人の希望による個人教誨、死亡時における棺前教誨などがあります。私が今まで行ったのは集合教誨やプール開き神事や収穫祭神事といった宗教教誨です。教誨師を拝命する前からプール開きや収穫祭の祭員として施設に出入りしていましたので施設の雰囲気はわかっていたつもりでしたが、いざ自分が教誨師という立場になってみると全く違うものでした。

昨年、初めて教誨師になり集合教誨をするために施設に行ったときは今でもそうなんです、何とも言えない緊張感に包まれます。前の日に妻の前で何度も模擬教誨をしていま

した。

そして、教誨（講話）にのぞむわけですが私の担当施設では毎週水曜日に担当の教誨師が五〇分ほど教誨を行います。月に一回は私も教誨を受け持っております。おもに集合教誨ですので数人の少年の前で講話をします。話す内容については特に施設からの要望等はなく自由ですがそれまでは講話といっても社頭で五分〜十分ぐらいの話をしたことがあるぐらいでした。ましてや講話する相手は何かしらの原因があつて非行や罪を犯してしまつた様々な悩みを抱える少年達であるということ。神社の由緒を社頭で説明するのとはわけが違います。

少しでも少年達の改善更生のきっかけになるような教誨（講話）をしなければと、色々な本を読んだりして模索している時、以前お世話になった事のある同じ神職でもあり元NHKアナウンサーの宮田修さんに教えて頂いた事を思い出しました。

宮田宮司さんは話し手のプロでありご著書「神道講話への誘い」の中でも聴き手を幸せにする話のテクニックを書いておられます。私はその中で教誨の中で実践している事がありません、それは少年達に対して難しい言葉を使わないという事です。

たとえば神道の事や古事記、日本書紀等の説明をしようとすると、少年達にはすぐに理

解できない言葉がたくさん出てきます。宮田さんは「講話している時に聴いてる人が言葉の意味や漢字がわからないと聴いてる人はその言葉の意味や漢字を考え始めます。そして考えている間は、次の話が耳に入りません。」と仰っておりました。私もその通りだと思います。ですから私は少年達に対し分りやすく、優しく簡単な言葉で、そしてどういう字を書くのかなど文字の説明などをしながら話すようにしています。

そして今、少年達に最も伝えたいのが「日本古来の教え」です。神職ならだれでも知っている自然と調和し自然を大切に、祖先を敬い、命の繋がりの中で生かされていることに感謝し皆で仲良くするという事。神道では「中今」といい、今の一瞬を大切に生きるということ。日本人の少年は勿論ですが、外国人の少年にも日本の素晴らしさ、大和心を知って頂きたいです。

また今回の研修大会の趣旨にもありますが、日本は「言霊の幸ふ国」であります。少年達には言葉は使い方ひとつで癒しにも凶器にもなるほど取り扱いには注意が必要なものなので、相手を思いやり常に物事を見直し聞き直し大切に言葉を使つて下さいと話しています。教誨とは先ほども申し上げましたが、収容者を教えさすことです。少年達に改善更生を働きかけるといふ容易でない使命を成し遂げるために、私自身も常に神職、日本人の

誇りを持って自己を磨き、人格の向上に努めなければなりません。

今は教誨師になったばかりの一年生で、教誨をするにも先人や先輩教誨師の先生方の言葉や考えを参考にしていますが、いつか私自身の言葉、「言霊」で一人でも多くの少年達がこれまでの人生を変え、立派に社会復帰していただく事が私の教誨師としての目標です。

（神奈川県 海南神社 欄宜）

餅

小林 晴 美

本日は、ようこそお参り頂きました。神社では、神様にお米やお酒を始め、お餅や鯛、その他色々なお供え物をいたしますが、今日は当神社で、お正月や例大祭等の大きな祭りに際し、二番目にお供えされます、お餅についてお話をいたします。

滋賀県には琵琶湖大橋の東西に、お餅の神様をお祀りした神社がございます。まず東側の野洲市に鎮座する、大笹原神社の境内に摂社・篠原神社があり、この神社を「餅の宮」と称します。由緒記によりますと、ご祭神である石凝姥命が天下り、この地を開き糯を植え、日のみ像を作ったところ鏡のように美しく出来た。そこで斎場を設け皇祖天神に献じたことにより、餅鏡（鏡餅）と称せられるようになったと古文書にあるところから、鏡餅発祥の地とされております。もとよりこの辺一帯の田圃は、梗を植えても糯米になるとさえ言われ、良質の糯米の産地であり篠原餅と呼ばれ、古く平安時代より江戸時代に至る長い年月、中仙道を行き交う旅人のお腹をもち続け、保存食やお土産品としてこの篠原餅は、

広く人々に知られるようになりました。

また、ここより琵琶湖大橋を西へ渡り、北へ少し行った処に小野神社があり、ご祭神は米餅搗大使主命で、日本で始めて餅搗きをした神様として崇敬されており、小野妹子・小野篁・小野道風等小野氏族の祖神であり、小野の地名の発祥地でもあります。

由緒記には「応神天皇の時、我が国で始めて命が餅の元である養を作つて以来、十一月二日には一三〇〇年続く古式養祭が行われている。この養祭には、新穀の餅米を前日より水に浸しておき、生のまま木臼で搗き堅め、藁のツトに納豆のように包んだ養が献供される。この養祭には、全国の菓子業界から参拝に訪れる。」とあります。

養と言う言葉が歴史の上に現れるのは今より三千年の昔、中国の周朝の時代の神饌の中に出てきますが、日本の餅の元祖ではないとされています。餅米の品種は、小野の御祭神が、粳米より改良して創り出したものであるとされており、琵琶湖をはさんで、餅の元祖である神様は、どちらなんだと言うことになりましたが、とにかく餅は養から変化したもので本来は人が食べるものではなく、神様に供える為に作られたものなのです。

皆様のご家庭では、お餅はお正月に頂くものという観念を、お持ちの方が多いと思いますが、では何故お正月に鏡餅をお供えし、お餅を食べるのか、お考えになられた方はいらっ

しゃいますか。

正月とは一年の始まりで、元日は年間を通じて、誰もが最も心改まる大切な節目の日であり、鎌倉時代末期に書かれた『徒然草』の中にも、「かくて明けゆくそらのけしき、昨日に変わりと見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする」とあり、平成の世の今でも元日を迎える日本人の心は同じであると言えます。

このお正月の行事は、年神様（稲の豊作をもたらす穀霊とも、稲作を守護する先祖の霊とも言う）を迎えて、五穀豊穡を祈る農耕儀礼が本来の姿で、年神様に供えるものが鏡餅であり、小さな丸餅は年玉であって、家族の一人一人に分配する風習で、この餅は、年神様から賜るものであると考えました。その年玉の玉は、タマ（靈魂）に通ずると考えましたので、年玉である餅を食することで、年頭に当たって生命の更新をはかろうとした訳です。現在のお年玉は違う意味になっていますが、福引も本来はお餅を使った呪いのことで、あることを念じながら柔らかな餅を引き合って、手元に残った餅の量で吉凶を占ったものなのです。

お正月以外にも昔は、人生儀礼の一つ一つに餅をつきました。まず妊娠をして帯祝いの際に、親類や近所の人に餅を配る。出産をすれば、お祝いに親元から「力もち」とか「は

らわたもち」と呼ばれる餅が届けられる。お七夜の名付けの祝いにも、親元から餅が届く。お宮詣の時には、誕生祝いを頂いた家に餅を搗いて配る。一年目の初誕生の祝いに一升の餅を搗き、子供に背負わせて成長を喜ぶと言う風に、餅は最高の晴れ食であつたのです。

しかし、同事に凶事の折りにも餅は搗きました。「耳塞ぎ餅」といって死者と同年の者は、その訃報を聞くや否や直ちに一臼の餅をついて、一片で耳を覆うと言う事がなされたり、「四十九餅」といって忌明けの餅の事で、一臼の餅を搗いて四十九の小餅をつくり、忌明けに参加した人の間で分配すると言う事がなされておりました。

これらの事は、地域により名称や餅の大きさ等違うようですが、それぞれに餅が、重要な儀礼食であつた事に違いはありません。

秋田県には、日本唯一「餅の館」があり色々な餅が百種類以上展示されていますが、その中の一つに、「歯固め餅」と名のついた餅があります。これは、お正月にお供えした鏡餅を、藁に包んで軒先等に吊るして干し餅として乾燥保存し、六月一日、歯固めの日といって、この乾燥した固い餅を食べて歯の根を固め、健康長寿を祈つたそうで、これを「歯固め餅」といいます。『日本歳時記』にも、「人は歯をもつて命とする。故に歯という文字を、よはひ（齢）とも読む也」とありますので、うなずける事かと思ひます。又、『類聚雑要抄』

には、平安末期の朝廷の料理献立の図があり、その中に御菌固めの配膳図があります。大根・押鮎・鹿肉などと並んで御鏡餅が見られ、菌固め餅は鏡餅であることがわかります。但し、この膳は形式的なもので口にされる事はなく、菌固め餅は見るだけのものであったらしいのです。

又、農業が今の様に機械化されていなかった時代に、使用された農具である鋤や鍬、生活に必要な囲炉裏の自在鉤、鍋や臼、芋桶等にまで、一年間の感謝をこめてお餅を供える風習があったこと等が、展示品でよくわかるようになっていきます。

ここで、もう一点「餅なし正月」と言う事をご紹介しますが、これは正月に、餅を搗かず・食べず・供えずという禁忌を継承している、家・一族・地域があるというものです。元旦（三ケ日）は餅が神に供えられているべき期間である為、人が食べる事を控え、三ケ日がすんでから雑煮にして食べる。

武田信玄の家臣を先祖にもつ家では、武田氏が滅び苦勞をした為、その苦勞を偲んで三ケ日は雑煮を食べない。又、反対に武田信玄に一族が攻め滅ぼされたのは、十二月二十九日の事だったので、暮れの祝い餅を搗かない。

昔、本家で正月準備の餅搗きをしている時、誤って合いどりしていた女中を、突き殺し

てしまった。その時以来この一族は、本家・分家とも鏡餅を搗かない。昔、餅搗きするとき火災にあったので、正月の神前に供えるお供え餅は搗かないしお供えもしない。

先祖が正月雑煮を食べて大病したので、雑煮を食べない同姓の家がある等、様々な理由で、餅なし正月と言う風習が生まれたようですが、これは他家と違うことをして、自分の家は本家であることのアピールともなったり、旧習を守り続ける事によって、旧家である事を誇示する伝統にもなったと言えます。

以上、お餅に関して興味深いお話のみ、いくつか述べましたが、お餅の歴史は千年以上あり、名称も数えきれない程ある為、充分にお話出来ませんでした。日本人にとって、いかにお餅が大切な役割を果たしていたかは、お伝え出来たと思います。

特に、鍬や鍋にまで感謝してお餅を供えたり、今や都会では生ゴミを漁るため嫌われ者の鳥にも山の神の使いだと崇め、「鳥の餅」として木の枝にぶら下げたり、「鼠の正月」と言って、鼠がいると家が繁盛すると信じられていた為、商売繁盛・家の繁盛を願って、鼠の通り道に餅を小さく切って供える風習があった等、古来より日本人は、器物にも命が宿っている、霊が宿っていると信じ、食べ物の中でも一番大切な餅を供え、鳥や動物達をも崇拜してきました。

このような、心優しい、心豊かな精神こそが神道精神であり、本来の日本人の姿なので
す。皆様も今日このように、当神社にお参り頂いたと言う事は、ご先祖様からの神道精神
を受け継いでおられることのあかしであると言えます。

どうか、その精神を子に孫に受け継いでいかれます事を願つてやみません。

(兵庫県 三石神社 権禰宜)

神話で学ぶ日本の国柄

後藤 大志郎

1 はじめに

大隅中学校の生徒の皆さん、おはようございます。

本日は、校外学習で八幡神社にようこそご参拝下さいました。

今日は良い機会ですので、これから「神話で学ぶ日本の国柄」というテーマでお話をしてみたいと思います。

「国柄」という言葉があります。人柄、家柄、土地柄、という言葉もあります。

「国柄」という言葉は、その国の一番の特長、根本的な性格や特質、その国をその国たらしめている本質といった意味です。

ところで皆さんは、日本という国の特長や本質について、これまで聞いたことや、考えたことが有りますか？

例えば、日本は島国である、緑が豊かで温暖な国である、国民が勤勉で礼儀正しい、などなど、日本の国には素晴らしい特長が沢山ありますね。

しかし、日本の国にはもっと大切に本質的な国柄があるのです。

そのことについて、古事記・日本書紀に記された神話の中から、

- ①イザナギ・イザナミがご祖先の神々から賜った「修理固成の神勅」の話
- ②天照大御神が瓊瓊杵尊にお授けになった「天壤無窮の神勅」の話
- ③神武天皇が御即位の時に発せられた「建国の詔」の話

この三つの話をとおして、日本の国の国柄について考えて見たいと思います。

2 修理固成の神勅

それではまず、「修理固成の神勅」の話です。

日本の神話は、アメノミナカヌシノ神、タカミムスビノ神、カミムスビノ神など、別天神（ことあまつかみ）から始まり、神世七代（かみよななよ）の物語に続いて、イザナギ・イザナミによる「国生み」「神生み」の物語に移ります。

神世七代のうち、最後に成ったイザナギ・イザナミに、天津神々（高天原の神々）は、下界の海を指し示しながら、「是の漂^{たなよへ}経る国を修^{おさ}め理^{つく}り固^{かた}め成^なせ」とお命じになり、天の沼矛を賜わって、国づくりの大事業をご委任なさいました。

神話には「御言持ちて」という言葉が出てきますが、これは「神様が命令される、お命じになる」という意味です。

また、「言依さす」という言葉が出てきますが、これは「神様に代わって、神様の代理として、そのことに当たるようご委任される」という意味です。

二つともとても大事な言葉です。

この「修理固成の神勅」には大切なことが二つ含まれています。

一つは、神々の最初の「御言（ご命令）」が、「日本の国は豊かな可能性を持った国であるけれども、それはまだ未完成である。皆で力を合わせてこれを立派な国として完成させなさい」というご命令であったことです。そして、神代の昔から、それが「日本の国づくりの理想と目標」「日本民族・日本国民の使命」になったことです。

もう一つは、この御言（ご命令）を達成するために、神々の言依さし（ご委任）を受けて、神々の代理たる天皇と国民が一体となって国づくりに励むという、「神々―天皇―国民の関係」が遠い神代の昔に定められた、ということです。

3 天壤無窮の神勅

次に、「天壤無窮の神勅」の話です。

さて、イザナギ・イザナミの国生み・神生みの事業の最後の場面で、イザナミが亡くなり、イザナギの禊（みそぎ）の中から天照大御神、月読尊、素戔鳴尊の三柱の神様が生まれました。

中でも、天照大御神は「此の子、みこ光華明彩ひかりうるわしくして、六合くわにの内に照り徹る」と称される最も気高く最も貴い神様でした。

そして、天照大御神は高天原、月読尊は夜の食国、素戔鳴尊は大海原を、治めるように定められました。

しかし、高天原でもない、夜の食国でもない、大海原でもない、地上の土地、私たち日本人が住む大切な場所、「日本の国」を誰が治めるのかという大事な問題がありました。

そこで、日本の国を統治するために、天照大御神とタカミムスビノ神の御言以て、皇孫・瓊瓊杵尊が天降られることになりました。

この時、天照大御神は瓊瓊杵尊に、八咫の鏡、八坂瓊の曲玉、草薙の剣、の三種の

寶物と共に、「天壤無窮の神勅」をお授けになりました。

それは、「葦原の千五百秋の端穂の国は、是れ、吾が子孫の王たるべき地なり。
いまし すめみまゆ しら 爾皇孫就きて治せ。行牟。さきくませ あまつひつぎ さかえ 寶祚の隆まさむこと、當に天壤と無窮べし」というものです。

「天壤無窮」とは、「天と地が極まりなきものであるように、天孫の御位と日本の国は永遠に栄えていくであろう」という意味です。

この神勅こそは、「日本の国が、日々秩序付けられている国であり、永遠に発展し続ける国である」、その原理（げんり）、基（もと）い、礎（いしずえ）をお定めになったものです。

そして皆さんには、この「天壤無窮の神勅」が、先にお話した「修理固成の神勅」を受け継ぎ、これと繋がっていることをお分かり頂けると思います。

4 神武天皇・建国の詔

もう一つ、「神武天皇・建国の詔」のお話をしたいと思います。

瓊瓊杵尊の降臨によって、初代・神武天皇につながる日向三代が始まります。

日向三代は、①ニニギノミコト、②ヒコホホデミノミコト、③ウガヤフキアエズノミコトと続きますが、これは神の世から人の世へと移行する過渡期だと考えられます。

さて、日向四代にあたるカムヤマトイワレヒコノミコト（後の神武天皇）は、「この地におれば天下の政を平安に治めることができるだろうか。さらに東方に都の地を求めよう」と、日向の地から「神武東征」に出発され、大和の地に到着して、数々の苦難の末にここを平定すると、橿原宮で初代天皇として即位されました。

そして、「恭みて寶位たかみくらひに臨み、以て元元おおみを鎮めんとす。上は則ち乾靈あまつかみの国を授けたまひし徳うつくしびに答へ、下は則ち皇孫すめみまの正を養ひたまひし心みこころを弘ひろむべし。然さて後に、六合くのにうち

を兼て都を開き、八紘あめのしたを掩おほひて宇いと為せむこと、亦また可よからずや」という詔を發して、建
國を宣言されました。

その前半は「この建国の大事業は自分の功業手柄で成就したものではない。天津神のお助けがあつたればのことだ。だから、この国は神々からの尊い授かりものである。まずは、この国を授けてくださった天津神の御徳に感謝し、それにおこたえするように努めなければならない」という意味です。

また後半は、「自分の祖先である皇孫・瓊瓊杵尊が正義と道義を育て上げられた御心をこの地上の国に弘めて行こうではないか」という決意を表明されたものです。

これは一言で言えば、天上の神々の御心を地上に受け継ぎ、それを国中に弘めて行くことによって、立派な国を作り上げて行こうという大構想です。

大和王権は、間もなく大和王朝に発展し、その後一度の王朝交代も無く、現在の日本国につながっています。そして、初代・神武天皇から、第百二十五代の今上陛下（現在の天皇）まで、連綿と一系の皇統が継承されているのです。

そして皆さんには、この「神武天皇・建国の詔」もまた、これまでお話しした「修理固成の神勅」「天壤無窮の神勅」と、その目指すところにおいて一貫していることをお分かり頂けたことと思います。

5 まとめ

以上、駆け足でしたが、「修理固成の神勅」「天壤無窮の神勅」「神武天皇・建国の詔」には、「日本の国の理想と目標」、そして「日本民族・日本国民の使命」が、まざまざと示されていることをお話しました。

そして、日本の国柄の本質が、「天皇を戴く国・日本」という比類のない国柄であることをお話しました。

「国恩」、「国から授かる恩」という言葉があります。

「その国に生まれ得て、生を全うし、身を安んじ得る」「すぐれた国に生まれたこと

から授かる恩」の事です。

私たちは、この「国恩」というものを感じざるを得ない国・日本に生まれました。これからも、この「日本の国柄」についてしっかりと学び、「天皇を戴く麗しい国・日本」を大切にして行こうではありませんか。

大隅中学校の生徒の皆さん、本日は八幡神社にご参拝、誠に有難うございました。

(鹿児島県 岩川八幡神社 権禰宜)

視 点

中 木 屋 豊

皆さん氷山の一角と云う言葉を御存じですね。物事の一部分しか表面に出てこない事を言いますが、それでは海水面に出ているのは、どれくらいでしょう。ご存知の方いらっしゃいますか。広辞苑には七分の一と書いてあります。溶けている内容、構成分子や気体などで違いがあるのでしょうか、百分の十三くらいだともいわれます。全てが見えるわけではないことの代表の一つである事は、間違いないことだと思われます。

さて、森の中に入って活動する、そんな体験学習を、山梨県北杜市清里のキープ協会で体験しました。第十三期教化モデル神社の研修会です。野外活動には様々な危険があります。その危険を事前に確認してから、活動計画を立て、参加者に知らせる必要があります。

危険の確認は、参加者が子供であつたら子供の目線で、いわゆる対象者に合わせる必要があります。深く考えないで行動しがちな子供には具体的に、一つ一つ丁寧な説明が求められます。歩くときに足元を良く見て、段差やくぼみを確認しよう。石が落ちてこないか、

歩くところが崩れないか、スズメ蜂や危険な動物・毒蛇・かぶれる植物などがないか、良く見て行動しましょう。では、「よく見る」とは何なのか、私達は、知っているものと思つて、ごく当然のこととして話をしてしまいがちです。実は知らない人が多い事に、気付いていないからです。

私達は、日差しがまぶしい時に「目」を細めます。逆に暗い時には、しっかり「目」を開け見つめます。光に反応して対応します。森の中でも上を向くと、目が細くなります。下を向くともちろん、しっかり目を開けてみています。光によつて見え方が違うと云うので、病院で働く看護師さんの、「看」の字は手をかざして良く見るための「目」と書きます。言われてみて、なるほどと実感できます。同じように「目」を閉じてみましょう。太陽の方向などは分かります。風向きもしかりです。「音」も意識できます。特に両手を耳に当てると、その方向の微妙な音がはっきりします。動物が耳を動かし、危険を察知したりします。あまり意識していない人が多い事なのですが、お年寄りが良く聞き返すときに、手を耳に当てるポーズをとります。理にかなっているのです。

そうした体験をしますと、これまで気づかないでいた事、見方を変えなくてはならない事などが、わかってきます。知ったつもりや思い込みなど、私たち大人には必ずと言って

いいほどありがたいのです。

たとえば心や思いはあるのですが見ることはできません。しかし、心配りや思いやりは、形に現れますので「目」にする事ができます。どうしたら目で見えないものを見ることはできるのでしょうか。大切な物はなかなか見えない気がします。その一つが「神様」です。その存在を証明する事は、簡単ではありません。「心」で見なくては見えないのです。多くの日本人が自然に受け継ぎ伝えて来た事なのに、現在の人たちは身近で無くなっているのでしょうか。心からの思いや願いをする時、深々とお辞儀をいたします。それを繰り返して、自分の心に偽りがないと、二度の拍手をいたします。この時間節を合わせたままだと「節」合わせです。つまり不幸せなのです。だから掌の「しわ」を合わせます。だから、幸せなのです。さらにダメ押しの意味を込めて、深々と拝礼するのです。これを二拝二拍手一拝と表現します。玉串に思いを込めて上げた後の作法です。専門家でない人に、どう理解して頂くのか？そんな視点が今ほど必要なのではないでしょうか。子どもたちは発達段階です。わかる言葉で、優しい態度で、すべての部分で対応が必要です。

今日おいでの子育て真っ最中の皆様、年々子供を取り巻く環境が、変化しています。今までの対応の仕方、少し視点を変えてはいかがでしょうか。良く見ていると、必ず信号が出

ていると思います。私達が気付かなかただけだと思っています。

子どもは、体験してこそそれを理解し、身につけることができます。危ないからさせないではなく、危ない事を体験して、その危険から身を守る術を学習するのです。その時しっかり見守る事が親の責任です。「親」と云う字は、木の上に立って見ると書きます。古くから子育てで、云われ続けた話です。是非様々な「体験学習」に、一緒に参加して親子の絆を深めて下さい。また鎮守の杜の探検会に参加下さい。お待ちしております。

(鹿児島県 稲荷神社 宮司)

山岳信仰（立山信仰を中心に）

高倉吉樹

私は國學院大學時代の四年間、夏休みに立山山頂の雄山神社にて、泊まり込みでアルパイトをしました。歩荷や売店販売を中心として、神職の奉仕もしました。その一年目、圧倒的な自然にすごく感動しました。

まずは、「満天の星の数」です。条件がよいと天空に天の川がはつきりと輝いています。この時、地球は銀河の一部だと実感できました。そんな日は流星がわずかの間にいくつも流れていきます。思わず手を合わせました。次に「ブロッケン現象」です。尾根沿いでよくおこる現象で、自分の影が霧に映り影のまわりに円を描くように虹ができるものです。御来光ともいわれ、神様が出現したように感じ、自然と手を合わせました。さらに、「山の雷」です。立山が晴れていても隣の薬師岳や白山では雷雲に覆われ、雷光が走っています。山の雷は横から来たり、下から来たりすることもあります。雷が近づくと当たらないようにと手を合わせました。

それ以来四十年近く、山の自然に魅せられ富山の山々をはじめ、全国の山々を歩きまわした。その中で感じたことは、日本はとても自然豊かな国であるということです。四季がはっきりとしていて、水に恵まれ、山地が多くそのほとんどが森林です。森林も多様であり、色々な緑が映えています。中でも残雪のブナ林の黄緑の色合いは絶妙です。

山は、豊かな水をはじめ、さまざまな恵をもたらしてくれます。日本各地の名峰の頂には、神社があり信仰の対象になっています。神道は自然崇拜から起こっていて、自然への畏敬や恵への感謝です。その自然崇拜の中でも神々しい白い嶺には、人をひきつける魅力があります。その中でも立山信仰を紹介します。

立山連邦は、東から僧ヶ岳、毛勝岳、劔岳、立山、薬師岳へと続く山脈で、立山は主峰の雄山、大汝、富士の折立を指しています。富山平野から眺望すると、白い峰の立山と雪を寄せ付けない急峻な黒い岩肌の劔岳が対比していて荘厳であり、とても美しい。奈良時代、国府が高岡にあったとき、万葉歌人の大伴家持は、立山を詠んでいます。その代表作が「立山に 降り積もる雪を 常夏に見れども飽かず 神からなしに」です。また、立山を遥拝する場所がいくつかありました。立山が平地から眺望できる所は、西が氷見市から海越しに見える立山、東が黒部市です。

立山はわが国で最も早くから開かれた山の一つです。縁起によれば、大宝元年（七〇一年）佐伯有若が越中の国司として在任中（黒部市犬山周辺の館）、その子の有頼が白鷹を追って立山の奥深くに入り、矢を射立てられた熊が阿弥陀如来に化身した姿に接し、立山を開山したと伝えられています。現在は雄山神社がその信仰の中心です。明治維新以前は神仏混合で仏教色の強い神社であり、立山修験の源でした。今は、立山連峰の主峰・雄山の山頂にある峯本社を中心に、山麓にある前立社壇・中宮祈願殿を加えた3社をもって構成されています。

「富山県史民俗編」によれば、戦前までの村落において、新川郡を中心として遅くとも十八才までに立山登拝をすべきであると言う風潮がありました。登拝しなかった者は、仲間内において何かと、攻撃の対象にされる雰囲気があったそうです。また、登拝者は全て新調した白装束を用意し、弟であっても兄の使い古しは使用せず、杖一本に至るまで新調したそうです。この習わしは学校登山の形で受け継がれ、富山県で現在、学校行事として立山登山を行う小学校が半数ほどあります。しかし、学校登山している中学校は減っています。私は、感受性の強い時期にこそ、学校行事として集団登山をしてほしいと思っています。自然に対する畏敬の念をはじめ、すがすがしい挨拶、励まし助け合う思いやり

の気持ちなど様々な教育的効果が大きいと思います。

江戸時代は、全国から白衣姿の人々が立山まいりに集まりました。立山権現の功德もさることながら、この山が非常に変化に富んでいて登山の楽しみとしての魅力もあったからです。芦峯寺から頂上までの旧道には、歴史的な古跡や伝説、名勝が至る所に存在しています。芦峯寺を發つと材木坂があり、日本一の落差のある称名滝を見ながら登り、広大な弥陀ヶ原にでます。弥陀ヶ原は、山上の大高原で池塘が散在し高山植物が咲き誇り、天上の樂園に感じます。さらに進むと修験者が修業した難所があり、そして地獄谷にでます。地獄谷は名の通り、谷一面が灰褐色に焼けただれ、あちこちで蒸気が噴き上げている凄惨な光景です。地獄谷から少し行くと雷鳥の多い沢があり、そこを少し登ると紺碧の水をたたえた池にでます。ここが室堂平で立山の雄姿がすばらしい。晴れていると雄山山頂からは、中部地方の名峰がほとんど見えます。そして黒い岩肌の劔岳が近くに見え、峰本社はその劔岳を祭神にするかのように鎮座しています。

私は個人的に劔岳が好きです。劔岳は富山平野から見ると、一つの先端を頂点として胸が透くような山容で立山を圧倒しています。そして、太刀の鋭さと鋼鉄のような強さ持った岩の殿堂です。立山は、「タチヤマ」（太刀の山）から来ており、もとは劔岳のことを指

していたのだと思います。また、劔岳は弘法大師が草鞋千足を費やしても登れなかったという伝説もあり、日本アルプスの山々が登り尽くされる最後までこの峰は残りました。新田次郎の「劔点の記」で有名になった話で、明治四十年に測量部の一行によって頂上が初めて踏まれたと思ったら、そこには平安時代の槍の穂と錫杖の頭がありました。はるか昔に強い意志と勇気をもった修験者が、劔岳の頂上に達したことは事実です。劔岳は、どの方角から眺めてもそれぞれに凜とした立派な山容を見せてくれ、思わず目が行き、幸せな気持ちにさせてくれます。

日本には、世界に誇る自然がたくさんあります。そして自然と神道の関わりや自然に対する畏敬の念を氏子に広めていけたらと思っています。

(富山県 龍尾神社 宮司)

神道における信仰の対象

滝沢 正太郎

参拝に來られた親子の会話です。

「ほれ、ちゃんと手を合わせなさい」「誰に?」「神様に」「どこにおるん?」「あの中や」「ふーん…ほんまにおるん?見たことあんの?」

子どもの年齢は五歳位でしょうか。授与所にいた私は、その男の子の姿に幼い頃の自身を重ね、思わず微笑んでしまいました。神社で育った私は、「あの中に本当に神様がいるのだろうか。」「どんな姿をしていて、どんな生活を送っているんだろう。」「なぜ神様に供えた食べ物は無くならないんだろう。」と、疑問に思いながらほんやり本殿を眺めていたものです。

一般的に、神道における信仰の対象や考え方は、イメージしづらく捉えどころがないと思われるがちです。その原因として、統一された教義がないことや、本殿に鎮座されている御神体を直接拝するような機会が無いこと等が挙げられます。神社に参拝に来て、今拝ん

でいる神様の御神名も知らない方が多いのではないのでしょうか。

では、なぜ多くの参拝者が神社に惹きつけられるのでしょうか。神宮では遷宮の関係もあって、去年一年間に一四二〇万人を越す参拝があったそうです。メディアによる啓蒙やパワースポットブームの他に、もっと根本的な理由があるはずです。

さて、これから申し上げることは、あくまで私のつたない経験から得た神道観であることを先にお断りしておきます。

恥ずかしながら、私は神職を志し皇学館大学に進学したにも関わらず、当時心から神様を信じる氣になれず、ただ漠然と「畏れ尊ぶもの」として教えられた通りに手を合わせているだけでした。こんな私が初めて神様の確かな存在に氣付かされたのは、趣味であるサーフィンをしている時でした。

在学中、サーフィンをするために志摩の阿児湾によく通っていた私は、ある日の夜、悩み事からなかなか寝付くことが出来ず、まだ暗いうちから海へ向かいました。そして、うつすら明るくなりだした頃を見計らい、沖に向かってパドルを始めました。波は小さく、もちろん入っているのは私ひとりでした。程なくして水平線から太陽が顔を出しました。それは、都会育ちの私にとって生まれて初めてはつきりと見る日の出だったのです。キラキ

ラと輝きを増していく海、徐々に明るくなっていく雲ひとつない空、寄せては返す波の音、微かな磯の香り……見慣れた景色の全てが新鮮に見えました。

「ああ、これが神様なんだ」

目には涙が溢れていました。私にとって初めて感じた神の氣配は、日の光によって命を吹き込まれた自然そのものだったのです。

神道は机の上で学ぶものではなく、まずは五感で感じ取るもの……そう氣付いたこの体験以降、私の神道観は大きく変わり、それまでは堅苦しくて狭義であったものから自由で身近なものになりました。儒学者で神道学者である若林強斎は、その著書「神道大意」にて、

水をひとつ汲といふとも、水には水の神靈がましますゆゑ、あれあそこには水の神罔象女神様が御座成れて、あだおろそかならぬ事におもひ、火にも木にも草にも、それぞれ神靈があるから、その神靈を崇めたてまつり、やれ大事とおそれつつしむが神道

訳しますと

朝夕に水瓶の水を汲む時にも、水には水の神靈がおられるのだから大切にしなければと思ひ、手に持った柄杓の水にも、「ここに水の神ミズハノメの神様がおられる」と尊び感

謝申し上げ、加えて火にも木にも草にもそれぞれ神様が宿っておられるのだから、その神様を尊び感謝し、常に尊き神のそこにあることを思い、これを大事と畏れつつしむことが神道である

と、説いております。自然界すべてのものに神は宿るというこの言葉にも心の底から共感でき、今では私の神道観の基盤となっています。

その後、椿大神社に奉職してからは、このような感動の連続でした。神社の背後につづく入道ヶ嶽には、神代の昔から祭祀が行われてきた磐座が点在し、境内にはこの入道ヶ嶽を源とした大明神川の流れを引く「金龍明神の瀧」が流れ、毎月多くの方がみそぎ修法をされております。樹齢五百年を超える大杉をはじめ、多くの緑に包まれた参道には、小動物や昆虫などの小さな命が戯れています。古の姿を残しつつも日々新しい生命の喜びを感じられるこの場所での祭典は、神道の素晴らしさを今に伝えます。

人は、なぜ神社に惹かれるのか。

それは、多くの人にとって身近で最も神の氣配を感じとれる場所、日常を離れ、清々しい気持ちになれる場所：それが神社（鎮守の杜）だからです。そこに理屈や教義は必要ないのです。神域に足を運び、呼吸をする：ただそれだけで無意識のうちに御祓いを受けて

いるのです。

御神体を御護りし、太古より連綿と続く祭祀を重ねる。その上で、一人でも多くの人を神域に導き、神の氣を感じていただくことこそ、神道教化の第一歩と確信しております。その為にも境内や社殿、仲取り持ちである自分自身は常に清浄を心がけ、せっかくの御神徳を損なわないよう努めることが神職の使命であると認識し、日々の奉仕に取り組んでおります。

これから神社を参拝される時は、私の話を少しでも思い出して頂き、ぜひ五感すべてで神様の氣を感じて頂きたいと思えます。

(三重県 椿大神社 権欄宜)

しほがまさまの祭り

菅 原 慶 太

日本三景の一つ、松島のすぐ近くに東北鎮護の神として奥州一宮と崇敬されている鹽竈神社があります。

神社がある一森山は氏子の皆さんから「おやま」と呼ばれ、神社の事を「しほがまさま」と親しみを込めて呼んでいます。

この塩竈の土地は古来より都人にとっては憧れの地だったようで、「塩竈」「塩竈の浦」を詠んだ和歌が数々の歌集に残されています。風光明媚な景色は平安の頃より変わらないようです。

この景色に憧れて都の自分の庭に塩竈の風景を真似た庭を造った貴族の話もあります。源融という嵯峨天皇の皇子で、陸奥出羽の按察史という役職に任ぜられましたが、実際に赴任したかどうかは分かりません。

塩竈にいつか来にけむ あさなぎに つりする舟は ここによらなむ

と、塩竈への憧れを詠った歌があります。

その塩竈に鎮座する鹽竈神社の神様は鹽土老翁神・武甕槌神・経津主神様です。主宰神は鹽土老翁神で海幸彦・山幸彦の神話で、困っている山幸彦を助けてくれる神様であり、神武天皇に「東によき国がある」事を教えたのもこの神様です。お導きの神様です。

又、「シオ」といいますから、「鹽」の神様、塩作りを教えた神様です。この製塩方法を今に伝える「藻塩焼神事」があります。竈に海水を入れて煮詰めて塩を作る方法は神様が塩竈の地に來て教えてくれたものです。そこから地名も「塩竈」となりました。さらに人間の生死には潮の満ち引きが関係してますから安産の神様として信仰され、五ヶ月目の戌の日には安産祈願に多くの人がお参りします。

さて、一年の始めの歳旦祭から数ある年間の祭典の中でも「まつり」として大きな賑いを見せるのが御神輿が出る氏子祭である三月十日の帆手祭、四月第四日曜日の花祭、海の日のみなと祭です。

帆手祭、花祭は共に江戸時代から始まったお祭りであり、帆手祭は火伏せの祭、花祭は不作に困った氏子が神社に祈願したところ、豊作となったので奉賽・感謝を込めて始めたものです。

みなと祭は昭和二十三年に始まりました。御神輿を御座船に乗せて松島湾を海上安全・大漁を祈願して巡行します。昭和三十九年からは志波彦神社の御神輿も揃って湾内を巡っています。御座船の御供の船は百隻近く勇壮な船祭です。

この氏子祭の中心は御神輿です。重さは約1トンで前後の担ぎ棒に八人ずつ計十六名が担ぎ約百名が交替で奉仕する習わしです。

担ぐのは氏子青年会を中心とする與丁会で白丁・覆面姿、神輿世話役会・先陣組・神子組・後陣組等三百名を超える氏子が御供します。

各御旅所を始め、市内には御神輿にお参りしようと大勢の市民が御迎えします。

特に二百二段の表坂を下る時や、市内巡行後に坂を上がる時は坂の両側は参拝者であふれます。担ぎ手に送られる声援は大きな力となります。

「神輿を担ぐ」という事は、担ぎ手には「誇り」だそうです。塩竈に生まれ育ったならば御神輿は担いで当たり前の事であり、「しほがまさま」と御縁を結ぶものです。幼い頃に見た白丁・覆面姿の担ぎ手は非常に格好良く見え、憧れの存在だった、という話を聞いたことがあります。

経験豊富な担ぎ手の肩は大きく瘤ができており、表坂の上り下りはベテランだけで、表

坂で担げるという事は一人前の與丁として認められたことなのです。

他県にいてもお祭には必ず戻ってきて担ぐ人もいれば、担がなくても見に来る人もいます。

神職の私には御神輿の御供する時、担ぎ手の疲れた中でも晴れやかな、そして誇らしげな姿を目にする度に羨ましく思えます。それは、私の故郷では塩竈程の盛大に氏子が一つになるようなまつりがなかったからです。

さらに祭の一週間前からは、夜毎に神社で禊をして心身共に清めて奉仕する姿を見るにつけ改めてその思いを強くします。

氏子にとっては塩竈さまのおまつりで「御神輿を担ぐ」ことが人を育て、そして次の代へと篤い思いを伝えていくことなのです。氏子の情熱に、よその土地から来て神職として奉仕している自分は励まされているのです。

塩竈で生まれた自分の子供が「しほがまさまのまつり」と共に何を感じて、成長していくか、楽しみでもあります。

(宮城県 志波彦神社鹽竈神社 権禰宜)

世の中の人の鏡

村瀬佳子

私は中学校で教師をしています。勤め先の学校の業務士さんから驚く話を伺いました。彼女には、ドイツに長年住むご友人が居られます。その友人の言葉です。

「私には二人の息子が居ます。その二人の息子は、一人はドイツ人の学校に通いました。もう一人は日本人の学校に通いました。それぞれ二人の子どもが大人になってどうなったかと言いますと、ドイツ人の学校に行つた子はドイツ人になりました。日本人の学校に行つた子は日本人になりました。」と。

これは、ドイツ人としての教育を受けた子がドイツ人になり、日本人の教育を受けた子が日本人になるという、考えてみれば当然のことかもしれません。ですが、これは、私たちが受ける教育というものがどれだけ重要かという事も表していると思います。人は小さい頃に教えられたことによって自分の根っこになる部分を育てるのです。どのような根っこを持つか、それが私たちの人生に全ての影響を及ぼします。

それでは、私たちが日本人としてどのような根っこを持てばよいのか、今日はそのお話をしたいと思います。

皆さんは、何の為に学ぶのですか。偉くなりたいからですか。お金持ちに成る為ですか。理由がわからない人も居るかもしれませんが。私は、男の子は立派なお父さんになる為、女の子は立派なお母さんになる為だと思っています。皆さんが大きくなって社会に出ます。人の為に働くのです。社会を良くする為に働くのです。そして、自分の子どもを授かった時、お父さんってすごい。尊敬するな。お母さんのようにになりたいなと思って貰えたら、自分の生きる道は間違っていない証拠となります。そして、さらに良いおじいさんとおばあさんになって欲しいと思います。

学ぶという言葉は、もともと「まねぶ」「真似る」から来た言葉です。私たちの御先祖様がどんなに素晴らしかったかを知り、それを真似て、さらに子ども達に真似てもらえるようにしっかり勉強しましょう。

皆さんには「世の中の人の鏡」となるような人に育って欲しいと思います。では、人の鏡とはどのような意味を持つのでしょうか。

中国の太宗皇帝の言葉や行いを集めたとされる、貞観政要という書物の中に、このよう

な言葉があります。

銅を以て鑑と為せば、衣冠を正すべし

古を以て鑑と為せば、興替を知るべし

人を以て鑑と為せば、得失を明らかにすべし

銅を鏡にすれば、衣服や冠の乱れを正しくすることが出来る。歴史を鏡にすれば、世の中がどうして盛んになったり衰えたりしたかが分かる。人を鏡とすれば何が良くて何が良くないかが分かる。この三つの鏡すべてが重要であるとされますが、私はこの、人の鏡が一番大事なのではないかと思えます。鏡というのは、人のお手本になるということです。人に真似てもらえるような立派な人間になりましょう。

そして、その鏡は何であるかと考えた時、それをずばり言い表した和歌があります。明治天皇の御后、昭憲皇太后の御歌に

朝ごとにむかふ鏡のくもりなく

あらまほしきは心なりけり

とあります。心です、心が大事なのです。もう一つ、

明治天皇の御製に

さかき葉にかくる鏡を鏡にて

人も心を磨けとぞ思ふ

とあります。

天皇・皇后両陛下は国のお父様であり、お母様です。私たちの住む日本は歴史が始まって以来、ずっとこの皇室の深い愛情に守られて発展して来しました。この国のお父様とお母様が私たちに心を磨いて立派な人間になるのですよ。とお手本を示して下さるのです。そして、神代の昔から続いてきたこの皇室の御祖先も、私たちの住む世界に降りて来られるとき、天照大神という皇室の最初の御祖先から、鏡を授けられたのです。

「吾が児、この宝鏡を視まさむこと、吾を視るが猶くすべし」私の御子よ、この宝鏡をご覧になることは、私を見るのと同じに考えよ。その仰せに従って、今上陛下に至るまで、三種の神器の一つにその鏡を受け継いで来られました。

私たち日本人は天照大神という大変尊い神様を真似て学んで尊い人間になる。そういう使命があるのです。大人になった時、こんな人になりたいなと思って貰えるように心を磨いていきましよう。

「千の約束」

―英霊の奥様方から教えていただいたこと

工藤 智恵

戦後六十九年がたとうとしています。先の大戦を知る人も数少なくなっていました。誰よりも英霊のことを大切に思っていた英霊の奥様方も亡くなる方が多くなりました。今日は皆様方に私が英霊の奥様方から教えていただいたことを、お話しさせていただきたいと思います。

私が松江護国神社にご奉仕するようになったのは、今から十九年前です。当時は奥様方もお元気でよく英霊のご命日にはお参りくださっていました。

英霊の奥様方、つまり戦争未亡人さん達は、ご主人様亡き後、たいへんな苦勞をなさってお子様を育て、家を守ってこられました。よく遺児さん達から「母は父親であり母親でもありました。とても強い人です。」というお話をうかがうことがあります、本当に力強い方々でした。

まだ若く苦勞知らずだった私は、そのころ奥様方の力強さに氣圧されてしまつて、せつかくお参りに来ていただいても、いったい何をお話していいのか分からず、ただ微笑みながらお茶をお出しすることしかできませんでした。

そんな日々が十年ほど続くうちに、状況は少しずつ變つてきました、私も四十才近くなり、人並みの悲しみも苦しみも経験しました。そんな私をみて奥様方から「あなた若いのにしっかりしているわね。」と言うお言葉をいただきました。

うれしかったです。あんなにご立派な奥様方に認めていただくことができたのですから。奥様方は、次第に私に心を開いて下さるようになりました。

そして、心の中の宝物とでも言うべき英霊との思い出話を聞かせていただくようになったのです。それはたとえばこんなお話です。

やすさんはね、とっても優しい人でした。

私たちが結婚したのは、私が十六、やすさんが二十三才の時でした。

結婚したばかりの頃、ある日二人で草刈りに出かけました。

やすさんが草を刈り始めた時、私は近くに綺麗な小川を見つけて草を刈るのも忘れて夢中になって水遊びをしていました。

気が付くとやすさんは自分の分と私の分。二人分の草をだまって刈っておいてくれました。

さあ帰ろうと、二人で草を背負って歩き出すと。私はなんだか嬉しくなつて、ぴよんぴよんと飛び跳ねながら歩いてゆきました。

家につく頃には背中の草は落ちて半分ほどになっていましたが、落とした草はやすさんが全部拾って持ってきてくれました。

やすさんが青年団の会合で遅く帰った夜は、先に休んでいた私の枕元に会合でもらったお菓子の包みをそっと置いておいてくれました。

私たちは、喧嘩もしたことがない仲のよい夫婦でした。

そんなある日、召集令状が届きました。

出征するまで、一週間程しかありません。

慌ただしく日は過ぎ、とうとう出征の日となつてしまいました。

その日の朝、やすさんは私たち家族を集めて、当時小学校二年生だった。長女の久代に長い長い巻物のようなものを手渡してこう言いました。

「久代、お父さんは久代に守つてほしい約束を千個書いておいた。久代は一日一つづつ

この約束を守りながらお父さんの帰りを待ちなさい。三年たったらお父さんは帰ってくるから。久代がこの千の約束を全部守るまでに、必ず帰るから、それまで約束を守りながらお母さんを助けてあげておくれ。」

出征するまでもとても忙しかったのに、いったい何時こんなものを書く時間があつたのでしょうか、千の約束は、驚くほど丁寧な字でかかれていました。

しかし、やすさんは帰らず届いたのは、戦死の知らせだけでした。

奥様がたは、こんなお話をされた後私に、

「私はもう年で、来年はお参りに来れないかもしれないから、護国神社をまもつてね。たのむわね。」

とおっしゃることがあります。私は、

「そんなことおっしゃらないでください。また来年も元氣でお参りください。」

というのですが、次の年の御命日に、本当にお参りにならなくなるかたがあります。

「ご病氣かしら」と心配しているうちに、「なくなりました」とご連絡をいただくことがあります。

私は、「あんなにお元気だったのに、たくさんお話させていただいたのに。」と奥様方の訃報に接する度に悲しい気持ちになります。

奥様方が亡くなられても、みなさまの英霊に対する愛情はいつまでも私の心の中に思い出となってずっと生き続けています。

今もなお、高齢となり歩くこともままならない奥様方が、杖にすがりお孫さんに背負われてお参りくださっています。

九十才代の奥様方が胸に抱えるご主人様の写真二十代の青年です。

どんなに辛いことがあっても、悲しいことがあっても英霊だけを心のささえに強く生きていらっしゃいました。

わたしは、奥様方から夫を思い続ける妻の愛情が、いかに深いものかを教えていただきました。そして、このような愛情こそが家庭を、またかつてのこの国をも支えていたのだと知りました。

私は奥様方のお話をすることで皆様方に、平和な世の中でとかく忘れがちとなる夫婦の絆の大切さを見つめなおしていただければと思っています。

心に留めております言葉をもとに

田村 優太郎

本日は私が日々ご奉仕をする中で、心に留めております言葉をもとに感謝と大神様のお導きについてお話をさせていただきます。

「今の生に感謝し 広く大きな心を持つて 自然の流れに沿いながら 一步一步確実に歩を進めて 一所懸命に生きていく ありがとうございました」この言葉は私が日頃心に留めております言葉です。

私は幼少の頃から高校を卒業するまでレスリングをしておりました。友人の家がレスリング道場であったこともあり、友人の家に遊びに行くような感覚でレスリングを始めました。その道場の神棚に掲げてあった言葉がこの言葉でした。練習後には必ず神棚の前に整列しこの言葉を奏上していました。幼少の頃の私には意味もよく分かっておらず、ただ奏上をしているだけでした。しかし、私は今この言葉に神道に通じるものを感じております。今の生に感謝をするということは、生かされているということに感謝をするということ

です。それはどういったことなのか。例えば自分に難題がおとずれたとします。しかしそれは、神様が「今のあなたにはこれを学びなさいよ」というお気持ちを込めた、神様のお導きであり、そのお導きに感謝をするとういことが、生かされていることに感謝をするということだと私は思います。そのお導きに感謝をし、経験を積むことでその経験が後の自身を支える大きな経験に繋がることを、私は高校時代のレスリング部での部活動を通じて学びました。

中学生時分、高校の進路に悩んでいた私に声がかかりました。「レスリングで地元国体優勝を目指さないか。」私は幼少の頃よりレスリングに取り組んでいたこともあり、その先生の言葉に誘われて、先生が指導する高校に進学を致しました。今思えばこれこそが、大神様のお導きであったのだと私は思っております。

私は国体優勝という目標を掲げて高校三年間、必死にレスリングに取り組みました。先生が大変厳しく、練習も想像していたものをはるかに超えるものでした。それまで本気で物事に取り組んだことのなかった私には大変辛いものがありました。しかし、日々の感謝を忘れることなく練習を積み重ね、高校三年生の時には国体に出場することができました。初戦でマットにあがった時、観客席全体から声援を浴び、頭が真っ白になったことを思い

出します。結果は三位入賞と目標であった優勝までは届きませんでした。しかし、一歩一歩確実に歩んだ過程、積み重ねた厳しい練習の日々は、今の私にとって結果以上の価値を与えてくれました。

現在、八坂神社の大神様にご奉仕をさせていただいている中で、失敗すること、行き詰まること等ありますが、あの苦しかった練習の日々が私の支えとなり、日々感謝の心を忘れることなく前を向いて一歩ずつ歩みだすことが出来ています。

皆様も、辛いこと、苦しいことを経験したり、直面したりしてはいないでしょうか。それは大神様のお導きです。お導きに感謝をし、面と向かって乗り越えることで、あの時頑張った良かったなど、当時は決してなかった感情が生まれてくると思います。そう思えたとき苦しみは自身の支えとなり大神様のお導きに対する感謝へと繋がると思います。私はレスリングの経験を通じてそのように思いました。

今現在、私は大神様のお導きにより、ご縁あって、氏子地域の消防分団に入団させていただいており、氏子の皆様と活動を共にしております。消防分団長から神社に声がかかり、宮司様からすすめていただいて入団をさせていただきました。私の所属しております弥栄消防分団は八坂神社の大神様が守護する祇園町を守る消防分団です。自然な流れで入団を

しました消防分団ですが、活動を通じて、地域の方々との多くの出会いがありました。弥栄消防分団の団員の方々は、故郷が祇園町の方ばかりで、祇園祭の際には神事にもご奉仕される方々です。故郷の違う私に、京都のことや、時には祭のことまで教えてくださいます。私はこの出会いに大変感謝しております。消防分団の活動の中にはもちろん厳しいものもあります。それは年に一度の日頃の訓練の成果を披露する査閲訓練大会です。私は、ホースを担いで走る小型動力ポンプ操法訓練に出場しているのですが、消防署の方の熱の入った指導には高校時代のレスリング部の練習を思い出させるものがあります。弥栄消防分団の一員として地域の活動に参加させていただいていることは大変良き経験となっております。消防分団に入団したことも、大神様のお導きであり、後の自分に繋がる一歩であると思います。私は確信しております。

「今の生に感謝し 広く大きな心を持つて 自然の流れに沿いながら 一步一步確実に歩を進めて 一所懸命に生きていく ありがとうございました」この言葉を知らず知らずのうちに実践することで、私の道は開けてきたように思います。皆様にも覚えていただければ私も嬉しく思います。まずはお導きに感謝をし、一歩前に進んでみてください。その積み重ねが必ず自身の支えになります。

最後に、このような機会を与えていただき皆様のまえでお話をさせていただいたことも
大神様のお導きであると感謝しております。本日はありがとうございました。

（京都府 八坂神社 権祢宜）

国旗・国歌を大切にする民族になろう

井 出 舜

・ 祝祭日には国旗を掲揚し、君が代を歌おう

・ 主旨「皇室敬慕の念の醸成と日本国民の安寧を祈って」

一、国歌（君が代）はいつ頃から…

日本人は遠い昔から歌を好み、様々な感情や情景を歌にしてきました。また歌は、人に贈り気持ちを伝える奥ゆかしいものでありました。我が国の国歌「君が代」のもとになる歌は「古今和歌集」九〇五年、祝い歌の中の「よみひと知らず」の歌で、いわゆる「わが君は千代に八千代に苔のむすまで」であります。

この歌には、私の大切な人のお命がいついまでも長く続きますように、小石が寄り集

まっぴら大きな岩となり、そこに苔が生える迄末永く、健やかでおわしますように……という祈りがこめられています。大愛情愛に満ち、相手の幸せを思う真情がこめられています。

二、君が代の作曲について

明治時代、ドイツ人のフランツ・エッケルトが宮内省の雅楽課、林弘守等が作曲していた「保育唱歌」から編曲し、新しい楽譜は明治十三年十一月三日の天長節に吹奏され「儀式唱歌」となったと言われております。

一方、昭和二十年敗戦後の連合国軍最高総司令部（GHQ）占領下では、「君が代」を教えることが自主規制され、国歌を歌うことが出来ませんでした。よって当初は「日の丸」の掲揚も全面禁止されました。以後、自国を愛せない骨抜き民族になってしまったのであります。

天照ス神の恵みぞ 日の本は 忘れ給うな随神の道

三、国旗の歴史

国旗、日の丸（日章旗）

例一 歴史は古く、大宝元年（七〇一年）の元旦の儀式に揚げられたことが「続日本記」に記載されています。平安時代末期から台頭してくる「武士」たちも扇や旗に「日の丸」を用いています。源頼朝も日の丸を使用しております。

例二 「源平盛衰記」には有名な屋島の合戦で、源氏の武将・那須野与一が、平家の差出した紅色の「日の丸」の扇の要を射ています。

例三 「太平記」今から六〇〇年前の南北朝時代にも後醍醐天皇が「日の丸」の旗を使用されたと記録にあります。

「日の丸」の印は朱印船などの日本を示す旗として使用され、また日本の領土の表示としても使われました。この様に「日の丸」の歴史は古く、日の出ずる太陽の国を端的に表現し、豊穡の証としてきたことが伺えます。また、「日本^{にっぽん}」という国号（国の名前）の淵源は、推古天皇十五年（六〇七年）に遣隋使が皇帝にさしだした国書の中に見えます。

隋書「日の出ずる処の天子 書を日没する処の天子に致す恙なきや」

当時の大国「隋」に対し、なんと堂々としているではないか。それにくらべて今ではこの誇りも消え失せ、国を守り伝えていくという気概も思考もないといっても過言ではありません。

四、これからの国旗、国歌に対する考え方

日本は、皇紀二六七四年を経た万世一系の世界でも類い稀なる国であります。明治維新を成し遂げた先人たちは、日清、日露の戦いで先進国にも勝利し、アジアの小国から一躍名を成し大日本帝国となりました。

しかし、大東亜戦争後、特殊な世界情勢のもとで経済のみを考え独自に国を守ることも考えずにきたその結果、個人優先で独り善がりな絶対平和を掲げる国に成り果てています。今の日本国は、戦後一度も憲法の改正も無く、「国防の意識も薄い国」であるため中国や韓国の不当な支配や要求に文句も言えず、手を拱いている状態です。北方領土も、尖閣

諸島も、明らかに日本領土であります。法律をつくり直し、毅然と対処すべきなのです。

東南アジア諸国へ旅をしてみると「日本人の勇敢さや母国愛を称える」声を耳にします。敗戦の憂き目は見たけれど「アジア諸国の独立」に尽くしてくれた素晴らしき国だ、等感謝を示してくれています。また、日本人の気質を知っている台湾、フィリピン、インドネシア、タイ、インド等の国は現在でも、我が国にとっても好意的であります。

さて、話は戻るが、平成十一年、国旗、国歌法が制定されたが、いかに若者や一般国民に浸透していくかが課題であります。

そこで、私の提案として、

- 一、神社境内に国旗掲揚塔を建立。
- 二、正月や祭典日には拝殿、参道側にも日の丸列挙。
- 三、夏のラジオ体操や催し時、ポールに国旗を掲揚し、国歌斉唱、神社の歌等指導。
- 四、神職、総代は祝祭日には率先して国旗を掲揚し、崇敬者・市・町・村の有識者にも働き掛ける。

五、国旗の一式、ステッカー等授与所に設置。

六、幼稚園、保育園、小・中・高校のPTAを通しての普及活動。

七、県・市・町・村の「公の場」「議場」にも国旗掲揚を推進するため地方議員に働き掛けをする。

日本人が愛国心を持ち、我が国の国旗・国歌を永久に伝えていく為の第一歩として、まず国歌、国旗を大切にすることが出来るよう、神社界を中心に関係ある諸団体と結束し、全国ネットで目的達成が出来るようお互い奮起、努力しよう。

今やらなければ誰がやる、唯々実践あるのみ

（長野県 諏訪神社 宮司）

ニホンオオカミとその信仰について思うこと

山口 真生

みなさん。私たち生きとし生けるもの全てが、神様の恩恵の下にこの世に生を受け、その大御心に従い命をはぐくむのは常の事ではありますが、その一方で、儚くもその営みが絶え、種の保存が適わない生物はたくさんあります。また更にそれらの生物の中には、我々人間の文明の進化によって生命の営みが途絶え、または脅かされるものがあることを私たちは分っていると思います。もし仮に、それらの生きものたちの中で我々が住む日本の郷土に深く根差した固有の種類があったとしたら、私たちは何を思うことが出来るでしょうか。今日はその代表例であります、「ニホンオオカミとその信仰」についてお話したいと思います。

ある日、私が神社の大前にお供えします神饌を調理しているときの事です。一緒にいた実習生さんが「お米を洗うとき手を入れるんですか」と尋ねてきました。私は今まで当た

り前のように行ってきたので「どうしてそんなこと聞くの」と返したら「うちの神社ではありえないことです」と言います。私としましては潔斎を済ませた上での事ですから特に悪いことをしているという認識はありません。さらに聞くと「狼さんは人の手に触れたものは召し上がりません」との事。私はその敬虔な心得に感心しまして、その実習生さんの地元神社における祭祀の形態についていろいろと尋ねました。

埼玉県の秩父地方には狼を信仰の対象としてお祀りする神社がたくさんあります。即ちニホンオオカミを山の神の使い・警護者として位置づけ、「御眷属」としてお祀り申し上げるものです。そして御眷属符の頒布を広く行い、そのご神徳を讃えています。余談ですが幕末のころ、秩父の三峯山にはこのご眷属符を求めて人々が殺到したそうです。諸外国がいよいよ攻め込んでくるときに「アメリカ狐と千年モグラに日本は侵されようとしている。これを救うのはニホンオオカミだ」と。日本人は間違いなくオオカミという存在に特別な思いを託していたのです。

その実習生さんの奉仕先もそうした中にある神社でした。毎月の定例であります月次祭に合わせてその神社の宮司さんは奥社までお供えを持っていくそうなのですが、御饌は神社のご神水を使って手を触れずに洗い、お櫃に入れて肩に担ぎ、白衣姿で道中山道を一時

間かけて上り、お参りを済ませ、前の月にお供えしたお櫃をもって帰ります。たいていの場合お櫃の中はいつも食べ尽されており、残った場合には災いが起こるそうです。私は平素、平地の神社で奉仕しておりますので、厳しい自然である山の中で息づく直向きな神祀りに只々感心してしまいました。

しかしながら、私は一つ疑問に思いました。「とても敬虔な信仰の形ではあるけれども、これを受け継いでいくことは容易ではないのでは」と。今現在ではニホンオオカミは絶滅したとされています。明治時代に奈良県の吉野で捕獲された一頭が最後だと言われます。昔、日本の里山に狼はどこにでもいたと思います。強く、逞しく、そしてまた恐れられた文字通り「畏きもの」であったはずです。そして今は絶滅したとされています。いまの若い世代は当然のことながらニホンオオカミを知らない人が大半です。實際話を聞いてみると、その神社周辺も高齢化が進み、講などの組織的な次世代への継承は思うようにはできないようです。

そんな中、NHKのドキュメンタリーでうちの神社が取り上げられたと実習生さんが録画を持ってきてくれました。見ることになりました。絶滅したはずのニホンオオカミを追い求めて様々なところを訪ね歩くこの番組では、狼の痕跡を求めて昼夜労苦を厭わず活動

する登山家、このひとは「自分が死んだら遺体を山に置いて狼に食べてもらえたらこんな幸せなことはない」ということを言える熱心な人でした。また「オタキアゲ」と呼ばれる奥社へのお供えを直向きに守り伝えてきた宮司さん、また「狼のことなんぞ滅多に口にするもんじゃない」と言わんばかりに顔をしかめるお婆さんなど秩父地方を中心に様々な人たちが出てきます。そして「これは見えないものを見ようとした人たちの魂の物語である」とまとめられます。ここで大切なことは「見えないものをみようとしている」と認めてしまうのは如何なものかということです。この方達は日本に「あるべきもの」を「見よう」としているだけなのです。しかし今の世の中、それは我々が想像する以上に過酷なことかもしれません。

昨今の情勢は巷を見渡しますと、窮まるところ多く、決して穏やかではない状態が続いています。日本の自殺者の数は先進国の中で高水準な状態が続いています。恵まれているはずなのに自分に自信が見いだせない人も増えている事でしょう。狼さんを忘れてしまった日本人は「畏きもの」を見出す感性を失い、感謝の心と喜びを感じる力が弱くなってしまうたのでしょうか。もしかしたら現代に生まれた私もそんな一人かもしれない。これに打ち勝つためには「あるべきものを見ようとする」強い意志が必要になります。もしか

したら、今も何処かに居るかもしれないニホンオオカミにこの姿を投影するのは私だけで
しょうか。

ドキュメンタリーの冒頭でナレーターがいう言葉が鮮明に残ります。「今の時代の日本
に狼信仰が生きているというと、信じるかね」

(愛知県 真清田神社 権禰宜)

先人達からの知恵・昔話を通して学ぶ

青木信市

四角な竹で「四方竹」と呼ばれる小笹がある。調べてみると、中国が原産で、一ヶ月程度しかとれない希少な食用たけのこで特産品として販売している県もある。日本人は昔から竹の子を食べる。生や茹ても焼いてもたべる。竹に関する古典をみると「昔竹取の翁」というものありけり。野山にまじりて、竹をとりつつ、萬のことにつかいけり。」で始まるかぐや姫の物語がある。この昔話の中にも、当時の人々の暮らしぶりを知ることができる。

また、門松、門木の中にある竹も、飾り竹として縁起が良いとされる。種子島の民話に「鵜草草不合尊のご誕生の時に豊玉姫尊が竹で臍の緒を切られた話があり、その所は竹原と言いう地名として残り、笹緒岳と呼ばれている地名も残っている。

こうした伝承文化は、信仰心の芽生えに繋がる。例えば、勧善懲悪の代表的の昔話で「桃

太郎」はよく知られているが、物語の成立については諸説存在する。第七代孝靈天皇の第三皇子大吉備津日子命の吉備国平定に由来する説、吉備津神社縁起物語に犬飼健命、猿飼部の楽々森彦命、鳥飼部の留玉臣命と共に鬼である温羅を倒し平定した物語に結びつく話。昔から外来の人々や文化を受け入れることでその一族が強くなる土壌がある。

柳田国男は民話伝承の中にある物語には日本の固有信仰の姿として捉えた。昔話は単なるおとぎ話ではない。語り教えることで心の教育に繋がり、延いては人格形成につなげる大事な幼年期である。昔から人として素直な心に育つ大事な時期を、周囲の大人達にゆだねられ、年長者と共に祭りや集落の行事が盛んな所で、もまれながら精神力ができ、自我を克服し心身が鍛えられた。

鹿児島には江戸時代から続いた郷中教育があった。薩摩の士族の中でも各郷ごとの二才（青年）、稚児（少年）同士が集まり互いに協力し心身の修養、錬磨を重ねて文武を鍛え上げた。そこで育った人々のなかで、明治維新を始めその後の日本の舵取りで活躍した人々のなかで西郷隆盛、大山巖、東郷平八郎など著名な偉大な人材が輩出したことは周知されている。彼らを始め志士達が幼少時代に四書五経を諳んじ、軍書を読み筆算など徹底した教育を行った。

その中には現在にも通じるものがある。たとえば、独自の規則のなかで、やってはいけないことの一つに「放逸遊樂にふけては士道に相背き、不忠、不孝に相当る行為であるから不埒な行為である。」こうした行為が自己を弱くすることを知り尽くした先人達からの訓育は今も生きている。先人が学んだ「筆算」は和歌、連歌の道から琵琶、琴、笛、尺八などの音楽までの芸能を言い、良き伝統を学んだのである。

今の教育は本当に意味あるものなのか。子供へ心の豊かさを教え育てる原点を考えたとき、地方の風習や方言が残る昔話にあるのではないか。実社会では当時のような経験や体験をする機会が少なくなり、むしろ己を優先するので、卓越した心（精神力）が育たないのである。こうした機会が作れないことで、今の教育の乱れが起きている遠因かもしれない。

時代が作り出す文化のなかで、ゲーム脳と呼ばれる若者達が成人を迎える。特に青少年の携帯の時間管理などを学校や家庭で意識的に管理していることをよく聞く。残虐性や破壊性の強いもの、過激な激情の表現描写のアニメが今の幼児期にも蔓延る。青少年の心の豊かな育成を考えた時に、時代に関係なく人間の心の豊かさ与人への思いやりが簡潔に描かれている昔話は、大事に伝えていかなければならない。

環境が変わり祖父母と暮らさなくなった親は特に人の良し悪しを昔話を喩えとして引き出し語ることが大事である。言葉には霊力があり、霊が言葉になって表れると言われる。そこかしこ神社の由来やご祭神にも通じる昔話が眠っている。その地域社会に溶け込んだ民話を聞いて育った幼き心が大事である。

教育の原点は親の躰とともに共同体が生み出す教えは、体験である。豊かな社会のなかでいろんな人々のなかで鍛えられることが少ない昨今「絆」や「おもてなし」が話題となっているが、昔の日本人は自然と当たり前のこととして捉えていた。

（鹿児島県 霧島神宮 権瀬宜）

人の運命は神様のみ知るところ

石塚 智康

お話の前に、去る八日午前十時五十五分薨去されました桂宮宣仁殿下の御霊安らかならむことをお祈りします。

一昨年六月六日薨去されました兄の三笠宮寛仁殿下に継ぐご不幸でございます。

三笠宮さまには、九十八歳のご高齢で三宮さま全てに先立たれて、さぞや無念の極みとお悔やみの気持ちを表します。

先ず私は神道講演会に入って人生に花開いたと思っています

私が初参加したのは出雲大社でしたがその後宮城大会、北海道大会は神宮道場研修と重

なつたので欠席しました。それ以降は参加させてもらっています。

その中でも大野康孝、今は亡き木下英二両先生から皇居勤労奉仕の意義を説かれ、自分たちは毎年熊本県天草支部としてご奉仕に上がっている。このご奉仕に参加する大事さを熱っぽく語ってもらいました。

それから次第に自分も皇居勤労奉仕に上がりたいと思うように気持ち膨らんできました。

そこで県内に奉仕団が在るか神社庁に尋ねたところ、鳥取県内にはその様な団体は無いとのことでしたので無理かなと思い諦めざるを得なくなりました。

それで次回大野先生にお会いした時、地元では団体が無いので先生の天草奉仕団に入れてもらえませんかとお願いました。が、地元で十五名以上集めて奉仕団を編成するように諭されました。ということは自分には人集めは下手だしこれは無理なことに諦めていました。

井上団長との出会い

私は毎年二月十一日橿原神宮建国祭にお参りしています。この日は地元でも建国祭を催

行していますので、批判を受けながらも神武天皇様をお奉りされている檀原様をお参りしています。

平成二十二年二月十一日、建国祭典終了後の直会時、隣り合わせの人と日本は天皇様をいただいている国で神武天皇ご即位以来例祭として大祭を催行されている事など話しながら、「天皇のお住まいである皇居の清掃奉仕があるけど気持ちは在っても奉仕団体に恵まれませんので悶々としています」としばらく話していたら、「それ程皇居に上がりたいのなら自分の奉仕団に入るか、自分は大阪府皇居勤労奉仕団団長をしているから受け入れてあげてもいい」と言われましたので、早速名刺を差し出し名乗ってお願いしました。そして「官司をしておられるなら多分文句なく宮内庁からは許可が下りると思う」と受け入れてもらいました。

この出会いに大喜びでお礼を申し上げ、東京での再会を約束しルンルン気分ですごすご帰ったところでした。

まさに神武天皇様のお引き合わせで運命の出会いに巡り合えたものと喜びました。

その年益過ぎ、平成二十二年十一月八日から十一日まで大阪府皇居勤労奉仕団奉仕許可通知を受け取りました。

皇居勤労奉仕

十月八日初日 赤坂御用地奉仕 午前中いっぱい赤坂御苑の中を案内してもらい説明を受ける。午後は秋の園遊会の飾大鉢片付け 東京とは思えない山あり谷あり自然いっぱい、まるで田舎の地にいるよう、柿や柚子が熟れている。

九日初めて皇居入場 午前中皇居内奥深く案内して頂く 宮中三殿、天皇陛下が田植え稲刈りなされる水田や皇后陛下が養蚕される桑畑等も案内して説明を受ける。午後は宮内庁前から宮殿前広場の広い場所の落ち葉掃除、はいても掃いても風が吹く度パラパラこれで良いということなし。

十日 午前中紅葉山掃除 午後 天皇皇后両陛下御会釈賜るため蓮池参集所に入り緊張してお待ちする。

菊の御紋章付いた黒いお車から降り立たれた両陛下お入りになると格奉仕団長一步前に出て自分の奉仕団の報告を申し上げる。陛下から何らかのご下問があり的確簡潔にご返答申し上げる。私は団長の後ろだったので陛下が僅か三M近くにお立ちになり、ご下問のお声を拝しその時感激のあまり涙が止まりませんでした。

この夜宿舎で恒例の勉強会があり、国体精神について講演を聞く。

十一日最終日 皇居東御苑掃除 午後休憩の後、天皇陛下からの賜り物を受けるため団長に付いて宮内庁に入る

昭和十一年建築のがっちりした庁舎の部屋に入れてもらい格奉仕団長有難く戴く。

夕方全日程終わってご奉仕貫徹の感謝を胸中に収め最敬礼して退出

三年目になり夜の勉強会も時間が長いので、この神道講演で話した内容に肉付けして講演する役目も貰いました。「女性宮家創設反対」を話したら、団長以下知らない事を教えてもらってよかったと喜んでもらいました。

四回目の昨年は「光格天皇とご生母大江磐代君」を話しました。そこで今の御皇室の直系のご先祖の生みの親は鳥取県だという事が判り勉強になったとの評価をいただきました。

井上団長から次期団長依頼

昨春秋、団長が来年七十五歳を過ぎるので、宮内庁に「引継ぎのためにも後一年奉仕させて頂きたい」とお願いしたけれど、他の奉仕団からも同じような申し出があり、一つ

を許せば示しが付かなくなる旨許可できない、との答えで自分は今回で終わりと皆に話がありました。

ご奉仕最終日宿舎に帰ったら、井上団長が団旗と申請書一式持ってきて、次期団長よろしく頼むと言われました。

私は大阪の人が団長すべきで自分は鳥取県です。それにもっと多数回奉仕している人も多い、自分は今回で四回目です。だからもっと適当な人がいるからと断つたのに、「鳥取県でも大阪府奉仕団の名を消さないで欲しい。多数回の人も居るが幾ら回を重ねても成長してこない。だから敢えて貴方に俺の後を頼むのだ」とそこまで見込まれて迄断るのは余りにか。それに考えてみれば、今の自分が皇居にご奉仕できるようになったのは、紛れもなく井上団長に拾ってもらったからこそであれば、かたくなに断るのは失礼かな。ここではむしろご恩返しをしなければと思いお受けすることにしました。

しかし冷静になって良く考えてみれば何故に自分がこの地位を狙ったわけでもなく、なりたいとも思ったこともなく考えてもみなかったことです。この運命の成り行き誰が予測したのでしょう。感ずるところ、この神道講演の皆様、多くの人々の福を戴きながら人生に花が開いたものと感じています。とすればこれは神様が決められたことでしょう。人生

不思議なこと。人はよく言います。

人は神様によって生かされている。

これぞ真に生かされていると思っています。

人の運命は人間誰しも予測することは出来ません。

神様のみ知るところだと思うこの頃です

自分のいまの気持ちをお話申しました。

(鳥取県 山根神社 宮司)

地元の神様・地元の神社

根本宗典

本日は、ようこそお参り下さいましてありがとうございます。

ところで、生き物に必要なパワーエネルギーは何だと思えますか、それは、お日様、太陽です。特に昇って来る朝日のパワーです、朝日を浴びる事により今日のやる気や元気が出て清々しい気分になりますね。夕日は沈むのであまり良くないですが、中には五時から男と、今から俺の時間だと言う人もいますが、その太陽、お日様をお祀りしているのが、日本の氏神、心の故郷、お伊勢さんです。

では、神様は何処に住んで居ると思えますか、数学的には、点が0次元、直線が1次元で、平面が2次元、私たちが住んで居る3次元、それと、4次元があります。私は、この4次元に神様は住んで居ると思えます、マンガのドラえもんでは、のび太くんが困ったときに、「ねえ、ドラえもん頼むよ」「しょうがないなあ」とドラえもんは、4次元ポケットからいろんな道具を出しのび太くんを助けます。私たちも、困ったときに、神社に行つて

神頼みをする、神様は、私たちを助けてくれますね、あちらの神様こちらの神様と行くのが大変です。一番良いのは、コンビニでは、ありませんが、近くて便利なのが、私たちが住んで居る地元の神社、地元の神様です。神様同士は、ネットワークで繋がっておりますので、地元の神様にお願いしますと、願い事に合った神様に頼んでお願い事を叶えてくれるはずです。但、苦しいときの神頼みと突然行っても、すぐには叶えてはくれません。なので、月に一度又は、一日とか十五日、御縁日にお参りしてまずは顔見知りになつてからです。

でも、一番大事なのは、お礼ですお願い事が叶ったら必ずお礼をしてから、またお願い事をして下さい。

転勤やお子さんの進学や就職で今住んで居る土地を離れる場合には、必ず地元の神社に行つて神様に、こちらでお世話になりましたと感謝の挨拶をして下さい、また行つた先の地元の神様にこちらでお世話になりますと挨拶をして下さい。

最後になりますが、皆さんの中で知っている方々もいるとは思われますが、宇宙と天国どちらが遠いと思いますか、答えは、天国です。だって宇宙は行つて帰つてこれませんが、天国は行つたら帰つてこれません。

本日は、お参りご苦労様でした。

（茨城県 大宮大神 宮司）

麻と稲

佐伯正則

これをもちまして「素盞鳴神社」の春季例祭滞りなく終了しました。本日は「麻と稲」という事で少しお話させていただきます。

伊勢の神宮には併せて百二十五の御宮がありますが、その中の二つ、「神服部機殿神社」「神麻績機殿神社」が御座います。この神社において神様がお召しになる着物の反物を織っているのです。服部とは絹でありこれは実際にこの神社で織られた反物です。

麻績とは麻の事で、麻は日本民族にとりまして非常に大事な草で「麻を日本の国の草、国草」にしようではないかという運動が現在拡がっています。又、祓えの具である大麻、祓串には必ず麻が取り付けられています。

何故でありましょうか。

麻の中の蓬よもぎ。麻は真っ直ぐに成長します。あの曲がりくねった蓬よもぎでさえ麻と一緒にいれば真っ直ぐに成長するとの例えです。清き明き正しき直きを理念とする日本の精神、神道

におきまして麻は必要不可欠な草です。

そして、年末に御頒ちしている神宮大麻にも麻は封入されております。

我が富山県の大麻頒布率は四十数年全国一を誇り、六十二回の遷宮御浄財もいち早く目標額を達成し最終的に全国で唯一、二百%を超えました。この様に、私達宮司の体面が保てるのも一重に一重に皆様方の御尽力の賜物と高い席ではありますが篤く御礼を申し上げます。又、この様な結果は戦国時代、北陸の一向一揆にも見られる様に我が県は浄土真宗王国ではありますが、やはり神も在り、仏も在りの精神がまだまだ健在であるからではないでしょうか。今も神棚に向かって「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と唱えられるお爺ちゃん、お婆ちゃんがおります。

ここだけのお話ですが、ある御宮で私の祝詞奏上、玉串拝礼の後、進行役の総代さんが「それでは御焼香に移ります。」と云われたのには頭を抱えました。が、直ぐにどっと笑いが出ましたので救われた思いでした。

人を幸せにするはずの宗教が人を不幸にしている悲しい現実が多々あります。中東では同じ宗教でありながら宗派が違っただけで血を流し合っておりまう。私たちの御先祖様は仏神一体ではなく、神仏一体を以てそのような愚を避けられました。

神宮大祓には皇大神宮と書いてありますが、明治前までは皇太神宮でありました。苗字に「太田」さんがあります。殆どの方が大では無く太いでありましょう。太いは大の何倍も何十倍も大きいからです。田圃は命に替え難い大事なものです。だからこそ太いを充てられたのではないでしょうか。これが日本の文化でもあります。この文化を明治政府は否定しました。太いは古事記の冒頭にも見られる様に非常に儒教色の強い字と云うことで、神仏分離令等、神道と他の宗教と切り離したい政府はこれを看過出来ず皇太神宮より皇大神宮への改称を命じました。

只、幸いな事に今回の遷宮で太いが一部復活しました。奉曳車に掲げられている「太一」です。前回の遷宮では「大きい一」でしたが今回は太いに改められました。「太一」とは神宮の紋章と位置づけられ、御用船にも使用されたと聞いております。

昭和の時代にも似た事例があります。国旗の位置の変更です。東洋では元々、左貴思想と申しまして左のほうが右より上位という考えがあります。仏教でもそうだと思います。浄土真宗の仏壇におきましては中央に阿弥陀様、左に開祖の親鸞聖人、右に真宗中興の祖であり、白骨の御文章の蓮如聖人の肖像画が掲げられている筈です。ところが昭和五年に時の政府は軽々しく、欧米に倣い国旗を左から右に変更しました。こういう理由で今日神

道主催の大会と政府主催の大会では国旗の位置が逆、皇族方のお座りになられる位置も逆になっているのが現状です。

この神宮大麻は鎌倉時代より神宮の下級神職、御師により津々浦々に頒布され江戸時代には全国戸数の八十パーセントに及んだそうです。御師は地方の有力者、檀那と師檀関係を結び千度祓え、万度祓え、麻、農業暦を持って訪れ、農業の普及にも努めました。現在品種改良された御米は多々ありますが元を糺せば神宮の田圃、神田に行きつくと言われるのも、全国の農家が神宮に御米を奉納し、種粃を頂戴したからに他なりません。

神宮の神田に不可思議な事が起こりました。昭和天皇への御代替わりの年に稲の新種「瑞垣」が、今上陛下への御代替わりの年に「イセヒカリ」が突如出現しました。神のお告げ、御神勅の様に。イセヒカリについてはこの様に記されております。その年、台風が神田を襲い殆どの稲が倒れ伏しました。その中であってすくっと立っている一群がありました。これがイセヒカリでありまして、倒伏に強く食味も良いと云う事で現在御米屋さんではブランド品、魚沼産コシヒカリK八百円に対し六百円で販売されております。

日本の歴史書「日本書紀」によりますと悠久なる古、神宮の御祭神、天照坐皇大御神様はお孫さんを通じてお米を青人草、人間に与えて下さいました。しかし、ただ単に生きる

糧としてだけ与えて下さったのでありませんか。この痩せた土地、狭い国土の中でのお米作りは一人ではできません。御先祖様は自分の我を抑え、自分の欲を抑えて運命共同体である村全体の利益の為に身を粉にして働きました。

本日、御神前にお供えされている幣帛料にはこう書かれております。

「朝（あした）に祈り夕べに感謝」

あしたとは朝の事で、朝に今日一日の無事を祈り、夕べに今日一日の無事を感謝して参りました。しかし、ただ単に祈っていたわけではありません。その祈りの大前提には

「神様今日一日皆と力と心を合わせて働きますから、どうか見守っていてください」

がありました。この「皆で力と心を合わせて」の精神が今の日本を創りあげたと、云われております。大御神様は日本民族の「精神の根幹」をも、お米を通して授け下されたのではないのでしょうか。

しかし、つらつら考えますと現在この精神が希薄、薄くなってきたと感じるのは私だけでありませんか。

最後に、神宮を訪れたアルバート・アインシュタイン博士の日本への思いを御紹介して祭りの言葉とします。

「万世一系の天皇を戴いている尊い国は日本だけである。世界の文化はアジアに始まりアジアに帰する。」

それはアジアの高峰、日本に立ち戻らねばならぬ。我々は神に感謝する。我々に日本という尊い国をつくっておいてくれたことを……」

この博士の思いに対して私達は十分に応えているではありませんか。この国に生まれた事を誇りに思い、この国に恥じることはないような生き様をしたいと考えております。

(富山県 素盞鳴神社 宮司)

禊ぎと日常生活の清め

高 島 正 寿

講習会の開催神社白山比咩神社の高島です。

昨日の講演におきまして、当社の宮司がお話しましたように、当社には平成二十年に斎行されました御鎮座二千百年式年大祭における記念事業として建設されました禊場がございます。

現在では毎月十五日に当社の神職と氏子さんで禊を行っている他、四半期ごとの三・六・九・十二月に一般の方にお声がけをして公募型の禊の講習会を実施しております。近年禊への関心が高くなっており、毎回県内外から二十名ほどの申し込みがあり、これまでに延べ三百名ほどの方に体験をしていただきました。

しかし、申し込んでくる方のほとんどが禊という言葉は聞いたことがあっても、禊そのものをやったことも見たこともないという方ばかりで、中には「滝に打たれるんですよね」と真顔で聞いてくる人もいました。

というわけで、講習では冒頭に襦の意義というものを実生活に即した形でお話をしております。

さて、これから講習を始めていくわけですが、まず始めに襦とはそもそもどういうことをどういう目的で行うのかということをお話しさせて頂きます。

今日ご参加頂いている皆さんは実際に当社の襦を見たことがないという人が多いと思います。襦と聞いてイメージされるのは、テレビや新聞なんかで、一月の大寒に海や川、場合によっては氷を割って男たちが気合を入れて水に入るシーンなんかが出てくるでしょうか。もしくはテレビのバラエティなんかで芸人さんが山奥の滝に打たれて絶叫しているなんていうのを想像している人もいるかもしれません。

ああいったものも襦とはいいますが、あれは身を削ぐと言う意味での襦です。これから行う襦は身をすすぐという意味での襦です。

洗濯のすすぎとはお水で汚れを洗い流すということですね。その意味を適用すればお水によって身体の内外の汚れを洗い流すという意味になるわけです。そしてここからがポイントですが、襦を終えてすっきりさっぱりとなる。心が爽やかに明るくなる事が重要な

です。

そういった意味で言いますと、襦は夏に行うのが望ましい訳です。夏の暑い日にお水を頂いてすつきりさっぱりすれば心も爽やかに明るくなる。仕事においてもそうなんですから神様に対しても尚更言えることなわけです。

襦はなんのために行うのか。それは神様の前に座って拝む、そのために必要な手段だからです。先ほど拝殿で正式参拝をした時に手水をして頂いております。あれも襦を簡略化したものなんですね。神様というのはとても尊い存在ですので人間側としての礼儀、マナーが人間を相手にする時以上に求められるわけです。身だしなみについてもそうです。

今日はこちらからスーツでお越しくださいとお願いしておりますので皆さんそういった服装をされておりますが、実際当社にご祈祷でお参りに来られる方は結構ラフな格好で来られる方が多いです。

別にうちにはドレスコードがあるわけではないので追いつ返すなんてことはしませんけれども、さすがにサンダル履きに短パンTシャツで良縁成就をお願いしますとなるとそれは無理なんじゃないかなあ…内心思ったりもします。どうも鼻目に見ても神様にお願いごとをしに来るといような服装では無いわけです。日常生活においてもTPOという言葉が

あるようにその場にふさわしい服装というのが有るわけです。短パンTシャツで就職の面接には行かないでしょうし、相手の両親にお嬢さんを僕にくださいなどと言ったところで帰れとなるわけです。

身だしなみを整えるのは社会生活を営む上で必要なマナーです。加えて神様事では清めという心の身だしなみも必要なマナーとなるわけです。

禊そのものはそんなに難しいものではありませんが、この心の身だしなみが難しいわけです。こんなご時世ですのでもすればストレスだらけの社会においてイライラや不安で心が荒れてしまう、こんな状態を気持ちが枯れていると書いてけがれというわけです。こういった状態では神様事どころか日常生活においてもうまく行くはずがありません。禊によつてそういった気持ちを清めてすっきりさっぱりさせて、神様という特別な存在と向き合う時に必要なもの、また、日常生活においての特別な時に行うべきもののヒントを得ていただきたいと思うわけです。

(石川県 白山比咩神社 権禰宜)

「松は緑に」

—キリスト教に改宗を迫られた昭和天皇—

佐 古 建 彦

連合国総司令官ダグラス・マッカーサーがパイプを啜えたまま厚木基地に降り立ったのが八月三十日、それから約ひと月後の九月二十七日、昭和天皇さまは皇居前の第一生命ビルのアメリカ大使館にマッカーサーをお尋ねに成りました。マッカーサーはその時、どうせ「命乞い」か「亡命先」の嘆願位と軽く考えたそうです。だから、迎えにも出ず、自分の執務室でパイプを啜え足を組んでいたそうです。

その時に同行した通訳の奥村勝蔵氏が後の回顧録にその時の事を次の様に記しています。

「今回の戦争の責任は全て自分にあるのであるから、自分に対してどの様な処置を取られても構わない。次に戦争の結果、現在国民は飢餓に瀕している。このままでは罪のない国民に多くの餓死者が出る恐れがあるから、米国にぜひ食糧援助をお願いしたい。ここに

皇室財産の有価証券類をまとめて持参したので、その費用の一部に充てて頂ければ仕合せである」と陛下はおおせられて、大きな風呂敷包みを元帥の机の上に差し出されましたのです。

それまで姿勢を変えなかった元帥が、やώρα立ち上がって陛下の前に進み、抱きつかれんばかりにしてお手を握り「私は初めて神の如き帝王を見た」と述べて、陛下のお帰りの時には、元帥自ら出口までお見送りの礼を取ったのです。

それから三ヶ月後に「日本人の精神・伝統文化」の解体が始まるのです。昭和二十年十二月十五日GHQより「国家神道・神社神道に対する政府の保証、支援、保全監督に弘布の廃止に関する件」所謂「神道指令」が発令され、神宮皇学館大学の存立が危機に直面し、翌年の二月十二日にGHQより神宮皇学館大学の廃校命令が出たのです。よほど神道が怖かったのでしょうか。

それから、食糧不足は続き、その上に猛烈なインフレが襲い、庶民の生活はますます苦しくなって行きました。陛下は「自分の命はどうなってもよいから、国民に食糧を与えて欲しい」と何度もお願ひされたのです。米国はこれに対し、若干の食糧支援を行ったものの、国民八千万人の栄養不足を補うには足りなかったのです。

執務室の窓から庭園の赤松の古木を見るたびに、天皇さまは松のしたたかさに想いを寄せ、松の姿を鑑としてわが身を持していこうと決意を新たにされたのです。

昭和二十三年歌会始に出された御製

冬枯れの さびしき庭の 松ひと木

色かへぬをぞ かがみとはせむ

そんな苦境の最中、昭和二十三年六月に、ローマ法王ピオ十二世から天皇宛にメッセージが届けられたのです。法王は、日本を反共の砦のカトリック国にしたいと望み、マツカーサーの占領政策に協力していたのです。そして、法王の代理としてニューヨークのフランシス・スペルマン枢機卿を日本に派遣したのです。

枢機卿は天皇に謁見し、法王のメッセージを伝えたのです。それは、「陛下は国民の飢

えを苦慮されていると聞が、もし陛下がカトリックの洗礼を受けられるなら、世界のカトリック教徒は一致協力して、食糧援助に立ち上がる事は確實である。この機会に改宗されることをお勧めする」と云う内容であつたそうです。それからひと月して、那須で私的に知り合つたヨゼフ・フロジャック神父からも同じ趣旨の勧誘があつたそうです。

次に芦田内閣が宮中改革をめざし、宮内省を宮内庁に縮小、初代の宮内庁長官に田島道治、侍従長には三谷隆信を送り込んでいたが、二人ともクリスチャンであつたのです。陛下の周りはキリスト教関係者で固められ、陛下は真剣にお悩みになられたのです。

自分が洗礼を受ければ国民の飢えは解消される。しかし、天皇の代々受け継いできた祖宗は神道である、皇祖皇宗に対して重大な違背を犯すことに成る。違背しても全国民の飢えがしのげるなら改宗するのがよいのではないか、せめて形だけでも洗礼を受けておこうか、と深刻に思い悩まれたのです。

思い余つた陛下は信頼のおける元皇族の賀陽恒憲さまに相談されるのです。彼は戦前に陸軍師団長、陸軍大学校長を歴任した皇族軍人です。彼は色々な人物にあたるが、地位や名誉もある学者はご進講役に推薦されるとみな尻込みするのです。

この時、マッカーサーは宣教師二千五百人、と聖書一万冊を送り込ませ、後の国際基督

教大学の設立準備に入っていたのです。その上、皇居の電話と壁には盗聴器が仕掛けられ、四六時中傍受されていたのです。

その様な状況だから、全く無名の「三上照夫」という男に白羽の矢がたったのです。彼は弱冠二十歳、陸軍特攻隊の生き残りで、将来の日本を背負って立つ胆力のある人物と周囲から目されていたのです。同志社の神学部に入學して、ヘブライ語とキリスト教神學を学習しながら、臨濟禪宗で參禪を重ねて、キリスト教と仏教、古神道にも通曉した青年だったのです。

元皇族の賀陽さまの斡旋による諸準備が整い、元陸軍少將秩父宮さまのご自宅ならば盗聴される恐れはないと昭和二十三年十二月二十七日、三上青年は天皇さまに拝謁するのです。

午後三時、賀陽さまに伴われた三上照夫は部屋に入るなり、深く頭を下げ「三上照夫でございます。若輩ではありますが、宜しくお願い申し上げます」と三上は陛下が語りかける前にいきなり大声で…

冬枯れの

さびしき庭の

松ひと木

色かへぬをぞ

かがみとはせむ

青年は、キリスト教神学を説明するはずであつたが、ただ陛下の御製を朗々と詠い終えると、深々と一礼をし、軍隊式の回れ右をしてすたすたと退室したのです。

「色かへぬ」ことを松の木から学んだ陛下は、何を今さらお迷いになるのか。国の中心人格は正氣堂々と古来の伝統に立ち返るべきで、軽々に動いてはならないということを青年は伝えようとしたのです。

三上の常識はずれの不遜とも見える態度は、陛下には正しく伝わったのです。こうして三上青年の謁見の後、天皇さまの改宗の話はいつの間にか沙汰やみに成ったのです。

若し、陛下が改宗されたなら……と考えるだけで「恐ろしい」と思うのは私一人ではないと確信いたします。

(山口県 宇津神社 宮司)

若い力

田 中 天 善

「若い力を結束させて」私は、若い氏子へ伝統的なお祭りを受け継ぎ、守り続けるといふ「次世代への継承」を進め、一人でも多く郷土を愛し、地域に貢献する氏子を育成していくことが神職として重要なことと考えています。

古来神社は、地域の氏子と一体となつて歩みを進めてきました。しかしながら戦後の社会構造の激変によつて、過疎地や都心では、これまで神社を支えてきた氏子、特に若い氏子世代が激減し、祭事はもとより神社維持が難しくなつてきているのが現状です。

当神社では、次のような教化活動に努めています。

例えば、御田植祭や抜穂祭では、地元の小学生による早乙女の奉仕、どんと焼き（左義長）での中学生による櫓の点火奉仕などに参加して戴いております。

また六十五回という長い歴史のある石川県下境内写生大会、戦後六十年以上続いている夏休み中の早起ラジオ体操などの行事があります。

当社の氏子青年会によって、支えられる行事もあります。その活動は、農作物の害虫を駆逐し、その豊作を願う伝統行事「虫送り」や外拝殿に掛かっております大注連縄の作製しているそばで、地元の子供達が、自宅の神棚の注連縄を作っています。

これらの体験が子供の頃の思い出となり、将来の個人の人生儀礼の初宮、七五三詣、また厄年などの祈願にお参りされる伝統行事として受け継がれるきっかけにもなります。

しかし、そのような教化活動が行うことが難しい神社の現状については、私たちも危機感をもって対応しなければいけません。

つつい社会の仕組みが悪いとか、経済が悪いとか、問題の原因を社会構造と決めてつけてしまいがちです。

これは私たち一人一人が課せられた課題でもあると思います。

昔から「迷った時は原点に立ち返れ」とよく言われます。ここで私たちの原点とは何でしょうか。それは、先祖代々築き上げ伝えてくれた鎮守の森を中心とする地域のお祭りではないでしょうか。

昔、祖父や父が担いだ氏神様のお神輿を、子が、孫が同じように勇ましく奉仕をするこ
とで、伝統や文化を受け継ぎます。

また人は、お祭りに参加することで神様と一体となり、その地で育ててもらった縁を感じ、地域での存在感を知ることができます。

皆様も思い出して下さい。遊ぶ場所と言えば鎮守の森「神社」ではなかったでしょうか。私の小学校時代の遊び場は実家の神社でした。野球をしたり、サッカーをしたり、かくれんぼ、鬼ごっこをしたことを覚えています。

私たちの祖先も、鎮守の森でのふれあいを通して、子供たちの心を育てる教育の場、癒しの場、さらに伝統文化を継承する場として大切に守ってきたと思います。

話は変わりますが、近年若者を中心に力を合わせて地元のクラブチームを応援しようとする熱が全国的に帯びてきていると思います。

石川県においても、野球では石川ミリオンスターズ、サッカーではJ3のツエーゲン金沢、更に大相撲では遠藤関の快進撃など地元が盛り上がっています。

これは、選手が良い成績を出すことも大事ですが、地域発展の為に、地元をアピールし、また地元の人々はチームの為に支援をし、熱い応援を選手に届けるというように、お互いに地域を中心として強い絆と郷土を愛する意識があるからだと思っています。

スポーツと神社のことを関連づけることは難しいですが、オリンピックまたサッカーや

野球のワールドカップでは、選手達が日の丸を背負い戦う姿に、皆様も寝るのを惜しんで応援したと思います。

スポーツというのは、皆が自然と心が一つになる、「和」を作る力・パワーを持っています。神社は、古来より氏神信仰を尊び、一所懸命に氏神地域を守り、日本人は「協調」や「和」の精神を最も尊んできました。

「スポーツ」と「神社」の精神は、類似していると考えます。

現代の若者たちは、一つの事に興味を持つと、それがきつかけとなり、共通意識をもった仲間とが協力しあい、若い力を結束させ、物事を作りあげて、新しい力を生み出します。郷土を愛する若い氏子が鎮守の森「神社」へと自然と集い、それぞれが地域社会の一員として自覚と責任とを身につけて、若い力で地域発展の為に尽くしてくれると信じています。

唱歌「ふるさと」の三題目に「志を果たして いつの日にか帰らん 山はあおきふるさと 水は清き ふるさと」とあります。

これは「故郷を離れて都会に出て、一人前の立派な社会人になり、いつか、ひとつでも大きな仕事を成し遂げたら、故郷に帰ろうと思う。緑の美しい、あの故郷へ。澄んだ水の

流れる、あの故郷へ。」これこそが、今若い人達に伝えたい日本人の心だと思っています。

最後になりますが、私たち神職は、「鎮守の森が、日本人の心の拠り所であるということ」「敬神崇祖の伝統精神を子々孫々に正しく伝承することの重要性」を再認識し、今一度神職としての原点に立ち返り、氏子崇敬者の皆様に正しく認識して頂く為に、解りやすい「言語」を用いて説明できるよう心掛けていかなければならないと思います。

ご静聴有難うございました。

(石川県 白山比咩神社 権禰宜)

温故知新

廣井嗣雄

今日は春のお祭りで、町に引つ越された方々からも参拝いただきました。中越大地震で、大切にしていた田畑が壊れ、やむなく町に引つ越された方が多いですね。十三軒あった家が五軒となりました。今日の参拝者を見ると、お爺さん、お婆さんに代わって参加されたお父さん、お母さん、ご両親と一緒に子供たちの顔が見られます。そこで、子供たちにもわかるように、この地域の先輩の人達が、どのように生活を営んでこられたのかについて、鎮守様との関連でお話をしたいと思います。

昔、古志郡二十村郷と呼ばれていた中の一部落です。どこの家もわずかな平地を工夫して建てられ、百姓の生活をしてきました。耕地が乏しかった昔の人達は、急な斜面を切り開いては田畑を開墾してきました。雨が降ると田畑が崩れ落ち、修復した田んぼが春の雪消えで崩落することの繰り返しが続いていたのです。

いつしか田畑を崩落から守るために、山の神様にお祈りをするようになりました。山の

神様を知っていますか。この辺りでは「十二山の神」と云いますが、「大山祇命」と云います。この神様は山や大地全体を支配し守って下さる神様で、春から秋は「田の神」に、冬には山に帰って「山の神」として山を静かに守ります。春が近づくと、家の近くに雪のお堂を造り、「十二講」祭りをしました。前の日に杉枝を切って皮を剥き、墨で七五三の印を付けた弓を作ります。そして、萱で矢を作ります。お堂には洗米と御神酒をお供えし、山に向かつて「十二山の神」と云って矢を放ちます。これは、春になるので早く里に降りて下さいとの祈りでした。この十二講祭が終わると、山から田んぼへの土運びが始まるのです。土を雪の上に撒くことで雪消えが早まり、新しい土が田んぼに入ること、田んぼの土が生き返る効果があったのです。そして、収穫が終わると「十二様ありがとうございました。山にお帰り下さい。」と感謝を込めてお餅を搗き、神棚にお供えしてお祭りをしておりました。

この部落では、山の斜面に田畑が多いことから十二様を大切にされ、十二様を部落の鎮守様に迎えられたのです。それで神社の名前が「十二神社」となり、部落総出の祭りができあがりました。

また、この部落には「稻荷様」を祀っている家が多くあります。お正月の「荒神様」に

稲荷様のお祭りを合わせてされる家があります。神棚には狐の置物が飾られ、油揚げがお供えされています。どうして「稲荷様」が祀られているのでしょうか。これも、お米に関係するのです。十二様のところでも話しましたが、田んぼを造る時には、お米が上手にたくさん採れるようにと願って日々生活しておりましたね。この稲荷様の信仰は、稲が成ることを願って「稲成り」そして「いなり」と言葉が変化してきたのです。

どうして稲荷様を大切にしてきたのかと云うと、お米は種である一粒の粃から芽を出して、やがてはたくさんのお米を付けますね。昔の人達は、「この稲穂からお米になるまでに八十八日かかる」とも云われておりました。そして、できたお米が一粒の粃から数えられないほどのお米になることで「一粒万倍」と云う言葉が生まれてきました。しかも、稲の穂先に多くの実を付けることから、稲荷様を祀ることで家が繁栄していくと信じられるようになったのです。

ところで、この地域では面白い言い伝えがあるのですよ。それは、「稲荷様を絶対に粗末にはいけない。粗末にすると、バチが当たる。」と云われております。その基は、稲を苦勞して育てた結果、たくさんのお米が実ったのですね。このお米そのものを稲荷様と同じように考え、稲荷様を粗末にすることは、苦勞して育てたお米を粗末にすることに

なり、家の繁栄を壊すことに通じると考えたのです。

今、この部落で採れるお米は二十村郷の中でも一番美味しいと評価され、県内外からのお客さんに喜ばれていますね。ただ美味しいお米ができたのではなく、ここに至るまでには昔の人達の努力が積み重なってできたことを知ってもらいたいと思います。

今は、便利な機械を使って農業をやっておりますが、この土を造るために昔の人達がたくさん汗を流し、いまの皆さんの幸せを作って下さったのです。

毎日の生活の中における行事について、その「いわれ」を調べると、昔の生活の上に今の生活があることがよく分かります。昔のことを知ること、今のことが新しい見方で考えることができるのです。これを「温故知新」といいます。先人の努力に感謝するとともに、毎日の生活の中に努力を取り入れていただくことを期待して、今日のお話を閉じたいと思います。

（新潟県 魚沼神社 宮司）

神樂舞に伝わる日本神話

栗田明廣

これから神樂の奉納がありますが、神樂舞について少しお話をいたします。この地域に伝わる里神樂は、ほとんどが日本の神話に由来するものです。そこには、日本固有の考え方が、遠い昔から変わることなく受け継がれています。

最初は『宮清の舞』です。

伊邪那岐大神が先に亡くなった伊邪那美命に会いに死の国へ行きますが、変わり果てた姿に、恐ろしさのあまり逃げ帰ります。途中、黄泉の国の醜女や雷神等の追っ手から、やつとの思いで逃れてこの世に立ち帰りました。そして、黄泉の国の穢れを取り除くために禊祓いをします。清らかな水の流れて、身も心も清々になりました。その時に多くの神々と一緒に、祓戸大神が生まれました。

神社では、必ず最初に祓いの神事があります。祓戸大神をお願いして汚れを祓ってもらい、元の清らかな姿に戻ってから、神様の前でお祭りや祈願をするのです。

この宮清の舞は、祓戸大神が八垂の紙垂を付けた大麻によって、神楽に関わる人達やお宮、舞い殿を祓い清める舞です。

次は『大矛の舞』です。

高天原で、伊邪那岐命と伊邪那美命は、天津神から「この漂える国を修り固めるように」と天沼矛を渡されました。二柱の神は天と地の間に架けられた天浮橋に立って、その天沼矛を指し下ろして、海面をかき回し、海水をころろと鳴らして引き上げました。その時に、天沼矛の先から滴り落ちた塩が積もり重なって最初の島、オノコロ島ができました。その島に天下りまして、天之御柱を建て広い御殿を建て、そこで日本の国土を始め海や山、木など自然を司る八百万の神々を生みました。

そして、神々から日本人の先祖が生まれ、次々と現在の私たちまで命が受け継がれて来ました。言い換えれば、私たち日本人は、親から生まれ、又その親から生まれて、先祖をたどっていくと神々から生まれたのです。この「人は神から生まれた」ことから、「神々は、子孫である私たちを氏子として守ってくださる身近な存在である」と考えられてきたのです。これが、「唯一絶対的な神が人間や動物を作った」とするキリスト教などと大きく違うところですよ。

この大矛の舞は国生みにまつわる舞です。

三番目は『真榊の舞』です。

皆さんは、天の岩戸開きの神話をご存知と思います。天照大御神様が天の岩戸にお隠れになって、天も地も真暗闇が続き、万の神の声と禍が起こります。そこで、神々が集まり、知恵のある八意思兼神の指示で大きな真榊の木を根こそぎ引き抜いて来ます。その榊の枝に勾玉と八咫鏡をつけ、白や青の布を垂らして、それを布刀玉命が捧げ持ち、天児屋命が祝詞を奏上しました。そして、その後で天宇受売命が伏せた桶を踏み轟かせて神楽を舞い、次第に神憑って舞う姿に、まわりの神々が一斉に大声で笑い出しました。その大きな笑い声に「何事か」と天照大御神様が岩戸を少し開けたのでした。そこで鏡を差し出し、鏡に映る顔を見て大御神が身を乗り出した時に、手力男命が手を引いて岩戸の外に連れ出したのでした。すると、天地がまた元のように明るくなり禍が消えたのでした。

この岩戸開きの神話が、お祭りと神楽舞の起源と考えます。

この真榊の舞は、天児屋命と布刀玉命が、天香具山から葉の生い茂っている真榊の木を掘り起こして据え付ける舞いです。

三年前の東日本大震災の未曾有の災害は、今なお深い悲しみと苦しみの中にいる人が大

勢おります。当時、催しものが次々に自粛される中で、ある神社から、「今年は春祭りの神楽舞を取り止めてはどうでしょうか」との声がありました。その時、私は天の岩戸開きの話をして、

「今年は、春祭りの祝詞に併せて震災復興祈願の祝詞を奏上することにします。その上で、いつものようにも神楽舞をやりましょう。氏子が皆一緒になって賑やかなお祭りをするこ」とが、この神社に鎮まります産土神様に喜んでいただけるものと考えます。」と説きました。神楽舞は、祝詞奏上とともに大事なお祭りなのです。

また、神社では榊がいろいろなところで使われます。お祭りでは玉串を奉って拝礼しますが、榊に紙垂と麻苧をつけた玉串は、この天の岩戸開きの時の真榊、太御幣に由来すると言われます。

この他にも、神話に由来する舞が多い里神楽です。

楽しい神楽舞を見ながら、二千六百年以上も古くから受け継がれてきた、日本人の精神文化の基である日本の神話を再確認してください。そして、子や孫など次世代に神話をしっかりと伝えていきたいものと考えます。

「のはらのうた」と英語教育

鈴木明子

あるひ、のはらむらをさんぽしていますと、かぜみつるくんが
みみもとをとおりぬけていきました。とおりぬけながらはなしてくれたことばが、うた
のようでした。

「まるで うたみたい。」

「そうかい そうかい。」

「かきとめておこうか。」

「たのむぜ。」

かぜはそういうと、やまのほうへはしっていきました。

こねずみしゅんくん、へびいちのすけくん、すみれほのかちゃん、のはらむらのみんな
がしゃべるたびに、うたうたに私は、それをかきとめました。こうやってできたのが、「の
はらのうた」です。と、のはらみんなのだいりにん、工藤直子さんは、詩集「のはらのう

た」の中で書いています。

かまきりりゅうじくんは、こんなうたをうたいます。

おう なつだぜ

おれは げんきだぜ

あまり ちかよるな

おれの ころも かまも

どきどきするほど ひかってるぜ

かぶとてつおくんは、こんな決心をしています。

つよく おおしく いきる

それが ぼくの けっしんです

でも ときどき

むねの やわらかいところが

なきたくなるのね……

なんですか　なあ

子供達の大好きな強くたくましい甲虫、でも甲虫だって、時々なきたくなるに違いないと、工藤直子さんは思うわけです。なんと繊細で、優しい感性でしょう。まさに日本の心ですね。外国人は、虫の鳴き声もうるさい雑音に聞こえるといいます……あの嫌われもののカラスくんだって、彼女によると

こんなうたをうたっています。

ころ

ゆうやけが

あんまり　きれいだつたりすると

おれ　しんとした　ころになる

ゆうやけの　ところへいって

はなしあいたくなる

なにを はなすかっていうと

あかちゃんだったときの こととかさ

しょうらい どうなるかってこととかさ

いつもは こんなこと

おもわないんだぜ……

おれ こころ いっぱいもってるんだな

夕焼けとカラスは日本の原風景です。千年前の清少納言も「カラスの寝どころへ行くとて、三つ四つ 二つ三つなどとび急ぐさえあはれなり」と、枕草子でいっております。

何を見ても「もののあはれ」を感じる日本人の美意識、感性は、平安時代より千年経た現代人にも、しっかりと伝わっております。

しかしこれからの未来は大丈夫でしょうか。

文科省は、小学校から英語教育をとり入れると言っておりますし、今年是指定校が一年生から英語を取り入れております。今年の五月の産経新聞によりますと、五歳以下の幼児

の英検受験が、十年前の五倍、二千五百人になっているそうです。

なんと悲しくも痛ましいことでしょう。英語という言語は、実に単純明快で、日本語みだいに奥深い意味を表す表現がないのです。

例えば、感謝を表す言葉は、サンキュウしかありません。私が、中学校で教師をしておりました時、国語の教師でしたが英語クラブを担当してまして、米国人の女子大生にきてもらっていました。帰りに「お世話になりましたって英語でどう言うのですか。」と聞きますと、「そんな言葉はありません。サンキュウでよい。」というではありませんか。又、お手数かけました、は英語でどう言うのですか、と聞きますと、それもそんな表現はなく、「サンキュウ」でよいと言うのです。そういう表現がない、ということとは、そういう感情、心の働きが無いということ、実に単純な心の働きということなのです。

今、人気のNHKの朝ドラマ、「花子とアン」の中で、This is a long story と言うのを先生は、「これは長い話です。」と訳しますが、生徒の花は、「私だったら、『話せば長い事なのよ、』と訳します。」という場面があります。This is a long story と言う単純な表現が、日本語では、様々な変化を持たせることができます、繊細で、多才な文体（言いまわし）ができるのです。

今、大人気のディズニーのCGアニメ映画「アナと雪の女王」のCGクリエイターの中心的役割を果たしたのは、日本人CGクリエイター『糸数弘樹』さんで、彼のあの素晴らしい映像はどうやって生まれたか。彼は、「僕の原点は、故郷沖縄の久米島です。周りには海で何も無かったから、自分で想像をふくらましてあそんでいました。それで想像力がついたと思います。」と言っています。

藤原正彦さんも天才は美しい風景自然から生まれるとっております。最近の本に『驚くべき日本語』があります。ロジャーパルバースという米国人が書いたのですが（集英社インターナショナル出版）彼は、芭蕉、一茶、与謝野晶子などをとり上げて、日本語の素晴らしさ、世界共通語にもふさわしい普遍性があると述べています。

このすぐれた表現力の日本語は「のはらのうた」のように、虫にも風にも心があると感じることでできる日本の心が紡いだもので、日本民族のアイデンティティなのです。すべてに命があると見、祈りをもつ日本の心そのものなのです。

昭和天皇御製

ななそじを迎えたりけるこの朝も

祈るはただに国のたいらぎ

天皇様のご存在と共に日本語を日本の心を守っていききたいものです。

(滋賀県 立木神社 権禰宜)

直会の前に

五十嵐 章雄

【始めに】

本日は例祭滞りなく取り納めることができました。誠におめでとうございます。

この一年間、大きな災害も無く、無事に過ごすことができましたのも、鎮守様がお守りいただいた賜物と感謝したいと思います。

さて、直会の始まる前に一言お話をしたいと存じます。

【人と人との結びつき】

東北大震災のときに、一番にかけつけて被災者の救済活動にあたったのは、どういう団体であったと思われますか。答えは山口組の皆さんだったそうです。このことは元自衛隊の方から中堅研修の折にお聞きした話です。やはり構成員同士の結びつきが強い団体は動きが速いということになりましょうか。どういった力で結びついているかはともかくとし

てですが。

遡りますが、阪神淡路大震災のとき、復興が速かった地域は神社の氏子組織がしっかり機能していたところだったというお話もあります。やはり人と人との結びつきが強い地域は災害にも強いということだと思われます。

【直会の意味】

さて、直会ですが、元の意味は「直り合う」ということだったそうです。祭りその他の神事の前には生活、行動を正して斎戒いたします。そしてお祓いを受けて初めて神事に参加できるわけですが、神事が終わった後で、普段の生活に直る（戻る）ために皆でお神酒をいただいたり、神様のお下がりをいただきます。その時にいろいろと話したり、斎戒の苦労をねぎらい合ったりすることで、互いの絆が深まっていくわけです。

【地域を支える稲作文化】

当地域は、四十年ほど前までは殆どの家庭が米を作っていました。稲作は共同作業がどうしても必要であります。ところが最近では殆どの家庭が勤めに出ており、なかなか隣近

所との共同作業ができない状況があります。祭り、直会は、地域の結びつきを維持する大切な機会といえるでしょう。

また、農業は天候頼みという側面があります。これは人間の力ではどうにもなりません。したがって神頼みが必要であります。ここにお祭りの意義があります。春の例祭には今年の稲作が天候の被害を受けることなく、雨もお天気もほどほどに豊作になることを祈ります。そして秋には収穫を感謝する秋の例祭につながっていくわけです。

【直接会って話すこと】

人と人とのコミュニケーションにはいろいろな方法がありますが、手紙などの文字だけでは情報の二〜三割しか伝わらないと言われています。電話などでは話す速度や声の調子などかなり多くの情報が伝わりますが、それでも表情や身振り手振りなどの様子は伝わりません。やはり直接会って、顔と顔を合わせて話すことで、微妙なニュアンスを伝えることができるのです。昨今子供たちの世界でも電子メールがもとで、いじめにつながったり、最悪の場合自殺などの問題が起きています。文字情報だけでは不足で、例えば同じ「わかったよ。」という言葉でも、受け取る側が被害者的に受け取ったり、たいしたことな

いと軽く受け流してしまったり、様々な誤解や問題が生じてしまいます。

【学校経営に関わって】

私は教員として勤めていた当時、一番苦手な人に会いに行く、ということを経験にしていました。その結果はほぼすべてのケースで自分の気持ちを楽にすることができました。呼び出す（呼びつける）のではなく、出かけていくことが大切ですが。経験を積んで他を指導する立場になってからも、地域へ出ることを奨励しましたが、若い方はなかなか難しい面もありました。どんどん地域へ出て行けば、教員の精神疾患を少なくすることができると思っています。

【むすびに】

そして直会です。顔と顔を合わせて、しかもお神酒という潤滑油も手伝って、（多すぎるとまた問題ですが）またとないコミュニケーションの機会が生まれます。最近の人たちは酒を飲むことを、あるいはそういった会合を嫌がる傾向があります。たしかに酔っぱらいの相手は大変です。だいたいワァワァとうるさい会場で、同じ話を繰り返す相手に相槌

をうったり、なだめたり励ましたりと努力は必要ですが、それに見合うだけ、いやそれ以上の収穫があるはずです。

ことに地域の古老と言われる人たちは、大切な文化を伝承しています。注連縄のない方や、紐の結び方、各種の礼儀作法等々。こういったものを教わるまたとない機会でもあります。

祭と直会。この機会を十分活用して、同じ地域に住む人同士、胸襟を開いて語り合い、互いの絆を深めていくことが大切だと思うのです。せっかく神様が与えてくれた機会なのですから。

（新潟県 白山神社 宮司）

現代の日本文化とは

延村久嗣

「クールジャパン」という言葉を聞いたことがありますか。英語で書くと cool japan なんです。直訳すると涼しい、とかヒンヤリとした。になりますが、冷たい日本、ヒンヤリ日本じゃ何を言っているのかわかりません。これが涼しい↓冷静な↓カッコいいとなり、このカッコいいというニュアンスで使われている様に思います。そのカッコいい日本 cool japan ですが、何がかっこいいのか？という話になるわけですが、これは現在の日本の文化全体をさして使われているように思います。

そこで出てきたのが日本文化というこの「文化」っていうことばですが、一旦クールジャパンは置いときますよ。この「文化」と聞いて皆様はパッと何を連想されますか？文化と名前のつくものをあげると歴史的な○○文化に現される天平文化、安土桃山文化。また文化庁、文化勲章、文化の日、文化祭、文化財、また、最近ではあの日本一の富士山なんかは世界文化遺産と言う名で世界遺産に登録されました。文化放送、文化シャッターなど

と会社名にもつかわれております。このように見るとどれだけあるの？って位たくさん「文化」が使われていますが、じゃあ文化ってなんなの？英語でいうカルチャー（カルチャースクール）

小学生用の国語辞典をひくと

①世の中が開け進んで暮らしが豊かに、また便利になること。

②学問、芸術、法律、経済など人間の働きによつて築いたもの。

と載っています。またインターネットのウィキペディアで調べると 定義はいくつか存在するが、総じると人間が社会の成員として獲得する振る舞いの複合された総体のこと。民族、地域、社会組織ごとに固有の文化が存在する。なんて聞いても全く理解し難い文です。コトバンクでは「人間の生活様式の全体。人類が自らの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体。とあり・用法では文化・文明「文化は」民族や社会の風習・伝統・思考方法・価値観など総称で、世代を通じて伝承されていくものを意味する。…とつづきますが。言葉で説明しづらいですね。

では「クールジャパン」cool japanの話に戻りますが具体的に日本における近代文

化をさしているようです。特にゲーム・漫画・アニメ・アイドル。などのポップカルチャーをさす場合が多いが、自動車や電機機器などの日本製品。現代の食文化、ファッション、現代アート、建築をさす。又伝統的な日本料理、武道陽や華道なども対象です。芸能界では昔「不倫は文化」なんて迷言をいった人もいますね。これはクールでなくてホットジャパンですわ。火傷します。冗談はさておき、このクールジャパンで日本を売り込む。経済産業省にクールジャパン室が置かれてクールジャパン戦略担当大臣もおかれて産業や伝統文化を海外に売り込む取り組みもされています。

反対に批判的な観点からみると、日本の伝統的な価値観からすると低位な経済価値を求めようとするだけに偏っていて、大衆文化をふくめた日本的価値観そのものに対する国際的理解を高めることに重点を置くべき。経済効果はそれに付随するものと考えるべき。との見方もあります。

私は昔初めて奉職したときに、宮司さんにこのような事を言われました。「諸外国にいて君たちみたいな若者と話す機会が多々あるが皆しつかりと自国に誇りを持って自分達の文化を説明するが、日本人は全くできないね。出来る？」なんて言われて。全くできなかった自分が恥ずかしかったです。今では少しできるのかな？なんて未だに思います。

話は変わりますが本日からワールドカップですね、侍ジャパンの名の下に国民が一体となって応援していますね。最近ではこのワールドカップだけでなくスポーツ文化が盛り上がり二〇二〇年には東京オリンピックが開催されます。この姿も現代の日本文化を現すものの一つかと思われれます。一つ一つの様々な要因が絡み合い、時を経て日本の文化が形成されていくように思われれます。

取りとめのないことを話してきましたが、この文化をしっかりと一人ひとりが話せるようになり、自国に誇りをもっていたきたい。先人が培ってきたものの引き続いてをもっと高めていけるようにそして世界に誇れる日本国民である自覚をもっていたきたい。との想いをお伝えもうしあげまして本日のまとめとさせて頂きます。

余談

タバコの銘柄。「Kool」は、「Kiss Only One Lady」って意味だと聞いたことがあるのですが定かではない。

「神様のおみちびき」

西尾 酒子

本日は若い皆様方、お日柄も良き日、ようこそご参拝下さいました。ありがとうございます。
ます。皆様とお会いできることを楽しみにしております。

「目に見えぬ 神の縁えにしに 導かれ みなのしあわせ 祈り奉らむ」

私は、神様のお導きのお蔭で、人と人との出会い、縁を結び、幸せな人生を歩めるのだと信じています。

本日、この新しく甦った御本殿、並びに新築されたばかりの御拝殿で皆様と共にお待ちしております。

今日は私事で大変恐縮に存じますが、神様のお導きで奇跡的にここまで人生を歩んできたことの体験談の一部をお聞き頂きたいと思っています。

私は、宇宙の中の地球、地球の中の日本、日本の中の和歌山県、海南市阪井（旧たつみ村）ぎょくりんざん玉輪山に鎮まります杉尾神社御祭神 大山祇大神様のお導きによって、杉尾神社宮司

小川斎の長女として、命を授けて戴きました。本当にありがたく思っています。

しかし、私は十七歳の時、生きる事に悩み苦しんでいました。そんなとき、杉尾神社とご縁のある方に、当時の京都大学文学部長 井島 勉先生をご紹介戴きました。そして井島先生のご助言によって将来初等教育者になることを決めることができ、教育の世界に進むことができました。この井島先生との出会いも正に神様のお導きです。

その後も数限りない神様のお導きによって、四人の子供を育てながら健康で無事に人生を歩み、平成十五年三月三十一日をもって小学校教諭を定年退職できました。神様のお守り、お導きのお蔭に心から感謝しております。

定年退職後、平成十六年の春、現在の和歌山県神社庁西川秀紀庁長様（東照宮 徳川家康公頼宣公を奉る宮司）から

「長年の間 祀られていない宇治神社に奉仕してくれませんか。」

ともいもかけないご依頼を頂きました。しかし、当時宇治神社の由緒等全く知らなかったのですぐには返事できませんでした。それでそのあと、ご由緒を調べました。

宇治神社は、初代紀州徳川家当主、徳川頼宣公の鎮守の神様で、現在の御本殿は江戸時代末期の約二百年前のもので、第十四代將軍徳川家茂公が將軍職に就く前に、篤姫様の養

子となって將軍になれるようにと祈願されて建立されたものであることが分かりました。ご存じの通り家茂公は宇治神社の大神様のお導きで見事將軍になりました。さらに調べると、八代天皇孝元天皇の時代に、紀の直である宇須彦様が宇治神社に天照大御神様をお奉りされていたことも分かり、宇須彦様の妹である影姫様は武内宿禰の実母であることも分かりました。

このように、大変ご由緒ある宇治神社ですが、私の自宅から車で約一時間かかる和歌山市に鎮座しています。見知らぬ地域で、果たして私のような未熟者が復興できるかとても心配でした。しかし私には、天照大御神様のお兄様の杉尾神社御祭神大山祇大神様のお導きとしか思えませんでした。ご依頼を受けてから一年後、お引き受けすることになりました。そして、平成十七年五月一日に兼ねて宮司を拝命。昭和十七年五月十五日生まれの私は、生まれ変わったつもりでご奉仕する事にしました。これも目に見えぬ確かに存在する神様のお導きに他ならないと実感しています。

さてここからは、このように美しい御本殿に大神様を御鎮まりいただけるまでに至った奇跡とも思える神様のお導きの一部を皆様にお聞き戴きたいと思います。

一つ目は、神ながらの道は、清めを重視します。私が初めて宇治神社を参拝したとき、

境内の楠の木の葉が一面、絨毯を敷いたように積もっていました。また境内全域に草が生い茂っていました。つまり長い間清掃されていない様子でした。特に驚いたのは、神様のご鎮座されている一番大事な御本殿の御柱に八ミリくらいの白い虫が、大群を成してぞろぞろと這い上がっており、びっくりしました。もうどうしたらいいのか戸惑うばかりでした。

白い虫に覆われた御本殿の様子に私は、知らず知らずに涙がこぼれてきました。虫もさることながら、更にじっと御本殿を見つめると、実にすばらしい彫り物が施されていることに気づきました。象・獅子・龍などまるで生きているような躍動感あふれる彫り物です。また脇障子左には、鯉の瀧のぼり、右には、獅子の雲龍のぼりがあり、四柱を囲んでいる四匹の動物たちが、神様をお守りしているデザインになっていることにとても驚きました。私は、宇治神社の御由緒を知り、御本殿の素晴らしい姿を目にしたとき、どうしても復興せねばならないという気持ちになり、これぞ我が使命であると覚悟した次第です。

そして、あまりにも美しくもつたないお社なので、文化財にして欲しいという希望で和歌山県庁の文化財課を訪ねました。すると

「文化財を希望するには、和歌山市からの申請が必要だ。」

と言われました。その帰り、偶然ふと掲示板を見たとき、京都大学教授吉村剛先生による「シロアリ」の講演会の告知ポスターが目に見え込んできました。直感的に宇治神社御本殿の虫は、シロアリかも知れないと思い、吉村先生に思い切って電話でご相談したところ、フィルム入れに虫を入れて先生宛に送るようにご指示を頂きました。送った結果やはり、シロアリでした。困っている現状をお便りすると、十一月に宇治神社に直接視察に来て下さいました。そして

「来年の平成十八年六月中にアリの巣を取りに行きます。」と約束して下さいましたのです。その時、もうこれは神様の奇跡のお導きとしか思えませんでした。

しかし平成十八年五月になると羽をはやしたシロアリが、ブンブン飛び出して、御本殿の御柱にまた大群を成してのぼりはじめ、木の屑がぼろぼろ落ちる事態となったため、吉村先生にお電話しましたところ、忘れもしません。早速五月十七日に駆けつけて下さいました。感謝、感激です。

そして、五月十七日小雨の降る中、先生がお着きになって、お祓いと祈願を済ませた後、十時半頃からいよいよシロアリの巣の探索、発掘作業にとりかかり、午後三時半すぎに

「アリの巣、見つかった。」

「見つかったぞう」

と歓声があがり、みんな大喜び。ニメートル以上の地下に大きなシロアリの巣が三個もありました。

先生は巣をお持ち帰りになり、研究のために育ててくださいました。宇治神社にある「禁殺生」の石碑の通り、害虫とされているシロアリをも生かし、役立てて下さった事に感激しました。そしてこのことは目に見えない神様のお導き以外、何者でもありません。

その後平成十九年からは、シロアリも姿を見せなくなりました。本当に嬉しかったです。しかし、シロアリに蝕まれた御本殿のみすばらしい姿を見るたびに私は悲しみで胸がつまりそうでした。なんとしても宇治神社を復興せねばと、夢に燃え、平成十八年歳旦祭式典後、一人で百度参りを行い、復興祈願をしました。

すると平成十八年九月には宇治神社地区総代十名がそろうことができました。続いて実行委員会を立ち上げてご寄付を募ることになりました。

しかし、長年氏子に忘れられていた宇治神社のことです。なかなか寄付が集まらず、毎月一回の総代会で話し合いを重ね、再度宇治神社御本殿修築奉賛会を立ち上げて、委員長・

副委員長・事務局・会計の五名の役員で進めていくことになりました。

二つ目の奇跡と考えることは、修築して戴く宮大工さんの見積もりの話し合いで責任役員が真剣に取り組んでくれるようになったことです。

私も県の文化財課の方に見積もりを取りました。ある日のこと悩んでいると私の夫が

「宮大工のいかるが工舎棟梁小川三夫さんが表彰されている。」

と言つて新聞を持ってきてくれました。それを見てお便りをする、なんとご本人が直接御本殿を見に来て下さいました。予想を超える展開に、ありがたいやら嬉しいやらで恐縮してしまいました。小川棟梁は

「文化財課の人の見積もりだったら引き受けられる。材料も有るから。」

と言つて下さいました。神様のお導きとしか思えませんでした。日本一と称されるいかるが工房の宮大工さんに修築していただけるなんて夢のような気分でした。

しかし、肝心のお金が集まらなければどうすることもできません。宝くじを買ってくれた総代さんもありましたが、みんなの力で修築して欲しいと神様のお声が聞こえてきました。

その後、平成二十一年四月総代会で全地区戸数へ宇治神社の復興を呼びかけ、奉賛の協力のため責任役員のお一人が、お願いに廻ってくれることになり、平成二十三年になって

修復資金の目途がついてきたので、やっとの思いで、いかるが工舎小川棟梁と打合せをできる運びとなりました。小川棟梁が五月に再度訪問して下さい、

「来年の秋祭りが出来るようにしませんか。やっぱり一年は、かかるね。」
と言って下さいました。

こんなにも早く御本殿修復事業が進展するとは思いませんでした。もう奇跡の連続です。大神様は一日も早く麗しい御殿にお住まいなさりたかったに違いありません。そして大神様のお導きと皆さんの温かいご支援ご協力によって、いかるが工舎の宮大工さんが一年かけて立派に修築して下さいました。

平成二十四年十一月十八日、とうとう御本殿竣工奉祝祭を盛大に執り行うことができました。

宇治の大神様のお導きによって私も皆さんも生かされ、今がある事を悟られました。私は、あなた方のように若くはないけれど、あなた方に伝えたい。クラーク博士は言いました。

「若者よ、大志をいだけ。この老人のように。」

神様のお導きを信じて、世のため、人のために自らの命を尽くし、人生を輝かして下さい

い。生きていて良かったと言える人生に、ゆっくりでもいいから一步一步真剣に、自分
しかできない道を決してあきらめずにきり開いて、歩んで下さい。

きっと大神様は導き下さるでしょう。私も皆さんに負けないように、元氣にがんばり
ます。

皆さんのお幸せを日々神様にお祈り致します。

「目に見えぬ 神の縁えにしに導かれ いのちのかぎり 仕え奉らむ」

ご静聴ありがとうございます。またのご参拝をお待ち申し上げ、お会い出来る日を楽
しみにしております。

(和歌山県 宇治神社 宮司)

剣風祭のあとで

―道場と神棚―

芦 原 高 穂

恒例の剣風祭を奉仕させていただきました。一言御挨拶致します。

旭川剣風会は昭和四十一年発足ですが、昭和四十九年三月、剣士の誓いが制定されます。五箇条のちかいは、「一、神仏を敬います、礼節を重んじます。鍛錬を念とします。勇気を尊びます。責任を全うします。」でした。

この事もあって昭和六十一年旭川兵村記念館研修室を改装し、コンクリート床だったのを床板張りの剣道場として活用することになり現在の道場が整備されて、自前の道場として利用されることになりました。このようなことから、同時に本格的な道場として、ここに神棚を奉斎することとなったわけです。

この道場の神棚は、昭和六十二年師走に当時の藤永会長岩谷副会長平田副会長が、先代宮司と共に道場の守り神様として、鹿島神宮及び香取神宮に参向して、御神璽を拝受おま

つりしましたが、一般に剣道場に限らず武道場には昔から神棚が祀られたり、その外に御神名を記しました掛け軸などが掛けられておりました。

ことに、鹿島神宮の御祭神武甕槌大神、香取神宮の経津主大神は共に天孫降臨に先立ち出雲国平定に功績あげられ武術の神として、古来崇敬を集めてきた神様ですが、特に鹿島神宮では戦国時代の剣豪、兵法家。父祖伝来の鹿島古流（鹿島中古流）に加え、天真正伝香取神道流を修めて、鹿島神道流を開いた。塚原卜伝が修行されたところとしても有名であります。

昔から剣の道の修業には、厳しい稽古を通して己の心を磨き人格の陶冶を果たす意味で「剣心一如」とも言いますが、単に技の習得や目先の勝ち負けを追求するような姿勢を戒めてきました。

勿論、真剣な稽古など修練への姿勢を堅持し神様に見ていただくことで剣の道の上達や、怪我過ちを未然に防ぐ事への祈りなどは、当然のことですが、それ以上に 神の存在を心の鏡として、「人の目はごまかせても、神様の目はごまかせない」と自らの反省への心や、自分はこれ以上できないと勝手に思い込んでしまうこともあるでしょう。しかし、神様を前にして、「本当にこれまでなのか」と自分自身に問いかけるきっかけともなるでしょう。

剣道を始めたばかりの剣士もおられますが、人の心というものは、誰しもそうですが、厳しいとわかっていても、必ず怠け心というものが、芽生えます。普段の稽古でも強く厳しい先生の処はできるだけさげたい、やさしくて早く終わる先生の処に並びたいと思うものです。

家でぬくぬくとゲームやおもしろいテレビを見ることを諦めて、降り積もる雪を踏みしめて厳しい稽古の道場に行かなければならない。

又苦しい稽古が待っていると思うとおなかも痛くなります。叩かれてもいない頭が突然痛くなるのです。

寝冷えもせず元気に学校に行っていたはずなのに、熱を出してしまうのが人というものなのかも知れません。

心の中で「勉強するのなら稽古休んでもいいいわよ」なんてお母さんが言ってくれるのを心待ちにしている人もいるでしょう。

それでも皆さんは、特に冬の稽古は、雪の厳しい寒さをこらえ道場に通わなければなりません。練習に通うだけでも立派なことです。

怠け心や易きに流れる弱い心は、まわりの人にはわかりません、しかし、神様にはお見

通しであると云うことです。

そうした心を神様或いは神様を祀る神棚は、戒める意味において古来より祀られてきました。

先ほどふれました道場訓であります『剣士の誓い』はそうした道場での姿勢と剣道を志すだけでなく、生活の中で肝に銘じていかなければならない、事ばかりです。

剣道という『道』には言うまでも無く到達点がありません。また、昔から文武両道或いは文武不岐とも言われ、普段の学習をおろそかにする事をも戒めております。

はたまた、目を世界に転じますと、この地球上には満足に食事を取ることもままならず、自らの将来を夢見ることも叶わず、戦火にまみれ貧困にうちひしがれて食うや食わずの暮らしを余儀なくされている子供たちが、数多いことを忘れてはならないと思います。

日本という国が、極東の島国でありながら世界に冠たる大国で、国家という枠組みがこれほどしっかりとっている国は世界でも希な存在であることを、認識しなければなりません。

これは単なる経済発展の成果ではありません。長い歴史の中で、世界にも二つとは無い皇室をいただく悠久の民として、世界からは羨望の的にも成っているのが我国であると言うことです。

そして、その根本をなすのが、さきほどからお話ししている神棚の存在です。

鹿島香取の両神宮の大神様と共に祀られている、天照皇大神宮と書かれた御神札が伊勢の神宮であります。

遙かに長い歴史の中でその中心に一筋の糸のように絶えることなく続くこの命のつながりが皇室であり、取り巻くようにいろいろな歴史の糸があざなわれて我国の歴史が成り立っております。

この御神札を祀ることは、すなわちそうした日本の歴史につながって暮らすことでもあります。つまり日本人として暮らすにふさわしい家とは、この御神札を祀る神棚を家の柱として、整えていくことであります。

(北海道 旭川神社 宮司)

神社参拝の作法

四 柳 光 樹

さて本日は神社参拝の作法についてお話しさせて頂きたいと思います。

昨今、神社への参拝というのは、特に若い世代の方などは、なかなか日常ではしないものですから、正式な作法をご存じない方も多いのではないかと思います。しかし、作法ばかりを意識すると、どうしても形にとらわれてしまい、形式的になりがちです。気持ちを込めて、なおかつ正式な作法を行うためにはそれぞれの作法の意味をご理解頂く事が大切ではないかと考えます。

まず、神社の神域に入るときに最初に目にするものは鳥居だと思っています。地図記号でも神社は鳥居で示されるように、神社といえは鳥居をイメージされる方は多いのではないのでしょうか。鳥居の語源として主要な説として天照大御神様を天岩戸から誘い出すために鳴かせた「常世の長鳴鳥（とこよのながなきどり）」に因み、神前に鶏の止まり木を置いたことが起源であるとする説や、「通り入る」が転化したものといわれています。鳥居から

先は神域に入ることになりますので、身だしなみ、心を整え、鳥居の前で一礼をして入ります。参道を進むときは参道の中央を進んではいけません。参道を進む際は、左右どちらか端を歩き、中央は歩かないようにします。参道の中央は「正中」といひまして、神様が通る道なので、我々が通るところではないのです。一つの神社に二つ以上の鳥居がある場合は、一番外側にあるものを一の鳥居と言ひ神社に近づくにしたがつて順に二の鳥居、三の鳥居と呼んでいます。

鳥居を抜け、進みますと次に手水舎があります。古くは神前に流れている川で手を洗い口をすすいだりして清めていました。伊勢の神宮ではこの形がそのまま残っています。神宮では五十鈴川にある手洗場で清めるようになっています。手水の作法は、まず右手で柄杓に清水を汲み、左手を清めます。次に柄杓を左手に持ちかえ同様に右手を清めます。再び柄杓を右手に持ちかえ、左の手のひらに水を受け口をすすぎます。口をすすぎ終わってもう一度左手を清めます。最後に柄杓を立て残った水で柄杓の柄を清めてから元の位置に伏せて置きます。口をすすぐのは身体の内を清め、手を洗うのは身体の外を清める意味です。

心身を清め、心静かに参道を歩いていますと、いよいよ御本殿に至ります。御本殿の中

には、ご祈祷を受けたりする所の「拝殿」があります。拝殿の前には普通賽銭箱が置いてあり、そこで一般の参拝者はお参りをします

お賽銭は神社やお寺に拝礼するときにお礼のためにあげるお金のことです。ですからお賽銭の風習が始まったのは、お金が流通するようになった頃からです。それ以前には賽銭に相当するものとして、参拝者はお米を紙に包んで神様に捧げていました。そのなごりとして、今でもお賽銭を紙に包み「おひねり」にして賽銭箱に入れられる人もいます。お賽銭は供物の一種で神に奉獻する物の意味と、罪けがれを祓い清める科料としての意味があります。最も省略した形の神への捧げ物といえます。お金をあげれば御利益があると考えたのではなく、神の御守護に対する感謝の気持ちを表すためのお礼としての考えを忘れないようにすることが本義です。

神社での参拝は、心身を正し、清い心で神様をお参りすればそれでよいのですが、形に表すことも大事なことです。そのための一定の作法があります。その作法を覚えておくことも必要です。神前での参拝は基本的に「二拝二拍手一拝」の作法で参拝します。神前に立ちましたら、神様のおそばに寄らせていただいたご挨拶として軽くおじぎをします。それから深々と頭を二回下げます。次に胸の高さで両手を合わせてから、二度拍手をします。

次に、再び胸の高さで両手を合わせ、祈念致します。次に、深々と頭を下げて一拝します最後に軽くおじぎをして神前を去るためのご挨拶をして終わります。この参拝方法は神社ばかりでなく、家庭の神棚の作法にも使います。中国の『魏志倭人伝』によりますと、日本の風習として、貴き人に会うと手を打ちぬかづいて頭を下げ挨拶すると記録されています。手を打つことは武器を隠し持っていない証拠として手を打ち、頭を下げぬかづくことは無防備として攻撃心のないことを表現し心から敬う態度を表しています。こうした相手を敬う表現が今日まで残されているのが神社での参拝の姿なのです。又、赤ん坊がとても喜ぶとき、教えもしないのに手をたたいて喜びます。これは喜びの表現の自然な姿だと思えます。こうした喜びの拍手を添えることが敬礼作法の最上の姿として神社参拝の作法に残されているのです。

次に、神社で厄祓等のご祈禱をしたり神前結婚式を挙げたりすると必ず玉串奉奠をします。神の小枝に紙垂や麻を取り付けた物を神様に謹んで奉る作法です。玉串を奉る意味について木は神霊の宿る依代と考えられますので、転じて、自分の真心を玉串に宿して神様に伝える物であるとか、玉串は神様に捧げる金品を象徴したお供え物である等の説があります。いずれにしても、玉串は神様に捧げる自分の真心を示した物です。玉串を神様に奉

る一般的な作法としては、まず、神職から玉串を受け取るとき、右手で玉串の根元を持ち、左手で玉串の穂先の中ほどを持って両手で受け取ります。そして、胸の前にやや左高に持ち構えます。次に、神前の机（八足案）の前に進み、軽く一礼します。次に、玉串の根元を神様に向けて机の上に奉ります。その際の作法は、胸高に持った玉串の根元を手前にひき、一度玉串を立てて、左手を玉串の根元にすり下げ、左手で玉串を「の」の字なりに回して穂先を右手に移し、両手を添えて根元を神前に向け机の上に奉ります。次に、二拝二拍手一拝をして、軽く一礼ののち神前を退きます

以上、簡単ではありますが、神社における参拝作法のご説明をさせて頂きました。

（石川県 櫛比神社 禰宜）

生活の中の神社

黒 木 崇 史

全国各地には数多くの神社があります。どういった時に参拝に行くかというと一番に思いつくのはまず初詣だと思います。それだけではなく子供の健やかな成長を願う初宮詣や七五三、人生の節目に参る厄除け祈願、神前で結婚式、又自分の特別な思いを祈願したい時。多くの日本人が生活の中で神社・神様と関わる事があります。このような神様への信仰はいつごろから生まれたのでしょうか。

大昔の縄文時代と呼ばれる時代の暮らしは狩猟や漁業、あるいは木の実、葉っぱ等の自然の物を取って食べるのが主で、それらに適した土地から土地に移動しながら生活をしていました。自然の条件に左右される事の多い生活で、現代人の私たちと比べると、想像を絶する不安定な毎日です。そんな中で日々起こる自然現象に感謝と恐怖を感じながら、呪術・おまじないによって自然の恵みを祈る風習が始まります。弥生時代になると、稲作農耕が日本各地で行われるようになります。稲作は種蒔・田植・雑草を抜く除草作業・水を

引き入れる灌漑作業・収穫とあり、とても一人の力だけでは成り立ちませんので、ある程度的人数で共同生活を送るようになります。そんな中、日照りや大雨等の気象の変化を神様の行いと考えて、みんなで広場に集まり出来栄えを占ったり、神様にたくさん収穫できるように祈りを捧げたり、収穫した後は感謝を申し上げるようになりました。これが祭の始まりと考えられます。こうした時代を経て、やがて人間に住む家が必要なように、神様にも住む家が必要と考えられてつくられたのが神社です。

稲作に関しては、日本の昔話の古事記や日本書紀の中に伊勢の神宮にお祀りをされている天照大神さまが、自分達の主食であったお米の稲穂を孫にあたる瓊瓊杵尊にお授けになり、これで国民を養いなさいと命じた事から稲が作られ、食べられるようになったと伝わっています。つまり稲穂をもって私達が生きていく上での生活の重要な基本を示された事になります。十一月二十三日には全国の神社で新嘗祭というお祭が行われます。その年に取れたお米を神様にお供えして感謝を申し上げるお祭りで、神社で行われるお祭の中でも最も重要な一つです。現在十一月二十三日は勤労感謝の日となっていますが、これは戦後の昭和二十三年に改名されたものであり、それまでは新嘗祭の日と呼ばれていました。神様にお供えする食物は魚や野菜・果物とありますが、その中で最も重要とされています。

るのがお米で、それに次いでお米を基に作られるお酒やお餅となっています。お米を残すと目がつぶれると言われますが、これはお米が神様から授かった大切な物、無事に収穫出来た事の神様に対する感謝、それを作った農家の人々への感謝から来る言葉なのです。

それでは次に人生の中で神社にお参りをする主だった機会についてお話をします。先ずは「初宮詣」です。「お宮参り」とも呼ばれますが、地域によって差はありますが、だいたい生まれてから三十日前後に生まれて初めて神社に参拝します。自分が住んでいる所の神様に無事に生まれた事の報告と、生まれてきた赤ちゃんを神様にお目にかけ、一人の人間として認めてもらう事が目的です。その為にわざわざ神様の前でつねたりして赤ちゃんを泣かせるという習慣もあります。そうして赤ちゃんの健やかな成長を祈願します。

次に「七五三」です。十一月十五日を中心に行われ三歳の男女、五歳の男の子、七歳の女の子のお祝いで、神社にお参りして今までの無事とさらなる成長を祈願します。三歳の時は髪置の祝と言い、それまで絶えず切ったり、剃ったりしていた髪の毛を整え伸ばし始める儀式です。五歳の時は袴着の祝と言い、初めて袴を着せる儀式です。七歳の時は帯解きの祝いと言い、この日から着物の付紐を解き始めて帯を用いる儀式です。

次に「厄払い」です。人は一生のうちに災難に合う恐れが多くあります。中でも特に注

意して行いを慎まなければならない年齢があります。それを厄年と言ひ、神社に参拝し厄除けの祈祷を行います。厄年とする年齢は一般には男性が二十五・四十二・六十一歳で、女性が十九・三十三・三十七歳とされ、中でも男性の四十二歳・女性の三十三歳は体力的にも精神的にも変化の多い歳と考えられ大厄とされています。

日本の神様・神社というのは、先に述べたとおり稲作と深く関係しており、神様からの恵みに対する感謝の気持ちを持つ事が大切です。現在では初宮詣・七五三・厄払い、それ以外でも交通安全、商売繁盛、合格祈願等様々な願いを胸に神社に参拝に訪れますが、自分の願いを伝えるだけではなく、先ずは日々無事に過ごせている事に感謝を申し上げる事を忘れずにお参り頂きたいと思ひます。

(京都府 北野天満宮 権禰宜)

遷宮奉拝記

塩崎昇

平成二十五年十月一日。この日から六日まで、伊勢の神宮の内宮と外宮で、式年遷宮のクライマックスである遷宮祭（川原大祓 遷御の儀 奉幣の儀）が執り行なわれました。私は、神宮の旧職員として奉仕すべく、伊勢に向いました。なつかしい仲間たちとの再会。そして、二十年前に奉仕したご遷宮の体験を思い起こしつつ、再びお仕えできるよろこびと、重責を担う緊張感につつまれた充実した六日間でした。特に、十月二日の内宮、遷御の儀は、ご正宮、板垣内の奉拝席で、係員として奉拝することが出来ました。今日は、遷御の儀を奉拝した感激を、皆さんにお伝えしたいと思います。

十月二日、午後六時頃、夕闇につつまれた奉拝席に着席しました。そこは、秋篠宮殿下のお側に仕える方々をはじめ、麻生副総理大臣以下閣僚の皆さん奉拝される特別な席でした。ここでは、誰ひとり私語を言う人がなく、目の前には、暗闇の中で、御垣内に焚かれた庭燎の明かりだけが、ぼんやりと浮かんで見えていました。そして、コオロギなどの秋

の虫の鳴き声と、時折、シカやムササビの声が聞こえてくる薄暗い静寂の中にいました。やがて、遙か遠くから太鼓の音がこだまして聞こえてきました。これは、祭主以下祭員が参進したことを知らせる合図で、やがて、浅沓（あさぐつ）が玉砂利を踏みしめる「ザッザッ　ザッ」という音が遠くからこだまして聞こえてきました。

いよいよはじまった。行列の音は玉串行事所あたりで止まり、行事の間、玉砂利を踏み足音だけがかすかに聞こえてきます。耳を澄ましながら、ずいぶんと時が流れたように思いました。やがて、浅沓で石段を上がる「カタン　カタン」という音。ようやく黒田清子臨時祭主、大宮司以下禰宜が両手に太玉串をもち、威儀を正して参入してまいります。私たちはそれを起立、低頭して迎えました。つづいて、御垣内で玉串行事がはじまります。しかし、暗くてよく見えません。やがて諸員は更に奥の内院へとゆっくり参入してゆきました。奉拝席はただただ沈黙、全くの暗闇と静寂でした。

ふと、気がつくとい強い風が吹いています。奉拝席にわずかに吹き込むのですが、強い風は上空を舞っています。見上げると鬱蒼とした神杉がザーッ　ザーと音をたててゆっくりと大きく揺れています。時計に目をやると時刻は七時二十分。ここに座ってから、一時間半も経過しています。そして、この大風、私は、最初　九州地方に接近してきている台風

の影響かと思ひかけましたが、

いや、これは違う……。急に頭の中に大祓詞（おおはらえのことば）の一節が浮かびました。「事問いし、磐根樹根立（いわねきねたち）草の片葉（かきは）をも語（こと）止めて、天（あめ）の磐座（いわくら）放ち、天の八重雲（やえくも）を伊頭（いず）の千別（ちわ）きに千別きて、天降（あまくだ）し依さし奉りき」神話にある天孫降臨（てんそんこうりん）を表した一節です。

八咫御鏡（やたのみかがみ）を奉じた神々が、いよいよこの地上に降臨するとき、ざわついていた草や木も、ついに静かに息をひそめて、そのときを待った。そんな情景をあらわした一節です。この時刻は、まさに正殿の御扉が開け放たれ、遷御の御列を整えるため、召し立ての真つ最中。午後8時の出御をひかえた、緊張の高まる時刻です。私は、ひよつとすると今吹き荒れているこの風は、出御の頃には止むのかも知れない……。そんなことを考えながら、風の音を聞いていました。

それからどれくらい時間が経ったのか、気がつくと、風がすっかり止んでいました。そして、あたりは再び、虫の声だけがひびく元の静寂の闇に戻っていました。すると、しばらくして、鶏鳴三声が聞こえてきました。「カケコー カケコー」と、甲高い、まさに

朝の鶏の第一声を思わせる声です。そして、神楽歌（かぐらうた）と雅楽の調べが、おごそかに聞こえはじめました。

ああ、いよいよ出御したのだ。

やがて御列が姿を現しました。いつのまにか内玉垣南御門をくぐって、前陣の列が松明の明かりを先頭にゆっくりと進んで来ます。時折「オー」と警蹕（けいひつ）の音が聞こえてきます。私たちは起立、低頭して、絹垣で覆われた御列が、ゆっくりと目の前を通り過ぎるのを見送りました。

感動が腹の底からこみ上げてきました。

まるで、ここにいる全員がタイムスリップでもして、天の岩戸開きの神話の世界に迷い込んだような気分です。常世の長鳴鳥（とこよのながきどり）を鳴かせて、賑やかに神楽歌を奏でる。そして大御神さまが再び姿を現し、世界は明るさを取り戻した。あの天の岩屋戸の神話の世界を再現し、大御神様の出御を願う。そして、新宮に向けて進む御列は、八咫の御鏡を奉じた天孫降臨の御列をおもわせる光景です。今から一千三百年も前のむかしの宮廷に仕える人たちが、この儀式を考えて、そして、天皇の勅裁をうけ最初の御遷宮を果たしたのです。そして、現代においてもその儀式は忠実に営まれ、私たちは、神代

の時代に誘われ、いま それを目の当たりにしている。たずさわっているのは、今の人たち。みな、私の知る人ばかりです。だけれども、これを見せてくれているのは、千三百年前に活躍した人たちなんだ……。そう思うと、太古の日本人と、つながれたような気持ち。遠い遠い祖先の霊と一体になれたかのような気がして、なんとすごいことなんだろう……。これが、日本民族のすばらしさなんだ……。こういったことを大切に守り伝えることの出来る民族は、世界広しと言えども、日本人しかない。日本民族だからこそ、守りつたえる事が出来たのだ……。そのことに気がつく、体が震えて、感動がこみ上げてきました。雅楽の調べと、時折身震いする程威厳のこもった警蹕の声を聞きながら、目頭があつくなりました。

御列を最後まで見送ったあと、私たちもその後ろに続きました。石階を降りると、報道のカメラと、大勢の奉拝者が目に入りました。皆、伏して御列を見送っています。畏れながら、その前を私たちも進みました。新宮に着き、再び、板垣内の奉拝席に座りました。相変わらずの虫の声と静寂。

ご神体と共に、ご神宝類が正殿に納められるまでしばらく時間がかかるはず。ずいぶん経ってから、再び雅楽の調べが聞こえ、御扉の閉まる音が聞こえてきました。気

がつくと、いつの頃からか、また風が吹いて、杉の太木を大きく揺らしています。

ああ、とうとう入御したのだ。全ての儀式が終わるまで、ふたたび、じつとしていました。

前回の遷御の儀では、かすかな微風が新宮にむけて吹いており、入御したら、今度は新宮から外に向ってかすかな微風が吹いていたという奉仕体験を先輩から聞いたことがあります。今回は、騒がしい程、上空で風が吹き荒れました。しかし、不思議と出御を迎えたそのときには、風がやんだのです。また、後日に参道沿いで奉拝をしていた人たちから、

遷御の列と共に、一陣の風が吹き抜け、とても感動したという話を聞きました。

「神風の伊勢の国」

神風は伊勢の枕詞です。二十年に一度、遷御の儀では大御神さまを迎えるときに、天の岩屋戸開きの神話を再現する儀式を行う。そしてまた、神聖な八咫の鏡が、私たちの前に現れるとき、天孫降臨の神話さながら、風がやんで静寂に包まれた。このような、不思議な現象がおこるなんて…。

遷御の儀のすばらしさを本当に実感する貴重な体験でした。自分はとても幸せ者であり、このことのすばらしさを世に伝える使命を与えられたような、そんな気がしています。

和の心

村田和之

なんと荒廃した世相になったことでありましょうか。自然も人間も、そして、世界も、又、日本の国も。

私には地球絶滅の入り口に來たように思えてならないのであります。

三年前起こった東日本の未曾有の大震災、死者、行方不明者、一万八千人、未だ二十六万七千人の人々が不自由な避難生活を強いられている中で、思い出しますのは、あの震災時、被害に遭いながらも乱れる行動も無く整列して支援物資を受け取り、お互いに助け合い、協力し、支え合って生きている姿。

世界中の人々が注目し、美しく尊い民族だと褒め称えられた日本民族。

後に生き残った人々が「亡くなられた人たちに恥じぬよう生かされた命を大切に精進していきたい」と犠牲になられた人に誓う姿を。

しかし、今、日本中で、日本の古き伝統を、精神を、心を踏みにじるような様子が目に

付くのであります。

埼玉県で起こった入学式。担任となるべき先生が、自分の子どものために欠席する行動。又、小学校の校長たる人が覚醒剤を使用していたとのニュース。また、最近、中・高年層の中に覚醒剤を使用する人が増えているといえます。昨年一年間で一、五〇〇人の逮捕者を出しました。

また、大人でなく小さな子どもにも影響は出ております。インターネットで一度も会ったことのない異性とも簡単に待ち合わせ色々な事件を起こす現状であります。

一方、外国に目を向けると、スキ有らば自分の領土にしようと、もくろむ行動、力で抑えるために内紛を起こすなど、世界中が何か狂ってきているのであります。

今私は広島県の街で一五九団体の組織を束ね暴走族に走る青少年を健全育成すべく取り組み、十六年目となります。設立時は二度も流産し三度目によりやく設立スタートしました。その流産した理由は学校側の発言でありました。広島は片寄った組合の強い土地柄、当然といえば当然であったのかもしれませんが、ボランティアの心で、日本の未来を背負い翔く若人に大人として日本人らしく人の道にはずれないように願う立場として残念でなりません。

しかし、これも私達大人の責任であり若いお父さんやお母さんをしっかりと指導できなかったことに原因があるのだと頑張るほかはありません。

今の若いお父さん、お母さんに父親病、又、母親病という病を、私達が作ってしまったことであります。

父親が本来の親としての教えが判らない、母親が子育てを知らない。動物にも劣る姿となつてゐるのであります。

急務は先ず私達親が親として育たなければ子どもの教育はできないということであります。各家庭の親と、学校の教員、先生を変えなければ、日本の国は立て直すことができないということでもあります。

しかし、世の中の人々はお蔭様で、遅まきながら忘れ去られていた日本魂にようやく氣付いてきました。

私達日本民族には、世界に誇るべき万世一系の天皇と、一三〇〇年の歴史を受け継ぐ、伊勢の御遷宮があります。

昨年の十月、遷御が斎行され、第六十二回の御遷宮が無事に行われました。

毎年八〇〇万人の参拝を見る神宮、昨年は一五〇〇万人にも及び、全国各地のお社でも、

お蔭様で同じくその影響を見ることができました。それは、ただ、神社のお詣りだけでなく、各家庭のお墓参りにも及び、又、天皇陛下への尊敬も大幅に増加したとの大変喜ばしい調査結果を見ることができました。

今こそチャンスです。

日本民族は「日出る国」。世界をリードすべき模範となるべき国柄。あの韓国の旅客船セウォール号の沈没事件の放映を見て下さい。我先にと逃げる船長の姿を……。日本にはこんな船長さんは一人もいませんよ。

昭和三十二年十月四日、初めて人工衛星スプートニク一号をロシアが打ち上げ、次いで三十六年四月十二日、ロシア初の人間衛星ウオストーク一号に乗り、地球を一周半廻った、あのガガーリン中尉、「地球は青かった」との第一声に飛びあがって喜んだ世界中。それから四十五年、平成二十六年一月元旦、ロシアのソユーズ宇宙船で約半年間一八八日間という長期滞在をされた、我らが日本人、初の国際宇宙ステーションの船長、若田光一さんが書かれた書初めの「和の心」こそ、私達日本人が忘れてはならない、国安かれと祈り、民安かれと祈り、世界の人々の共存共栄とを祈る日本人の誇るべき大和魂。これぞ、この地球を救うべく世界の先達としての日本人の生きるべき、とるべき責務があることを教え

ているのであります。

明治天皇御製

よもの海みなはらからと思う世に

など浪風のたちさわぐらむ

おごそかに保たざらめや神代より

うけつぎ来るうらやすの国

(広島県 長束神社 宮司)

鎮守の森に生かされて

染谷 淑子

皆様こんにちは。今日は当神社へ御参拝いただきましてありがとうございます。本日もこの様に神様の御前に皆様の元氣な明るいお顔をお見せできること、また美しく淨い心で御神前に集へることを心よりお喜び申し上げます。

さて、この神社に古来より伝へられる伝承によりますと、景行天皇の御世からこの地域のみな様に大切に守られてまいったそうでございます。地元の方々は畏れ謹んで神社の名称を直接口にすることなく別称として「お伊勢山」と呼びならわしております。しかし、残念なことに古くから別称で呼びしている長い年月の間に、本当の名称がいつしか忘れられてしまったのが現在の状態でございます。

御祭神は「大日靈貴命（おおひるめのむち）」様で天照大御神様の別称となります。明治の頃に、素戔鳴尊様として八坂神社が村名、都部（いちぶ）より合祀され、字名、二本榎より木花開耶姫様が浅間神社として合祀されました。また同時期に亀田森稻荷神社、足

尾山神社、雷神社、月夜見様、数多くの水神社等が合祀されております。

今月は水無月。もう今年も半分過ぎてしまいました。毎年、当神社で六月三十日に浅間神社のお祭りがとり行われます。江戸時代の頃には、その通称が「草刈浅間」と申していたそうで、その時代の貴重な労働力であった女性や子供達が、定期的に野草の生い茂る頃でもありますので、その農作業の合間に鎌を手にしたまま木花開耶姫様の美しく、心も強く、火の中で天つ神と国つ神を結ぶ三人の御子をご出産になったという古事記の伝へ木花開耶姫様に習って参拝したことでした。大正期になりますと、「初浅間」「宵浅間」と呼ばれ、その一年の間に生まれた新生児に産着を着せて、また子供達には新しい着物を着せて参拝するようになり、華美になったものだと古老が眉を顰めたといった記録も残っております。現在もその祭礼は地域の皆様のご協力、総代様のご協力と官公の市役所、警察、消防署のご指導の基に実施されております。

地方の県の小さな市の小さな村の小さな神社のお祭りではありますが、その地域においての夏に先駆けてのお祭りであり、また「宵浅間」と呼ばれるように夕方盛んに行われますので、定まった六月三十日の日は、平日でも多くの子供達や、もとの子供達にもご参拝いただいております。この日は、小学校の先生方も部活は無しにしてくれるそうで、子供

達は口々に「今日は学校を早く帰れたから神社へ明るいうちに來られた。」と喜び勇んで報告してくれます。いくつかの小学校の生徒達は、土日や平日に境内に誘い合わせて集まりまして、参拝後掃除を自主的にしてくれます。小学一年の四月の頃には、小さい筈でも大変そうに振り回していた子供達が、皆大きくなって三年生四年生になると大人の箒を使いたがる様になり、取り合いになるという微笑ましい姿を見させていただいております。

この神社のある地域は、ご承知のように「坂東太郎―利根川」と大変汚染された水質で有名でありました「手賀沼」に挟まれた細長い「馬の背」のようにやや小高い地勢を示しています。川の恵み、沼の恵みが豊かで、かつての相馬御厨もかくやと想像するのも楽しい事です。水流の強弱によつては、人間も動物も、さらには楽しみな収穫も流されてしまい、生活の全てを失うこともあったであります。その小さい土地を利用して「草切り」と称される数軒の家によつて開かれ周囲に広がっていった為にこの地域は樹木の少ない土地柄でございます。その上に近年は参道の松の木が立ち枯れてしまい、杉の木が数本残るだけとなりました。境内には御神木である椎の木と銀杏の木がありまして、七月には緑の美しい境内となり、御祭神の神様方にもにこにこ笑顔で子供達の元気な声とご奉仕の

姿を見てくださっていると拝察しております。子供達は銀杏の葉が前日お掃除しても、翌朝また黄色く地面を染めているのを熊手で荒く掻き集めて山にし、その上でくるくる回転して遊んだ後に箒で上手に集めて男の子達が掘ってくれた穴に捨ててくれます。戦後境内地は縮小し、周囲の畑や竹林は住宅地化され、年二回の落ち葉の季節には近隣の皆様に迷惑おかけして心苦しく思っております。申し訳ございません。

このような神社でございますが、不思議に思いますことは、子供達が本殿の傍に行きたがること、特にやつと歩けるようになった幼い子供達が男女の区別なく本殿に大変興味を持つことでございます。「神様は本当に子供が大好きで、子供も神様も自分達を可愛いと思っていらいっしやるのがわかる」のではないのでしょうか。本日はこのような拙い話を聞いていただきまして感謝申し上げます。ありがとうございます。

(千葉県 天照神社 八幡神社 櫛宜)

中今を生きる

宮田 修

皆さんのお宅には、神棚と仏壇があると思います。そして毎朝手を合わせているでしょう。とても大切なことです。息子さんや娘さんは、都会に出てしまっているという家が多いでしょう。せいぜいお盆と正月に帰るぐらいでしょう。なかなかこの田舎では良い仕事が見つかりませんから仕方のない事かも知れません。息子さんや娘さんの家に神棚や仏壇がありますか。残念なことに都会ではない家が圧倒的に多いのです。神棚や仏壇を作りなさいと言ってもなかなか賛成してもらえないでしょう。そこで皆さんにお勧めしたいことがあります。とても簡単なことです。神棚や仏壇の上に先祖の写真が飾られています。亡くなったお父さん、お母さん、そしておじいさん、おばあさんです。中には若くして戦死された方もおられるでしょう。この写真のコピーを作りましょう。そしてその人の名前やどういう人だったのかを書いてみましょう。ホームセンターに行って額縁を買います。お米や野菜ができると都会の子どもたちに送りますよね。その時、写真と一緒に送り

ましよう。そして家の居間に飾るように言ってください。どうしてこのようなことをすると良いのか。私はこう考えます。皆さんの子どもさんたちの家に孫が生まれます。その孫がそうですね、2歳ぐらいになったとしましょう。その時、写真を見て必ず訊くはずです。「パパ、ママこの人だあれ」そうしたら皆さんの子どもさんは送られてきた紙を見て「この人はね、パパのおじいちゃんで名前は」と説明をするでしょう。その時、皆さんのお孫さんはそうか僕の命はこの人から伝えられたのだと無意識に感じる事ができるのです。私は、自分の命がご先祖から伝わり、そして自分が大人になれば今度は子孫に伝えることになるのだと自覚することはとても大切であると考えています。

誰でも両親がいます。その両親にも親がいます。その親にも親がいます。一つの命には、2、4、8、16、32、64…の命が関わっているのです。そして大切なことは、その無数とも言える命の中の1つでもなかったら今の自分はいないのです。命が繋がりませんから。大人になると結婚します。子どもが生まれます。その子どもにもやがて子どもができ、命は、永遠に続いていくのです。

今生きている自分は、命がずっと続いている中の今を生きている。中今を生きる。日本人は古来人の命をこう考えてきました。

自分の命は、祖先からお預かりし、子孫に伝えるものと日本人は考えてきたのです。

私は神職になるため勉強を進める中でこの日本人の伝統的な考え方に出会い、ハンマーで頭を殴られる思いでした。そして感動しました。戦後の教育では「個人」を大切にするあまり親は親、子どもは子どもそれぞれ独立した人格であると私は信じてきました。

私は今は日本人の伝統的な考え方が正しいと思っています。

私の父親の実家を訪ね墓参りをしました。

私の家は鎌倉時代まで遡れるそうです。墓石の隣に初代から先代まで宮田家のご当主の名前が石に刻まれていました。それを見て私は実に和やかな気持ちになることができました。です。この名前の人たちが今生きている私の命に関係している人たちだ。従ってこの人たちは皆私を見守ってくれるはずだ。お先祖様は私に不利益なことをするはずがない。実に暖かい気持ちになることができました。有難いことだなと思いました。皆さん是非都会に住む自分の子どもそしてお孫さんに命の繋がりを感ずることができるようにしてほしいのです。そのために是非写真を送ってください。

以前「援助交際」という忌わしい出来事がありました。お金をもらって体を売る絶対してはいけない「売春」です。なぜこんなことをするのか少女たちの心の中を考えてみました。

彼女たちは、こう考えたのではないでしょうか。私は、独立した一人の人間である。自分が考え決めたことによって何か不利益なことが起こったとしても最終的に自分自身で責任をとるのだから何をするかは自分の自由である。そんなことをしてたとえ子どもを産めない体になってしまったとしてもそれは仕方がない。残念なことだと思っています。

もしこの子が、中今を生きる」という考え方を知っていたらおそらく違っていたでしょう。彼女は、こんなことをしたら両親はどう思うだろうか、悲しむに違いない。おじいちゃん、おばあちゃんは卒倒してしまうのではないか思いを巡らせと自分の心にブレーキをかけたのではないでしょうか。

戦後、核家族化が進み、親子三代が共に暮らす家庭が少なくなりました。それだけ日々の暮らしの中で、命の繋がりを意識出来ることが少なくなりました。日本人の伝統的な考え方、中今を生きる、もう一度見直していただきたいと思っています。

(千葉県 熊野神社 宮司)

昭和天皇と南方熊楠翁

佐 古 一 洌

紀州和歌山が生んだ天才に、南方熊楠翁がおります。熊楠の熊は神の化身、楠は神聖な霊木を意味します。名は体を表わす通り、彼は正に巨人・超人そして奇人でもありました。翁は若き日、単身アメリカ大陸へ渡り艱難辛苦放浪の旅をします。或る時はサーカスの象使いの下働きを、又或る時は踊り子のラブレターの代筆もしました。後欧州に渡り、イギリス大英博物館で勉学をして大成をしたのであります。

その専門とするところは、植物学・博物学・民俗学……これらの範疇をはるかに超えたスケールの大きな碩学であります。翁は実に「東洋のレオナルド・ダ・ヴィンチ」とも称えられております。

○

明治三十九年（一九〇六）時の政府は『神社合祀令』なるものを発します。西洋の合理主義の影響で、神社は一町村一社で良いと言うものです。正に「神狩り」「神様のリストラ

をやつてのけようとしたのであります。是により例えば、三重県は六、五〇〇社あったものが七分の一の九四〇社に激減。熊楠翁の住む和歌山県は三、七〇〇社の五分の一にあたる七九〇社に減つてしまいました。

当時全国神社一九万社あったものが、統廃合後は一万社となつてしまいました。

鎮守の杜の消滅は何を意味するか。樹木の伐採による自然破壊が生じます。即ち、森に生息していた小さな動物そして植物も絶滅し生態系が壊れ、山林の消滅による鉄砲水の被害はもとより、害虫の異常発生ともなりました。

この『合祀令』の非、あやまちをいち早く指摘し、その反対運動を展開したのが熊楠翁であります。しかし孤立無援、孤軍奮闘し、その過激さで警察沙汰となり、十八日間の拘留をも経験しました。

やがて、翁の熱意・真心・正論が理解され始め、更に民俗学者柳田国男や地元国会議員の協力を得て、大正九年（一九二〇）『合祀令無益』つまり、無効決議がなされて終息にむかつたのであります。

熊楠翁こそ、昨今のエコロジストの大先覚者であり、又我国の鎮守の杜を護った大恩人でもあります。

彼の人と為りは、実に豪放磊落、直情独行でありましたが、大むね不遇の生涯を送りました。その翁に一生に一度の栄光が訪れます。それは、昭和天皇への学問のご進講であります。

時は昭和四年（一九二九）、生物学のご造詣殊の外深い昭和天皇様は、海路お召し艦にて紀伊田辺にお立ち寄りになり、その神島に於いて翁は多年に亘る研究成果の蘊奥を披講し奉ったのであります。

予定時間をはるかにオーバーし、又天覧に供し奉りかつ献納の標本―通常桐箱に納めるところ、キャラメルのパール箱の簡易なものでありました。しかし昭和天皇は、翁のその純朴さ、天真爛漫ぶりを嘉みし給うたのであります。

かくして、天聴に達し龍顔を拝し指呼の間で、ご進講の榮に浴したことを、彼生涯の誉れとして「長生きはすべきものなり、小生ごとき薄運の者すら長生きすれば、天日を仰ぐ日もあり」と述懐して、

一枝も心して吹け沖つ風わが天皇のためでましし森ぞ

と和歌一首を詠み、狂喜、感嘆をして止まなかったのであります。

又昭和天皇様も後年、昭和三十三年（一九五八）再び紀州行幸の折、

雨に煙ぶる神島を見紀伊の国の生みし南方熊楠を思う

とお詠みになり、翁のことを印象深くお心に留め給うたのであります。

○

神道禊の大家・川面凡児の『格言集』に曰く、

小人は身のためを思い

中人は家の為に思い

大人は国のためを思い

哲人は世界のためを思い

至人は宇宙万般を思いて止まずと。

昭和天皇様は正に大人・哲人・至人であらせられます。又南方熊楠翁も然り。故にこそ両者の琴線が触れ合い、かかる美談が成立したものとしきりに思うものであります。

（京都府 松尾大社 名誉宮司）

『平家物語』に見る御祭神「長谷部信連」

山下 裕嗣

私は山中温泉の鎮守白山神社の欄宜でございますが、うちの場合は本務のお社が三社あるようなものなんです。山中温泉地区には、氏神様の白山神社。ここが本務のお社です。また山中は漆器の産地でもあり、木地轆き、漆器の祖神様惟喬親王をお祀りする東山神社。そして、山中温泉再興の祖、長谷部信連をお祀りする長谷部神社。今からこの長谷部信連についてお話をさせていただきます。

長谷部信連は平安時代末期の久安三年、西暦で申しますと一一四七年、正月十六日に遠江国の長邑、現在の静岡県浜松市あたりでお生まれになったと伝えられています。清和源氏の流れを組み、近衛・後白河両天皇に仕え、一六歳で滝口の武士となりました。院に忍び入った盗賊にたった一人で立ち向かい、四人を討ち取り、二人を生け捕りにしたという功績により「左兵衛尉（さひょうえのじょう）」に任ぜられたようです。左兵衛尉は警

察組織の三等官つてとこでしようか。

信連はその後、後白河天皇第二皇子の以仁王に仕え、三条宮侍と言われます。以仁王は歴史上有名な人物ですから、御存知の方もあるかと思いますが、平氏から源氏へ政治が交代する歴史のいちばん大事な所に居た一人です。学校では「以仁王の挙兵」として扱われていると思います。以仁王の挙兵は、六年にわたる「治承寿永の乱」、いわゆる「源平合戦」の火ぶたを切る、我が国の歴史転換の大きなポイントです。今日は、長谷部信連のお話をしておりますので、詳しくは延べませんが、この源平合戦を含む歴史物語が『平家物語』なのであります。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響有り。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夢のごとし。云々」

超有名な『平家物語』の冒頭文です。第一巻から第十二巻まであり、このうち四巻以降は源平合戦の一部始終であります。…で、そのきっかけになる部分に、長谷部信連が大活躍をされております。巻第四の「信連」の帖をかいつまみながらお話しいたします。

先にこの場面の歴史背景を簡単にお話します。先ず「以仁王」。後白河天皇の第二皇子ですので、以仁親王と称されるべきなのですが、平家の陰謀により親王の宣言が下され

ないままにされております。親王になられていないので皇太子にもなれず、兄二条天皇の亡くなった後は、その子で甥の六条天皇がわずか生後九か月で即位し、続いて弟の高倉天皇となり、その後もその子安徳天皇が、わずか三歳で即位します。いずれも平氏の陰謀によるもので、以仁王は源頼政と平氏打倒を決意するわけです。

『平家物語』 信連

宮は、五月十五日夜の雲間の月を眺めさせたまひ、何の行方も思し召しよらざりけるに、源三位入道の使者とて、文持つて忙しげに出で来たり。宮の御乳母子（おんめのとこ）、六条の亮の大夫宗信、これを取って、御前へ参り、開いてみるに、

「君の御謀反既に現はれさせたまひて、土佐の畑へ流し参らすべしとて、官人ども御迎へに参り候ふ。急ぎ御所を出でさせたまひて、三井寺へ入らせおはしませ。入道もやがて参り候べし」

『平家物語』 信連の冒頭です。いよいよ平氏打倒の計画を練っていた以仁王でしたが、ある夜、源頼政の使者が御所を訪れ、この計画が既に露見していて、以仁王を土佐に島流しにしようと役人どもが向かっているとの事。すぐに御所を出て、三井寺で落ち合おうと

いう場面から始まります。

さあ、どうしようかと悩んでいる以仁王に、長谷部信連が女房装束、いわゆる女装をして出かけることを提案いたします。以仁王はその提案を受け入れ、髪を乱し、重ねた衣に市女笠で出かけます。(写真) この画像は、幕末から明治の浮世絵師、月岡芳年が『月百姿』に描いた「高倉月」という作品で、『平家物語』のまさにこの場面。女房装束で出かける以仁王と、それを見送る長谷部信連が描かれています。

さて、御所に残った信連は、一緒に残った女房達をあちらこちらへ隠れさせ、役人が来た時にみつとも無くないよう、御所内を見回っている時に、ある大事なものを見つけます。それは、以仁王が大事に持っていた「小枝」という笛でした。「宮は必ずこれを取りに帰って来てしまふに違いない！」そう思った信連は笛を持って御所を飛び出し、五町先まで進んでいた以仁王の一行に追いついて届けるのです。

信連の思う通り、以仁王にはとても大事な笛であったようで、「死んだら棺に入れよ」とまで申されたようです。そして以仁王は信連に、そのままお供に加わるように促されるのですが、

信連申しけるは、

「ただ今、御所へ官人どもが御迎へに参り候ふなるに、御前に人一人も候はざらんが、無下にうたてしう候ふ。信連が、この御所に候ふとは、上下みな知られたる事にて候ふに、今夜候はざらんには、それもその夜は逃げたりけりなんどいはれんこと、弓矢取る身にはかりにも名こそ惜しう候へ。官人ども、しばらくあいしらひ候うて、打ち破つてやがて参り候はん」とて、走り帰る

信連が申し上げます。今、御所に役人どもが宮を迎えに来られるでしょう。御所に一人もないという事ではいけません。ましてやこの信連がお仕えしているという事は、上の者も下の者もみんなが知っている事。逃げたと言われる事は、武士として恥ずかしく、名も惜しい。役人どもをあしらひ、打ち破つてすぐに参ります。といつて館に走り帰ります。自らの立場をわきまえ、主君の名を汚さないよう。また現代人が失ひ始めている、名誉名声をも重んじて、自らの名に傷をつけず、後世の子孫にも遺恨を残さないよう行動をしております。こういった信連の一つ一つが、長谷部の家、長の家の始祖となり、神さまとしてもお祀りされる礎となった事は言うまでもありません。

さて、御所に帰った信連は、御所の総門も裏門も共に開いて待ち受けます。やがて、源兼綱、源光長ら総勢三百余名が御所に押し寄せます。…実はこの源兼綱が義理の父である

源頼政に密告し、いち早く以仁王が逃げる事が出来るのですが…。

「御謀反の聞こえ候ふによって、官人ども別当宣を承り、御迎へに参つて候ふ。

急ぎ御出で候へ。」と申しければ、長兵衛尉大床に立つて、

「これは当時は御所でも候はず。御物詣で候ふぞ。何事ぞ、事の子細を申さ

れよ」といひければ云々

源光長が馬に乗ったまま門から入り、「謀反の疑いがあるので、「別当宣」（いわゆる逮捕状のようなものです。）を持つて迎えに来たぞ。急いで出ろ。」と言え、信連は「ここは今は御所ではないし。主も不在である。何事なのか、事の詳細を申されよ。」と反論いたします。

光長が「どこへ行くことがあるうか、役人ども入つて探すよう」指示をすると、また信連が反論し、「物事をわきまえない役人だ、馬に乗ったまま門から入ったけしからん奴が何を言うか、ここに左兵衛尉長谷部信連が居るぞ。近寄つて怪我をするな。」…とは言つても、こっちは一人、相手は三〇〇名以上という事で、役人の中の一人の強者「金武」という男が口火を切つて床に上がります。これに同僚十四、五人が続いて大乱闘となります。信連は御所の中を熟知しておりますので、夜の館では有利です。しかしながら多勢に無勢、

十四、五人切り伏せたところで太刀の先三寸ほどが折れてしまします。信連はいよいよ自害しようと思腰を探りますが、腰の短刀は落ちて無くなっており、相手の太刀に乗っかって果てようと思いますが乗り損ね、傷を負ったまま生け捕りにされ、六波羅に連行されます。

入道相国は簾中に居たまへり。前右大将宗盛卿、大床に立つて、信連を大庭に引き据えさせ、

「まことにわ男は、『宣旨とは何ぞ』とて切ったりけるか。多くの庁の下部を、刃傷（にんじょう）殺害したんなり。せむずるところ糺問して、よくよく事の子細を尋ね問ひ、その後河原に引き出だいて、首（こうべ）を刎ね候へ」とぞ宣ひける。

入道相国とは時の最高職、ここでは平清盛です。清盛が御簾の内に居て、三男の宗盛が前で詮議をします。「おまえは、『宣旨とは何ぞ』と言って、多くの役人を切ったのである。委細調査の後、河原に引きだして、首を刎ねろ。」というわけです。信連はこれに動じもせずに、嘲笑って、

「このほどよなよなあの御所を者が窺ひ候ふ時に、何事のあるべきと存じて、用心も仕り候はぬところに、鎧うたる者どもが、打ち入って候ふを、何者ぞ、

と問ひ候へば、『宣旨の御使』と名乗り候ふ。山賊、海賊、強盜など申す奴

ばらは、或は『公達の入らせたまふぞ』、或は『宣旨の御使』などと名乗り候

ふと、かねがね承つて候へは、『宣旨とは何ぞ』とて、切つたる候ふ。云々

信連が言います。「最近夜な夜な何者かが窺っていたのですが、何事があるうと用心もせずに居たところ、突然鎧を着けた者どもが入ってきて、「何者だ！」と問えば「宣旨の御使」と名乗った。山賊、海賊、強盜などもそのように名乗ると聞いていたので切つたまでだ云々

悪びれもせずに信連は、山賊海賊の類だと思ったので切つたまでだと云います。またこの後には、自分が武器を着けて戦つていれば一人も無事では返さなかった、とまで言っています。さらに以仁王の行方については、

また宮の御在所は、いづくにか渡らせたまふらん、知り参らせ候はず。たとひ知り参らせて候ふとも、侍ほんの者の、申さじと思ひ切つてんこと、糺間に及んで申すべしや。とてその後は物も申さず。

宮のおられる場所、どこに行かれたのかは存じません。たとえ知っていたとしても、侍たる者が申すまいと決めたことは、糺問されたくらいでは申しません。と言ってそれ以降

何にも話さなかったという事です。

この立ち居振る舞いが、平家の侍たちの心に響き、人々が口々に惜しみあったようで、清盛がどう思われたのかは知りませんが、死一等を免れ、伯耆の国の日野へ島流しになります。

源氏の世になって、東国へ下り、梶原平三景時について、事の根元、一々に申しければ、鎌倉殿神妙なりと感じ思召して、能登国に御恩蒙りけるとぞ聞こえし。

源氏の世になって、梶原平三景時に一切を話したところ、鎌倉殿（源頼朝）が感心して、能登に所領を頂いたという事です。…と、平家物語に伝えられます。

物語の納めの通り、長谷部信連公は能登の地頭として国を治めていた時、加賀の加藤成光を討ち取ったことで、加賀国塚谷保（今の山中温泉）を加領されます。そして、鷹狩に入ったその地で、いで湯の流れに脚を浸して傷を癒す白鷺を発見。温泉を守らせるために、家臣十二名をこの地に住まわせたのが、今の山中温泉へと繋がって参ります。

今回の研修テーマは「今やろう！青少年の神道教化」まさに個人尊重の世の中で、子供たちが社会の一員である事を教えられずに利己的になり、成人となっても社会の歯車に合

せられずに脱落していく姿が見られます。『平家物語』の長谷部信連公は、物語であるが故にデコレーションされていると思います。しかし、主君の為に働き、そこで自らが果たすべき役割をしつかり認識し、命も顧みずに行動する姿は、現代の青少年に欠けているものであると思います。

長谷部信連公はまさに命がけの行動をし、しかしながら自害もできず、死罪も免れ、何かの力によって「生かされて生きて」おられたのです。そして、自らが開いた運で能登の地頭職に就き、山中温泉では奇跡ともいふべき温泉再興を果たし、能登、加賀の地で神さまとして祀られているわけです。

どうか皆様、長谷部信連公の御神徳を戴かれながら、この世に生かされて生きる社会の一員として、自分の置かれるべき立場、自分の為すべき事をしつかりと踏まえて、敬神生活を送って頂きたいものです。

(石川県 白山神社 禰宜)

紙面を賑わしている　終活と蘇活

寺　本　正　徳

この前ここで話を聞いて頂きましたのに、また新しい月が巡ってきましたネ。

今日は、いま紙面を賑わしている新造語「終活と蘇活力」について考えてみましょうか。
ある新聞の余録氏の書かれた文章を引用させて頂きますとネ…

終活とは…自分が元気なうちに自分の葬式や財産処理方法、遺言状等々を整理しておく、併せて人生の終焉をどう迎えるか整理準備しておく…これが終活だと結んでおられます。またネ、これ等を手助けする人生の終焉クリニックまでもが出現し大繁盛しているとも付け加えられています。この記事に目を通し乍ら、これもご時世かなと思つた次第です。

更に余録氏は、やがて日本でも年間一五〇万人もの死者が出る時代がくる、先進国オランダでもスイスでも安楽死が合法化されているように日本でも少子化・高齢化社会が急速に進み、平均寿命が上がると同時に「これ以上生きても仕方がない、早く死にたい」と願

う時代がやってくる、その時のためにも準備を怠るまいと忠言しておられます…。

また厚生労働省の人口動態調査によりますと、いまから二十年もすると、六十五歳以上の高齢化世帯主が全人口の四割以上を占める時代がくる。加えて社会環境も大いに化する真摯に生から死までを考えざる時代がくると指摘しています。

冒頭で話しましたように、終活語も蘇活力語も時代を反映する新造語です。因みに手元の広辞苑第二版を捲って見ましたら載っておりませんでした、新造語です。ほんまに「生から死」までを考える時代になったんですネ…。

こんな新造語の必要でない時代には出来ないものでしょうか。私たちが受け継いできた大和民族の遺伝子の中には、「死後のことは残った人に託す」、「親は子の面倒を見る」、「子は親に感謝の誠を尽くす」、これだったんですネ…ところが悲しいことに戦後も七十余年過ぎますと「喉元過ぎれば熱さ忘れる、隣はなにをする人ぞ」の事無かれ主義が蔓延するそのことは淋しいですネ。

こんな理屈を言う私は、国民小学校三年生の夏休み最中に、昭和天皇様の終戦の詔書を伏して拝聴したものです。私より一寸上の人達は学童疎開に、開墾に辛酸を舐められたのです。ある人は祖国のために散って行かれたんです。そんな時代もあったんですよ。いま

平和を謳歌し、なに不自由なく生活させて頂いております、
熱さも、苦しさも忘れた世界に生かさせて頂いております……感謝、感謝の毎日です。

そんな時代背景を写したのかもしれませんが、
「蘇活力」本が大ブームなんだそうです（これです。新聞の広告を見せる）。発売と同時に八万部を突破したと宣伝しています。野次馬根性丸出しで書店に出向いて見ましたら、蘇活力本が山積みにしてあり、沢山の人が手に取って読んで居られました。横合いから手に取り目を遣りますと、
「人生をいきいきと生きる健康法の秘訣」とか、
「血流をコントロールして弱った体を蘇えらせる健康法」とかの活字が踊っていました。

目を通した瞬間、脳味噌を走ったのは「この本の著者のカリスマ性、人を引き付ける吸引力の凄さ」に、ただただ驚いたものです。一億総国民が救済願望に走るその心理を上手に突いた本だなと思った次第です。機がありますと一度目を通して見られたら如何でしょうか。……私は本の宣伝マンではありません。

ところで、あの青空説法で有名な寂聴先生がラジオ深夜便の中で「……誰でも、何方様でも死後のことは判りません。だって誰一人としてあの世から帰った人はいませんでしよ。生まれてくる時も一人、死んで行く時も一人、誰一人として付き合ってくれませんか。死

んだら「空」になるんよ。「無」になるんよ。心配することは要りません。死後の世界は仏様が守って下さるんよ。どんなに金銀財宝を蓄えていても、なに一つあの世に持っていけないのよ。終活なんて言うけどこの世はこの世、あの世はあの世、仏様に任せましょ。楽になるんよ」と、明るく説法されていました……この一言で無精に楽になったのを思い出しました。

そう言えば、毎年冬になると古老達が囲炉裏のそばに集まってきた、田舎弁丸出しで、地獄、極楽談義に花を咲かせていました。

「……なあ、この世は生きるも地獄、死ぬるも地獄、ほんま一寸先は闇じゃけえのう。地獄、極楽はお迎えがこにゃ判らんけえ、そんならこの世は、神様に任そうか、そんなら死後は仏様じゃのう」それがええで」と会話が弾んでいました。

新聞の余録氏が書かれたように、新造語の終活語も蘇活語も必要としない時代が早かれ遅かれこないものかと願う今日この頃です。

あつ時間がきましたか。最後に一言だけ、先に黄泉の国に旅立たれた日本帝国最後の軍人、故・小野田少尉が遺言を残されました「日本人の誇りを忘れるな……日本人らしさを取り戻せ」この情熱の一言を忘れてはなりません。

いまの日本は、隣国から世界から暴論に晒されています。しかし、冷静に行動し、日本人らしさを忘れるな、日本人の誇りを取り戻す、これを合言葉に賢明に沈着に行動しようではありませんか。時と場合によつては、流行言葉も必要でしょう、無意味な流れに竿さす勇氣と無意味な漂流は止めたいものです。

昔々、大昔、古老達が談笑していましたように、「この世は神様に、あの世は仏様に、みんなお任せしようよ」と名言を残してくれた。これを信じて希望に生きましょう。

いま目の前に少子化・高齢化社会が音を立てて近づいています。家庭介護も死後の世界も面倒みきれなくなる。ほんま心情とは裏腹に世状が混沌とし否応無しに無味乾燥な時代がくる。だがネ和民族の精神文化の原点は不変です。死後のことは残った人に任す、親は子の面倒を見る、教育する、子は親に孝行の誠を尽くす。こんな古きよき時代を取り戻しましょうよ。護持しましょうよ。

最後にもう一度声高らかに申し上げます。特に今日ここにお集まりの皆さんに申し上げます。お話の冒頭にも話しましたように、小野田少尉の日本人への遺言状「日本人の誇りを忘れるな、日本人らしさを取り戻せ、日本人の心を失うな」この遺言を持ち帰って下さいネ。『らしさ』の「お・も・て・な・し」をして下さいよ。心の底から雄叫びを上げて

下さいよ、後期高齢の爺さんからのお願いです。たのんますよ。

さて、こんな話に熱を出してましたら、外の方では、今日の献湯神事の準備が相整ったとの合図が入りました。ご一緒に祭場に移動しましょう。神様の御恵みを受けましょう。今日も皆様方にも、ご家族ご一統様にも幸福が訪れますように。

ハイ…二礼、二拍手、一礼で神様にご挨拶しましょう。神の恵みと祖先の恩に感謝し一礼…軽く頭を下げてください…

(大阪府 稻荷神社 禰宜)

神道講演全国協議会との出会いから

佐々木美津子

十年一昔と言いますが、私にとりまして神道講演会に参加し今年は、ちょうど十年目になり、あつという間の短い十年でありました。

神道講演全国協議会との出会いは、平成十七年五月中堅神職研修会で講話指導をしてくださいました秋田神社庁の佐藤先生が「八月二十三日から二十五日まで神道講演全国協議会が塩釜神社で開かれるので佐々木さん参加してみたら」と紹介して頂きました。

その協議会は第二十一回宮城大会でした。当時の村田会長様をはじめ皆様方の講話は、迫力のあるすばらしいお話で二十三番目の私は、足ががくがく震え女子神職としてご奉仕することを必死で述べた最初の参加でした。

第二十二回大会は北の果て北海道土別神社、芦原先生の暖かいおもてなし旭川動物園の白熊さん。

第二十三回大会は男性神職の皆様と禊した奈良大会。

第二十四回伊勢大会は、前日六月十六日内宮の月次祭に沿道にて参加することが出来ました。午後十時暗く静まります境内を池田厚子斎主様をはじめ神職の方の参進は鎮守の森に浅靴の音がザッザッザッと響き厳かに行われ神風が身にしみる思いで静かに祈りました。

第二十五回茨城大会において石井先生、佐古先生の御霊祭に参加させて頂き、生前お逢い出来なかった両先生への想いが身近に感じ、参列した皆様のお話に私も石井先生、佐古先生と一緒に活動したかの様に感じられた御霊祭であったことが未だに不思議に思われます。

松陰神社で行われました二十六回山口大会。知らず知らず吉田松陰線先生の武士道の世界に吸い込まれている感じがさえました。帰りに原先生、鈴木先生と一緒に武運長久、学問の神として祭っていらっしやいます吉田松陰先生を参拝することが出来ました。

二十三年三月十一日に発生しました東日本大震災。陸前高田市は瓦礫の山、行方不明者の遺体の搜索、火葬、葬儀、避難所への炊き出し等々で参加をあきらめておりました。しかし十年間はどうな事があっても休まず参加しようと決意した塩釜神社での姿を思い出し

締め切りが過ぎたある日事務局にお願いし、村田会長様のご配慮により第二十七回沖縄大会に参加することが出来ましたが、震災の事が頭から離れることはありませんでした。

沖縄の海は美しく澄んでおりました。震災後海は恐ろしい、憎いと思っていた私ですが陸前高田市のかつての青い美しい海が目には浮かび光差す沖縄大会でした。

翌年広島から船に乗って第二十八回愛媛大会へ参加しました。島に近づく「瀬戸の花嫁」の音楽が流れ心が和みました。瀬戸内海の間を見えますと幼い頃より親しんだ海が蘇り美しい高田松原で遊んだ数々の面影が浮かび懐かしさでいっぱいでした。

第二十九回京都大会は松尾大社境内地に並ぶ京都神社庁で行われました。この秋十一月当神社の氏子七十名による伊勢の遷宮旅行で松尾大社の正式参拝そして生寫宮司様のご講話頂き氏子の皆様に大変喜ばれました。この際のことに関しても神道講演全国協議会のご縁があったのと大変感謝しております。

そして十年目の記念すべき第三十回石川大会。平成十七年から二十六年の十年間のうちに参加出来るようにない年もありましたが、「どんなことがあっても休まず参加しようと決心した私」を願いかなって実現することが出来ました。十年間で約三百五十数名の方々と出会うことが出来ました。たくさんのご講話を聴き学ぶことの多い十年間でありました。

人の道を教えて頂き下さいました、神道講演全国協議会の皆様。人と人ふれあう中から生まれた絆。(神のみこともちとして体験豊富で見事なご講話)

大震災の時には遠くより駆けつけ励まして下さいました会長様はじめ原先生、鈴木先生全国に住まいする神道講演全国協議会の皆様方から多くの物資励ましの手紙を送り頂き涙の出るほど嬉しく思い感謝致しました。

今年の春高校を卒業した一男君。校舎が震災で流され隣町の仮校舎での高校生活を終え警察学校に入学しました。

彼は市役所に勤めていた父とパートで勤めていた母を震災で失い当時小学生だった妹と祖母と仮設生活でした。淋しがる妹の世話をしながら自分の気持ちを抑えられぬ日もあり、夜遅くまで遊び歩いた日もあったとか…。そんな時に白い防護服を着た県警の警察官が海岸のそばで行方不明者の捜索にあたる姿を見ました。時には田んぼに足を突っ込みながら懸命に捜索する様子を目の当たりにしたこともありあきらめない姿に胸を打たれ「自分も警察官になりたい」と警察学校に入り柔道を練習したり逮捕術や職務を学んだりする毎日。祖母に反発したあの姿は見られないほど成長した機動隊員になり自分の育った陸前高田市

を良くしたいという強い思いで頑張っている一男君、震災を経験した頼もしい若者の姿を見ることが出来ました。東日本大震災から四年目を迎える三月十一日。同じように小雪散る寒い日三陸の海に向かい震災で亡くなった人々へ冥福を祈りました。多くの遺族が参列する中で行われた慰霊祭では、息子を亡くした歳老いし母の姿、まだ見つからぬ父の姿を求める娘の姿、母のそばで身動きせず手を合わす幼児の姿、時折海から吹く風が亡くなった多くの御霊の声に聞こえ悲しみの中にも厳かに行うことが出来ました。

生かされた私達は亡くなった方その無念さとその数倍もの遺族の悲しみ悔しさを未来に語り伝えていかなければと新たな決意と一月も早い復興への願いをかみ締めました。

神道講演全国協議会の流れを築いて下さいました石井寿夫先生、佐古幸嬰先生、神社界のため一生を捧げられました大先生方が神去りまして先生方の教えの万分の一でも恩返しできればと神明奉仕にはげむ決意でおります。

ねえ そんなに悲しまないで

私はあなたのそばにいるの

でもねそんなに悲しんでいると

私の放つほんのわずかなサインに気が付かないの

私に何が起こったか記憶が途切れるの

でも大切なあなたにあなたに会いたくて

ありふれた日々を一緒にすごしたかった

伝え忘れた言葉を届けたい

ねえ そんなに自分を責めないで

あなたは悪くないの

そつと風に乗って伝えに来たの

私はあてもないままさまよっているの

ただ大切なあなたにあなたに会いたくて

笑うことを忘れないで

あなたの笑顔が好きなの

徳川家康公と久能山東照宮

落合偉洲

1、徳川家康公

徳川家康公は、天文十一年（一五四二）十二月二十六日、三河国岡崎城にて父松平広忠公（十七歳）・母お大の方（十五歳）の長男として出生されました。幼名を竹千代といいます。天文十八年（一五四九）八歳の時、駿府今川義元のもとに人質として赴くことになり、永禄三年（一五六〇）今川義元が桶狭間で戦死するまでの十一年を駿府で過ごし、岡崎城に帰還します。また天正十四年（一五八六）に浜松城から駿府に異動して、約四年間を過ごし、江戸城へ移ります。そして、慶長十二年（一六〇七）に大御所として駿府に移り、元和二年（一六一六）駿府城で薨去されるまでの十年間を合計すると、七十五歳の生涯のうち二十五、人生の三分の一を駿府、静岡で過ごされたことになります。

人質時代の少年期には、臨濟寺住職による教育を受けて、天下泰平の世の中の実現に大

志を抱き、諸外国との平和外交の大切さを学んで行きます。

豊臣秀吉公が亡くなると家康公は、朝鮮との和睦を目指し、慶長四年（一五九九）、対馬の宗義智（そうよしとし）をして交渉の任に当たらせて、同六年までに四回の使者を送りますが、三度までは、捕らえられて明国送り、最後の使者が返書を持ち帰り、和平の道が開かれていきます。慶長八年（一六〇三）征夷大將軍となって江戸幕府を開きます。

小説徳川家康二十六巻の著者山岡莊八は「私が家康の伝記の中でいちばん強く心を惹かれるのは、彼が征夷大將軍に任ぜられると、まっ先に発した百姓の『一斬捨て禁止令』である。もうひとつは『朱子』の新註を出版していることである。まさに破天荒のことである。一方で学問を尊重しながら、一方で百姓の憂いを真剣の除こうと考えている。」と言っています。朝鮮より捕虜の返還要求があり、慶長九年（一六〇四）までに男女一七〇二人を送還し、同年朝鮮より使者が對馬へ、さらに京都に來たので伏見城にて引見し和睦を議して帰しています。

慶長十年（一六〇五）家康公は、京都伏見に滞在、円光寺僧、閑室元信に命じて、木活字で『貞觀政要』『吾妻鏡』『孔子家語』などを出版させました。これらの書物は特に「伏見版」といわれます。そして慶長十二年（一六〇七）駿府に大御所として入城すると、林

羅山も駿府入り、二十六歳で公の侍講となり、論語、三略など講義するとともに、外交文書や諸法度の起草にも深く関与、公蒐集書籍約一万冊を「駿河文庫」として管理します。さらに家康公は、銅活字の鑄造を林羅山、金地院崇伝等に命じて元和二年までに総数十一万本鑄造、元和元年『大藏一覽集』（仏教の教えの主要部分を抜き出し分類した本）を元和二年『群書治要』四十七卷（県立中央図書館蔵）を印刷させました。『群書治要』は、唐の諫争（かんそう）で有名な魏徴（ぎちよう）が唐の太祖（たいそ）の勅命により編纂。群書中より治政に役立ちまた手本となる項目を抜粋して編纂した書物です。これらは、日本初の銅活字印刷本で「駿河版」といいます。

家康公の文教政策は、「人倫の道 明らかならざるより 自ずから世も乱れ国も治まらずして騒乱止む無し。この道理を諭し知らんとならば、書籍より外にはなし。」（『武野燭談』）ということになります。

また家康公の外交理念は「軍事、戦争を避けて、経済振興による国の平和的發展を標榜」ということになろうと思います。慶長十四年には オランダ国王に朱印状を出しています。「おらんだ船日本エ渡海の時、何之浦ニ雖為着岸、不可有相違候、向後守此旨、無異議、可被往来、聊疎意有間敷候也、仍如件。」という内容で、最後に朱印「源家康忠恕」が押

されています。これは「源家康は真心を尽くして他人を思いやる心を世界に広める」という意味になります。

同年九月、フィリピン総督の任を終えて、メキシコに向い航海していたロドリゴ・デ・ベビロの一行が、暴風雨に遭い、千葉県の御宿にガレオン船サンフランシスコ号で漂着しました。乗船員三七三名、五十六人溺死し、三一七人を村民が救助しました。特に海女さんたちが命がけで海に飛び込み仮死状態の船員を自分の体温で温めて蘇生させたという感動的な話が伝わっています。大多喜城主本多忠朝の明断により、遭難者を大多喜城内や岩和田大宮神社で手厚い保護を村民とともに施しました。ベビロはその後、江戸に出て、二代将軍秀忠公に会い、さらに駿府まで来て家康公に面会します。

慶長十五年（一六一〇）家康公は三浦按針に命じて伊東で作らせた西洋型帆船一二〇トンを用意して田中勝助等二十一名の日本人が操縦して、ベビロ一行をメキシコまで送り届けています。

慶長十六年（一六一一）五月、メキシコを統治するスペイン副王ルイス・デ・ベラスコは、ベビロ一行の海難救助御礼と田中勝助ら返還のために司令官セバスチャン・ビスカイノを日本に派遣。一行は、七月、公および秀忠公に謁し、駿府の家康公にお土産を持って来ま

した。その中に金銅製の洋時計がありました。その後この時計は、久能山東照宮の神庫で三百年に及ぶ永い眠りにつくことになります。永い眠りの、目覚まし時計役になられた方は、新村出（しんむらいずる）博士。新村博士は、岩波書店の『広辞苑』の編者で著名な南蛮文化研究の大家。新村博士によれば、静中時代明治二十一年頃、博士の父親は、幕臣で県知事関口隆吉、叔父潜は久能山東照宮神職で、たびたびこの時計を見に行かれたといえます。その後、東大の旧友辻善之助博士に、写真を添えて紹介、辻博士は、当時編輯に従事しておられ大日本史料に掲載。その結果学界に広く周知されることになりました。

昭和二十九年と昭和三十年の二回に亘りこの時計は、修繕された。国立科学博物館朝比奈貞一博士と腕利きの時計屋さんとともに、銹を落とし、部品手直し油をさしたら、完全に可稼動するようになりましたが、昭和三十年十一月十九日午後七時半から二十日午前六時半頃までの間に、この時計を初め宝物九点が、久能山東照宮宝物館から盗まれました。その後、十二月一七日の毎日新聞朝刊に「東照宮宝物盗難」あれからどうなったか記者のメモからⅡという記事が発表され、その中で「静大付属小二年森舜比古（きよひこ）君は『こわしたりすてたりしないで、そつと返してください。返すとき、もしおまわりさんに見つかったらばくがあやまってあげます』と小さな胸をいためた文章を本社静岡支局に。捜査

陣懸命の努力の結果、三月二日、午前六時十五分頃、有力容疑者として三十才無職の男を静岡市西草深町の下宿先で逮捕。この日の夕刻森少年は、おとうさんと一緒に静岡南署の鈴木署長を訪ねて、とうかおじさんの罰を軽くしてやってくださいと懇願。署長は、その後、森少年に対して特別の計らいを。午後五時半から十分間ほど、犯人との面会を許可。犯人は、これが投書の坊やだと聞いて大喜び「この世の中で僕を救ってくれたのは坊やの真心だけだった。このやさしい気持をいつまでも失わないでください」と心からうれしそうに握手し「刑を終えて出所したら真っ先にお礼に行きます」と約束して別れたそうです。

この時計は、家康公の平和外交を物語る貴重な歴史資料で国の重要文化財に指定されていますが、国宝に指定されるように様々な活動を展開しています。

2、久能山東照宮の位置

徳川家康公は、元和二年四月二日頃、家臣たちを集めて遺言を残しました。その内容は次のようなものでした。「自分が死んだら久能山に西の方角に向けて埋葬する事。葬式は江戸の増上寺で行う事。位牌は岡崎の大樹寺に建てる事。一年経ったら日光に小さな祠

を建立し神として祀る事。」

家康公は、それから半月後、元和二年（一六一六）四月十七日、巳の刻（午前九時〜午前十一時）駿府城にて七十五歳でその生涯を閉じました。御遺骸は遺言によりその日のうちに、小雨の降る久能山には運ばれました。久能山は、静岡市駿河区根古屋にある海拔二一五^{メートル}の有度山系の中の独立した山です。そして四月十九日、神葬祭によって葬儀が執り行われました。二十二日二代將軍秀忠公久能山に登り、そこに有った久能城を撤去して神社の創建を指示、五月より建設開始、翌年十二月七日に竣工。一年七ヶ月で現社殿他の建造物が竣工しました。久能山東照宮は、久能山の中腹に鎮座する神社で、平成二十七年御鎮座四百年祭を迎えます。徳川家康公を主祭神とし、相殿に織田信長公と豊臣秀吉公を祀っています。

久能山東照宮は、南南西の方角を向いています。その正面に御前崎、直線距離で約五十^キロ。この御前崎と久能山東照宮を地図の上で線を引くと、久能山東照宮の後方約五十^キロに富士山。さらにその延長線上に日光東照宮が鎮座。日光東照宮は南を向いており、その方角に江戸城があります。

3 久能山東照宮社殿―家康公のメッセジ―

久能山東照宮の社殿は、本殿と拝殿を繋ぐ建物、石の間から構成されています。この様式を権現造りといい、総漆塗り、極彩色の壮麗な建物で平成二十二年十二月二十四日、国宝に指定されました。

いつ自分の命が奪われるかも知れない戦争の時代が終わり、七十年近く経って平和な世の中であるはずの現在。しかし毎年年間三万人前後の人が自分の命を絶ち、六千人前後の人々の命が交通事故で奪われています。信じられない理由による殺人も枚挙に暇がありません。

家康公は、その生涯の大半を戦い抜いて、戦国時代に終止符を打たれました。しかし戦が終わるさえすれば平和な世界が到来するとは思っていなかったようです。人々が人倫の道を弁えなければ天下泰平の世にならない、それには書籍の出版が必要としてそれを実行し、太平の世の実現に情熱を傾けられました。その家康公から、今の時代を生きている私達に、何か伝言は無いだろうか、社頭に立って少し考え探してみました。そして、久能山東照宮社殿に施された極彩色の彫刻の中に、大事な伝言のあることに気付きました。

まず社殿の中央にある蛙股「司馬温公の甕割り」です。司馬温公は、中国北宋時代に活

躍した学者でもある政治家です。彼が子供の時、遊んでいた友達が大きな水甕に転落、近くにあった石を投げて甕を割りその命を救ったという話を伝えています。理由を告げて父親に甕を割ったことを詫びると、父親は、甕はいくら高価な物であってもお金で買えるが、人の命はお金では買えない大切なものと言って、命の大切さを教えたと言います。

家康公が後の世に生きるすべての人々に対して、最も伝えたいこと、それは、自分の命も他人の命も同様に命を大切にして欲しいということです。

また唐門その他にある「唐獅子と牡丹」も大切な伝言を持っています。百獣の王と言われる獅子。百花の王といわれる牡丹。頭も体も心も鍛えて獅子ように強くなれ、そして牡丹の花のように美しく優しくあれ。家康公は、私たちに強くて優しい人になって欲しい、自分の命も他人の命も大切にして欲しいという気持ちで、社殿の彫刻を通して、訴え続けています。

おわりに

社頭に集う児童・生徒にこの説明をして「自分にして欲しくないことは、他人にしない。自分が言われたら嫌なことは他人に言わない。他人を笑わせて喜ばせるつもりでの冗談も、

他人を傷つけるような言動は慎むこと、自分の命も人の命も大切にして欲しい。」と語りか掛けています。そして、常に学び、考え、行動する。自分の利害に関わること以外のことを、どれだけ多くを学び、考え、行動するか、そこに人間の本当の心の豊かさや幸があるのではないかなどと思ったりしています。

（静岡県 久能山東照宮 宮司）

第三十回神道講演全国研修大会・石川大会の記録

於 白山比咩神社

神社本庁総合研究所長

顧問 問

田中 恆清

小林 直毅

(新潟県神社庁長)

宮川 脩

(福井県神社庁長)

加藤 治樹

(石川県神社庁長)

尾崎 定輝

(富山県神社庁長)

真弓 常忠

(住吉大社名誉宮司)

矢野 憲一

(元神宮禰宜)

村山 和臣

(白山比咩神社宮司)

佐古 一洌

(松尾大社名誉宮司)

大会 会長

実行委員長

実行副委員長

々

参 与

実行委員

々

々

々

々

々

々

々

々

々

々

落合 偉洲 (久能山東照宮宮司)

山本 行恭 (椿大神社宮司)

村田 和之 (長束神社宮司)

芦原 高穂 (旭川神社宮司)

生寫 經和 (松尾大社宮司)

小串 和夫 (熱田神宮宮司)

鍵 三夫 (志波彦神社鹽竈神社宮司)

河本 文夫 (宮尾八幡宮宮司)

藺田 稔 (秩父神社宮司)

谷田 勉 (劔緒神社宮司)

長曾我部延昭 (伊豫豆比古命神社宮司)

戸内 康雅 (心清水八幡神社宮司)

中木屋 豊 (稻荷神社宮司)

塙 東男 (笠間稻荷神社宮司)

事務局局長

々々々々々々々々々々

宮川 脩

(福井県護国神社宮司)

山下 裕嗣

(白山神社禰宜)

山田 一孝

(靜内神社宮司)

山元 義清

(老杉神社宮司)

渡邊 知宣

(正野神社宮司)

— 実行委員五十音順

畠田 明彦

(六條八幡宮宮司)

村田 和弘

(長束神社禰宜)

村瀬 佳子

(長束神社権禰宜)

上谷 義房

(松尾大社権禰宜)

鈴木 明子

(立木神社権禰宜)

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事長	参与	副会長	副会長	会長	顧問	顧問
河本	鍵	小串	生	芦原	村田	山本	落合	佐古	矢野	真弓
文夫	三夫	和夫	經和	高穂	和之	行恭	偉洲	一洌	憲一	常忠
宮尾八幡宮宮司	志波彦神社鹽竈神社宮司	熱田神宮宮司	松尾大社宮司	旭川神社宮司	長東神社宮司	椿大神社宮司	久能山東照宮宮司	松尾大社名誉宮司	元神宮禰宜	住吉大社名誉宮司

幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	幹事	事務局長
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	------

蘭田 稔	谷田 勉	長曾我部延昭	戸内 康雅	中木屋 豊	塙 東男	宮川 脩	山下 裕嗣	山田 一孝	山元 義清	渡邊 知宣	畠田 明彦
------	------	--------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------

秩父神社宮司	劔緒神社宮司	伊豫豆比古命神社宮司	心清水八幡神社宮司	稻荷神社宮司	笠間稻荷神社宮司	福井県護国神社宮司	白山神社欄宜	靜内神社宮司	老杉神社宮司	疋野神社宮司	六條八幡宮宮司
--------	--------	------------	-----------	--------	----------	-----------	--------	--------	--------	--------	---------

平成二十六年六月現在

神道講演全国大会のあゆみ

大 会		開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講 話 集
第一回	東京大会	昭和四十六年八月四～六日	神社本庁		石沢 久英	久保田博人	
第二回	広島大会	昭和五〇年八月八～一〇日	塩屋神社		石沢 久英	河野 貞愛	
第三回	伊勢大会	昭和五十四年八月二七～二九日	神宮会館		冢瀬 好一	山本 行隆	五十鈴川
第四回	九州大会	昭和五十八年六月七～一〇日	太宰府天満宮		西高辻信貞	宇都宮正元	神国の春
第五回	みちのく大会	平成元年八月二一～二三日	高山稲荷神社	工藤 伊豆	新山 昌孝	平澤 明穂	平成の民の祈り
第六回	伊勢大会	平成二年八月二〇～二二日	椿大神社	岡本 健治	山本 行隆	二橋 一彦	うまし国日本
第七回	東京大会	平成三年八月二七～二九日	全国神社社会館	大野 俊康	山本 行隆	青島清三郎	食国の祈り
第八回	宮崎大会	平成四年八月二四～二六日	宮崎神宮	大宮 四郎	山本 行隆	本部 雅裕	
第九回	愛媛大会	平成五年七月一九～二一日	愛媛県護国神社	大宮 四郎	山本 行隆	小川 純生	天翔るみたま
第一〇回	東京大会	平成六年七月二一～二三日	靖国神社	大宮 四郎	山本 行隆	坂 明夫	
第一一回	北海道大会	平成七年八月三～五日	鳥取神社	山本 行隆	鈴木 瑞彦	奥谷由起子	大禊
第一二回	広島大会	平成八年七月一六～一八日	三瀧荘	山本 行隆	村田 和之	村田 和弘	
第一三回	伊勢大会	平成九年七月一七～一九日	神宮会館	山本 行隆	矢野 憲一	中村 昌司	神路山
第一四回	京都大会	平成一〇年八月二七～二九日	八坂神社	真弓 常忠	佐古 一洌	嶋田 達久	追憶

大会	開催年月日	開催場所	大会会長	実行委員長	事務局長	講話集
第一五回 東京大会	平成二一年九月九～十一日	全国神社会館	宮西 惟道	村田 和之	生寫 經和	神国の教え
第一六回 愛媛大会	平成二二年八月三～二五日	石鎚神社	十亀 興美	村田 和之	生寫 經和	伊予の雄叫
第一七回 石川大会	平成二三年九月四～六日	白山比咩神社	山崎 宗弘	村田 和之	生寫 經和	白嶺
第一八回 鹿児島大会	平成二四年八月二～二三日	霧島神社	高橋 弘平	村田 和之	生寫 經和	肇国の誓ひ
第一九回 愛知大会	平成二五年六月二五～二七日	熱田神社	小串 和夫	村田 和之	生寫 經和	剣のこころ
第二〇回 島根大会	平成二六年七月三～一五日	出雲大社	千家 尊祐	村田 和之	生寫 經和	国引の集い
第二一回 宮城大会	平成二七年八月三～二五日	志波彦神社鹽竈神社	字仁 繁儀	村田 和之	生寫 經和	鹽竈ざくら
第二二回 北海道大会	平成二八年六月二二～二三日	士別神社	佐藤 公聰	村田 和之	生寫 經和	朔北のいぶき
第二三回 奈良大会	平成二九年六月一八～二〇日	石上神社	森 正光	村田 和之	生寫 經和	布留の鼓動
第二四回 伊勢大会	平成二〇年六月一七～一九日	神宮会館	高城 治延	村田 和之	島田 明彦	神風のむすび
第二五回 茨城大会	平成二一年六月二四～二六日	茨城県神社庁	塙 東男	村田 和之	島田 明彦	常陸の折り
第二六回 山口大会	平成二二年六月二二～二四日	松陰神社	上田 俊成	村田 和之	島田 明彦	至誠のかがみ
第二七回 沖縄大会	平成二三年六月二二～二四日	波上宮	末安 大孝	村田 和之	島田 明彦	魂の島から
第二八回 愛媛大会	平成二四年八月二八～三〇日	石鎚神社	十亀 興美	佐古 一洌	島田 明彦	愛比賣の睦び
第二九回 京都大会	平成二五年六月二一～二三日	京都府神社庁	田中 恆清	佐古 一洌	島田 明彦	平安の念ひ

あとがき

「今やろう！青少年の神道教化」をスローガンとして、第三十回神道講演全国研修大会・石川大会が、北陸白山比咩神社で開催されました。

参加者は四十五名。昭和十一年生まれを筆頭に平成二年生まれ迄、老いも若きも殊に中堅・ベテラン中心の誠に充実した、しかも内容豊富な学びと鍛錬の、絆もしっかりと結ばれた集いであつたかと思えます。

今回は丁度節目の三十回大会。今日迄日本全国各ブロックを巡り、白山比咩さんは二度目のお世話に相成りました。「十年偉大なり 二十年畏るべし 三十年歴史になる そして五十年神の如し」との言葉がありますが、この『神道講演全国研修大会』が歴史になる三十回を終え、神の如き五十年への道のりを歩みはじめようとしております。

神道教化、そしてそれに連なる神道講演は、神国日本の永遠の使命でもあります。任重くして道遠い感は致しますが、我々神道人は利心とこころを奮い起こして、五十年・百年をめざし

たいものであります。

結びにあたり、白山比咩神社の村山和臣宮司様はじめ職員の皆様、そしてご協賛を賜った北陸各神社庁様のご厚意に対し、心より御礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

第三十回神道講演全国研修大会

石川大会実行委員長

佐古一洌

講話集　く　く　り

—第三十回　神道講演全国研修大会　石川大会—

発行　平成27年7月13日

編集者
装幀者　神道講演全国協議会事務局

印刷所　三重県いなべ市北勢町阿下喜二六七―一
製本所　共栄堂印刷株式会社

発行所　神道講演全国協議会

〒五九〇三五　三重県鈴鹿市山本町一八七一
TEL〇五九（三七）一五一五（代）
FAX〇五九（三七）一六六八

椿大神社社務所内

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします

